



坊っちゃん

夏目漱石



青空文庫



文庫 青空

親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている。小学校に居る時分学校の二階から飛び降りて一週間ほど腰を抜かした事がある。なぜそんな無闇をしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談に、いくら威張つても、そこから飛び降りる事は出来まい。弱虫やーい。と囃したからである。小使に負ぶさつて帰つて来た時、おやじが大きな眼をして二階ぐらいから飛び降りて腰を抜かす奴があるかと云つたから、この次は抜かさずに飛んで見せますと答えた。

親類のものから西洋製のナイフを貰つて奇麗な刃を日に翳して、友達に見せていたら、一人が光る事は光るが切れそうもないと云つた。切れぬ事があるか、何でも切ってみせると受け合つた。そんなら君の指を切つてみると注文したから、何だ指ぐらいこの通りだと右の手の親指の甲をはすに切り込んだ。幸ナイフが小さいのと、親指の骨が堅かつたので、今だに親指は手に付いている。しかし創痕は死ぬまで消えぬ。

庭を東へ二十歩に行き尽すと、南上がりにいささかばかりの菜園があつて、真中に栗の木が一本立っている。これは命より大事な栗だ。実の熟する時分は起き抜けに背戸を出て落ちた奴を拾つてきて、学校で食う。菜園の西側が山城屋という質屋の庭続きで、この質屋に勘太郎という十三四の倅が居た。勘太郎は無論弱虫である。弱虫の癖に四つ目垣を乗りこえて、栗を盗みにくる。ある日の夕方折戸の蔭に隠れて、とうとう勘太郎を捕まえてやった。その時勘太郎は逃げ路を失つて、一生懸命に飛びかかつてきた。向うは二つばかり年上である。弱虫だが力は強い。鉢の開いた頭を、こつちの胸へ宛ててぐいぐい押し拍子に、勘太郎の頭がすべつて、おれの袷の袖の中にはいった。邪魔になつて手が使えぬから、無暗に手を振つたら、袖の中にある勘太郎の頭が、右左へぐらぐら靡いた。しまいに苦しがって袖の中から、おれの二の腕へ食い付いた。痛かつたから勘太郎を垣根へ押しつけておいて、足捌をかけて向うへ倒してやった。山城屋の地面は菜園より六尺がた低い。勘太郎は四つ目垣を半分崩して、自分の領分へ真逆様に落ちて、ぐうと云つた。勘太郎が落ちるときに、おれの袷の片袖がもげて、急に手が自由になつた。その晩母が山城屋に詫びに行つたついでに袷の片袖も取り返して来た。

この外いたずらは大分やった。大工の兼公と肴屋の角をつれて、茂作の人参畠をあらした事がある。人参の芽が出揃わぬ処へ藁が一面に敷いてあったから、その上で三人が半日相撲をとりつづけに取ったら、人参がみんな踏みつぶされてしまった。古川の持つている田圃の井戸を埋めて尻を持ち込まれた事もある。太い孟宗の節を抜いて、深く埋めた中から水が湧き出て、そこいらの稲にみずがかかる仕掛であった。その時分はどんな仕掛か知らぬから、石や棒ちぎれをぎゅうぎゅう井戸の中へ挿し込んで、水が出なくなつたのを見届けて、うちへ帰って飯を食っていたら、古川が真赤になつて怒鳴り込んで来た。たしか罰金を出して済んだようである。

おやじはちつともおれを可愛がつてくれなかつた。母は兄ばかり鼻根にしていた。この兄はやに色が白くつて、芝居の真似をして女形になるのが好きだつた。おれを見る度にこいつはどうせ碌なものにはならないと、おやじが云つた。乱暴で乱暴で行く先が案じられると母が云つた。なるほど碌なものにはならない。ご覧の通りの始末である。行く先が案じられたのも無理はない。ただ懲役に行かないで生きてゐるばかりである。

母が病気で死ぬ二三日前所で宙返りをしてへつついの角で肋骨を撲つて大いに痛かった。母が大層怒つて、お前のようなものの顔は見たくないと云うから、親類へ泊りに行つていた。するととうとう死んだと云う報知が来た。そう早く死ぬとは思わなかった。そんな大病なら、もう少し大人しくすればよかつたと思つて帰つて来た。そうしたら例の兄がおれを親不孝だ、おれのために、おつかさんが早く死んだんだと云つた。口惜しかつたら、兄の横つ面を張つて大變叱られた。

母が死んでからは、おやじと兄と三人で暮っていた。おやじは何にもせぬ男で、人の顔さえ見れば貴様は駄目だ駄目だと口癖のように云っていた。何が駄目なんだか今に分らない。妙なおやじがあつたもんだ。兄は実業家になるとか云つてしきりに英語を勉強していた。元來女のような性分で、ずるいから、仲がよくなかつた。十日に一週ぐらいの割で喧嘩をしていた。ある時将棋をさしたら卑怯な待駒をして、人が困ると嬉しそうに冷やかした。あんまり腹が立つたから、手に在つた飛車を眉間へ擲きつけてやつた。眉間が割れて少々血が出た。兄がおやじに言付けた。おやじがおれを勘当すると言ひ出した。

その時はもう仕方がないと観念して先方の云う通り勘当されるつもりでいたら、十年来召し使っている清きよという下女が、泣きながらおやじに詫あやまつて、ようやくおやじの怒りが解けた。それにもかかわらずあまりおやじを怖いとは思わなかった。かえつてこの清と云う下女に気の毒であった。この下女はもと由緒ゆいしょのあるものだったそうだが、瓦解がかいのときに零落れいらくして、つい奉公ほうこうまでするようになったのだと聞いている。だから婆さんである。この婆さんがどういふ因縁いんえんか、おれを非常に可愛がつてくれた。不思議なものである。母も死ぬ三日前に愛想あいそをつかした——おやじも年中持て余している——町内では乱暴者の悪太郎と爪弾つまはじきをする——このおれを無暗ちんちまうに珍重ちんじゆうしてくれた。おれは到底とうてい人に好かれる性たちでないとあきらめていたから、他人から木の端はしのように取り扱あつかわれるのは何とも思わない、かえつてこの清のようにちやほやしてくれるのを不審ふしんに考えた。清は時々台所で人の居ない時に「あなたは真まつ直すくでよいご気性だ」と賞ほめる事が時々あった。しかしおれには清の云う意味が分からなかった。好いい気性なら清以外のものも、もう少し善くしてくれるだろうと思つた。清がこんな事を云う度におれはお世辞せじは嫌きらいだと答えるのが常であつた。する

と婆さんはそれだから好いご気性ですと云つては、嬉しそうにおれの顔を眺めてゐる。自分の力でおれを製造して誇つてゐるように見える。少々氣味がわるかつた。

母が死んでから清はいよいよおれを可愛がつた。時々はお供心になぜあんなに可愛がるのかと不審に思つた。つまらない、廃せばいいのにと思つた。氣の毒だと思つた。それでも清は可愛がる。折々は自分の小遣いで金鏢や紅梅焼を買つてくれる。寒い夜などはひそかに蕎麦粉を仕入れておいて、いつの間にか寝ている枕元へ蕎麦湯を持つて来てくれる。時には鍋焼餛飩さえ買つてくれた。ただ食い物ばかりではない。靴足袋ももらつた。鉛筆も貰つた、帳面も貰つた。これはずっと後の事であるが金を三円ばかり貸してくれた事さえある。何も貸せと云つた訳ではない。向うで部屋へ持つて来てお小遣いがなくてお困りでしょう、お使いなさいと云つてくれたんだ。おれは無論入らないと云つたが、是非使えと云うから、借りておいた。実は大変嬉しかつた。その三円を蝦蟇口へ入れて、懐へ入れたなり便所へ行つたら、すぼりと後架の中へ落してしまつた。仕方がないから、のそのそ出てきて実はこれこれだと清に話したところが、清は早速竹の棒を捜して来て、取つて上げますと云つた。しばらくすると井戸端でぎあぎあ音がするから、出てみたら竹の先へ蝦

墓口の紐を引き懸けたのを水で洗っていた。それから口をあけて壺円札を改めたら茶色になつて模様が消えかかつていた。清は火鉢で乾かして、これでいいでしょうと出した。ちよつとかいでみて臭いやと云つたら、それじゃお出しなさい、取り換えて来て上げますからと、どこでどう胡魔化したか札の代りに銀貨を三円持つて来た。この三円は何に使つたか忘れてしまった。今に返すよと云つたぎり、返さない。今となつては十倍にして返してやりたくても返せない。

清が物をくれる時には必ずおやじも居ない時に限る。おれは何が嫌いだと云つて人に隠れて自分だけ得をするほど嫌いな事はない。兄とは無論仲がよくないけれども、兄に隠して清から菓子や色鉛筆を貰いたくはない。なぜ、おれ一人に連れて、兄さんには遣らないのかと清に聞く事がある。すると清は澄したものでお兄様はお父様が買ってお上げなさるから構いませんと云う。これは不公平である。おやじは頑固だけれども、そんな依怙鼻負はせぬ男だ。しかし清の眼から見るとそう見えるのだろう。全く愛に溺れていたに違いない。元は身分のあるものでも教育のない婆さんだから仕方がない。単にこればかりではない。鼻負目は恐ろしいものだ。清はおれをもつて将来立身出世して立派なものに

なると思ひ込んでいた。その癖勉強をする兄は色ばかり白くつて、とても役には立たない
と一人できめてしまった。こんな婆さんに逢つては叶わない。自分の好きなものは必ずえ
らい人物になつて、嫌いなひとはきつと落ち振れるものと信じている。おれはその時から
別段何になると云う了見もなかつた。しかし清がなるなると云うものだから、やつぱり何
かに成れるんだらうと思つていた。今から考えると馬鹿馬鹿しい。ある時などは清にどん
なものになるだらうと聞いてみた事がある。ところが清にも別段の考えもなかつたようだ。
ただ手車へ乗つて、立派な玄関のある家をこしらえるに相違ないと云つた。

それから清はおれがうちでも持つて独立したら、一所になる氣でいた。どうか置いて下
さいと何遍も繰り返して頼んだ。おれも何だかうちが持てるような氣がして、うん置いて
やると返事だけはしておいた。ところがこの女はなかなか想像の強い女で、あなたはどこ
がお好き、麴町ですか麻布ですか、お庭へぶらんこをおこしらえ遊ばせ、西洋間は一つで
たくさんですなどと勝手な計画を独りで並べていた。その時は家なんか欲しくも何ともな
かつた。西洋館も日本建も全く不用であつたから、そんなものは欲しくないと、いつでも

清に答えた。すると、あなたは欲がすくなくつて、心が奇麗だと云つてまた賞めた。清は何と云つても賞めてくれる。

母が死んでから五六年の間はこの状態で暮していた。おやじには叱られる。兄とは喧嘩をする。清には菓子を貰う、時々賞められる。別に望みもない。これでたくさんだと思つていた。ほかの小供も一概いちがいにこんなものだろうと思つていた。ただ清が何かにつけて、あなたはかわいそう可哀想だ、不仕合ふしあわせだと無暗に云うものだから、それじゃ可哀想で不仕合せなんだろうと思つた。その外に苦になる事は少しもなかつた。ただおやじが小遣いをくれないには閉口した。

母が死んでから六年目の正月におやじも途中で亡くなつた。その年の四月におれはある私立の中学校を卒業する。六月に兄は商業学校を卒業した。兄は何とか会社の九州の支店に口があつて行ゆかなければならん。おれは東京でまだ学問をしなければならぬ。兄は家を買つて財産を片付けて任地しめつけへ出立すると云い出した。おれはどうでもするがよからうと返事をした。どうせ兄の厄介やっかいになる気はない。世話をしてくれるにしたらとところで、喧嘩をするから、向うでも何とか云い出すに極きまつている。なまじい保護を受ければこそ、こんな

兄に頭を下げなければならぬ。牛乳配達をしても食ってられると覚悟をした。兄はそれから道具屋を呼んで来て、先祖代々の瓦落多を二束三文に売った。家屋敷はある人の周旋である金満家に譲った。この方は大分金になったようだが、詳しい事は一向知らぬ。おれは一ヶ月以前から、しばらく前途の方向のつくまで神田の小川町へ下宿していた。清は十年居たうちが人手に渡るのを大いに残念がったが、自分のものでないから、仕様がなかった。あなたがもう少し年をとっていらつしやれば、ここがご相続が出来ますものとしきりに口説いていた。もう少し年をとって相続が出来るものなら、今でも相続が出来はずだ。婆さんは何も知らないから年さえ取れば兄の家がもらえると信じている。

兄とおれはかように分れたが、困ったのは清の行く先である。兄は無論連れて行ける身分でなし、清も兄の尻にくっついて九州下りまで出掛ける気は毛頭なし、と云つてこの時のおれは四畳半の安下宿に籠つて、それすらもいぎとなれば直ちに引き払わねばならぬ始末だ。どうする事も出来ん。清に聞いてみた。どこかへ奉公でもする気かねと云つたらあなたがおうちを持って、奥さまをお貰いになるまでは、仕方がないから、甥の厄介になりましようとうようやく決心した返事をした。この甥は裁判所の書記でまず今日には差支えな

く暮していたから、今までも清に来るなら来いと二三度勧めたのだが、清はたとい下女奉公はしても年来住み馴れた家の方がいいと云つて応じなかつた。しかし今の場合知らぬ屋敷へ奉公易えをして入らぬ気兼ねを仕直すより、甥の厄介になる方がましだと思つたのだから。それにしても早くうちを持つての、妻を貰えの、来て世話をするのと云う。親身の甥よりも他人のおれの方が好きなのだろう。

九州へ立つ二日前兄が下宿へ来て金を六百円出してこれを資本にして商買をするなり、学資にして勉強をするなり、どうしても随意に使うがいい、その代りあとは構わないと云つた。兄にしては感心なやり方だ、何の六百円ぐらい貰わんでも困りはせんと思つたが、例に似ぬ淡泊な処置が気に入ったから、礼を云つて貰つておいた。兄はそれから五十円出してこれをついでに清に渡してくれと云つたから、異議なく引き受けた。二日立つて新橋の停車場で分れたぎり兄にはその後一遍も逢わない。

おれは六百円の使用方法について寝ながら考えた。商買をしたつて面倒くさくつて旨く出来るものじゃなし、ことに六百円の金で商買らしい商買がやれる訳でもなからう。よしやれるとしても、今のようじゃ人の前へ出て教育を受けたと威張れないからつまり損になる

ばかりだ。資本などはどうでもいいから、これを学資にして勉強してやろう。六百円を三に割って一年に二百円ずつ使えば三年間は勉強が出来る。三年間一生懸命にやれば何か出来る。それからこの学校へはいろいろと考えたが、学問は生来しょうらいどれもこれも好きでない。ことに語学とか文学とか云うものは真平まっぴらご免めんだ。新体詩などと来ては二十行あるうちで一行も分らない。どうせ嫌いなものなら何をやつても同じ事だと思つたが、幸い物理学校の前を通り掛かつたら生徒募集の広告が出ていたから、何も縁だと思つて規則書をもらつてすぐ入学の手続きをしてみた。今考えるとこれも親譲りの無鉄砲から起おこつた失策だ。

三年間まあ人並ひとなみに勉強はしたが別段たちのいい方でもないから、席順はいつでも下から勘定かんじょうする方が便利であつた。しかし不思議なもので、三年立つたらとうとう卒業してしまつた。自分でも可笑おかしいと思つたが苦情を云う訳もないから大人しく卒業しておいた。

卒業してから八日目に校長が呼びに来たから、何か用だろうと思つて、出掛けて行つたら、四国辺のある中学校で数学の教師が入る。月給は四十円だが、行つてはどうだという相談である。おれは三年間学問はしたが実を云うと教師になる気も、田舎いなかへ行く考えも何

もなかった。もつとも教師以外に何をしようと云うあてもなかったから、この相談を受けた時、行きましようそくせきと即席に返事をした。これも親譲りの無鉄砲が祟たたつたのである。

引き受けた以上は赴ふじん任せねばならぬ。この三年間は四畳半に蟄居ちつきよして小言はただの一度も聞いた事がない。喧嘩もせずに済んだ。おれの生涯のうちでは比較ひかくてき的呑気のんきな時節であつた。しかしこうなると四畳半も引き払わなければならぬ。生れてから東京以外に踏み出したのは、同級生と一所に鎌倉かまくらへ遠足した時ばかりである。今度は鎌倉どころではない。大変な遠くへ行かねばならぬ。地図で見ると海浜で針の先ほど小さく見える。どうせ碌な所ではあるまい。どんな町で、どんな人が住んでるか分らん。分らんでも困らない。心配にはならぬ。ただ行くばかりである。もつとも少々面倒臭い。

家を畳たたんでからも清の所へは折々行つた。清の甥むすこというのは存外結構な人である。おれが行くたびに、居おりさえすれば、何くれと款待もてなしてくれた。清はおれを前へ置いて、いろいろおれの自慢じまんを甥むすこに聞かせた。今に学校を卒業すると麴町辺へ屋敷を買つて役所へ通うのだなどと吹聴ふいちやうした事もある。独りで極きめて一人ひとりで喋舌しゃべるから、こつちは困こまつて顔を赤くした。それも一度や二度ではない。折々おれが小さい時寝小便をした事まで持ち出す

には閉口した。甥は何と思つて清の自慢を聞いていたか分らぬ。ただ清は昔風の女だから、自分とおれの關係を封建時代の主従のようになら考へていた。自分の主人なら甥のためにも主人に相違ないと合点したものらしい。甥こそいい面の皮だ。

いよいよ約束が極まつて、もう立つと云う三日前に清を尋ねたら、北向きの三畳に風邪を引いて寝ていた。おれの来たのを見て起き直るが早い、坊っちゃんいつ家をお持ちなさいますと聞いた。卒業さえすれば金が自然とポケットの中に湧いて来ると思つている。そんなにえらい人をつらまえて、まだ坊っちゃんと呼ぶのはいよいよ馬鹿氣ている。おれは単簡に当分うち持たない。田舎へ行くんだと云つたら、非常に失望した容子で、胡麻塩の鬢の乱れをしきりに撫でた。あまり氣の毒だから「行く事は行くがじき帰る。来年の夏休みにはきつと帰る」と慰めてやつた。それでも妙な顔をしているから「何を見やげに買つて来てやろう、何が欲しい」と聞いてみたら「越後の笹飴が食べたい」と云つた。越後の笹飴なんて聞いた事もない。第一方角が違ふ。「おれの行く田舎には笹飴はなささうだ」と云つて聞かしたら「そんなら、どつちの見当です」と聞き返した。「西の方だよ」と云うと「箱根のさききですか手前ですか」と問う。随分持てあました。

出立の日には朝から来て、いろいろ世話をやいた。来る途中とちゆう小間物屋で買って来た齒磨はみがきと楊子ようじと手拭てぬぐいをズツクの革鞄かばんに入れてくれた。そんな物は入らないと云つてもなかなか承知しない。車を並べて停車場へ着いて、プラットフォームの上へ出た時、車へ乗り込んだおれの顔をじつと見て、「もうお別れになるかも知れませんが。随分きげんご機嫌きげんよう」と小さな声で云つた。目に涙なみだが一杯いっぱいたまっている。おれは泣かなかつた。しかしもう少しで泣くところであつた。汽車がよつぽど動き出してから、もう大丈夫だいじやうぶだろうと思つて、窓から首を出して、振り向いたら、やつぱり立つていた。何だか大変小さく見えた。

ふうと云つて汽船がとまると、舢が岸を離れて、漕ぎ寄せて来た。船頭は真つ裸に赤ふんどしをしめている。野蛮な所だ。もつともこの熱さでは着物はきられまい。日が強いので水がやに光る。見つめていても眼がくらむ。事務員に聞いてみるとおれはここへ降りるのだそうだ。見るところでは大森ぐらいな漁村だ。人を馬鹿にしていらあ、こんな所に我慢が出来るものかと思つたが仕方がない。威勢よく一番に飛び込んだ。続づいて五六人は乗つたろう。外に大きな箱を四つばかり積み込んで赤ふんは岸へ漕ぎ戻して来た。陸へ着いた時も、いの一に飛び上がつて、いきなり、磯に立つていた鼻たれ小僧をつらまえて中学校はどこだと聞いた。小僧はぼんやりして、知らんがの、と云つた。気の利かぬ田舎ものだ。猫の額ほどの町内の癖に、中学校のありかも知らぬ奴があるものか。ところへ妙な筒つぼうを着た男がきて、こつちへ来いと云うから、尾いて行つたら、港屋とか云う宿屋へ連れて来た。やな女が声を揃えてお上がりなさいと云うので、上がるのがいやになつた。門口へ立つたなり中学校を教えろと云つたら、中学校はこれから汽車で二里ばか

り行かなくっちゃいけないと聞いて、なお上がるのがいやになった。おれは、筒っぽうを着た男から、おれの革靴かばんを二つ引きたくつて、のそのそあるき出した。宿屋のものは変な顔をしていた。

停車場はすぐ知れた。切符きっぷも訳なく買った。乗り込んでみるとマツチ箱のような汽車だ。ごろごろと五分ばかり動いたと思つたら、もう降りなければならぬ。道理で切符が安いと思つた。たつた三銭である。それから車を備やとつて、中学校へ来たら、もう放課後で誰だれも居ない。宿直はちよつと用達ようたしに出たと小使こつかいが教えた。随分気楽ずいぶんな宿直がいるものだ。校長でも尋ねたずようかと思つたが、草臥くたびれたから、車に乗つて宿屋へ連れて行くと車夫に云い付けた。車夫は威勢よく山城屋やましろやと云ううちへ横付けにした。山城屋とは質屋かんたろうの屋号と同じだからちよつと面白く思つた。

何だか二階の楷子段ほしごだんの下の暗い部屋へ案内した。熱くつて居られやしない。こんな部屋はいやだと云つたらあいにくみんな塞ふさがつておりますからと云いながら革靴ぼうを抛り出したまま出て行つた。仕方がないから部屋の中へはいつて汗あせをかいて我慢がまんしていた。やがて湯に入ると云うから、ぎぶりと飛び込んで、すぐ上がった。帰りがけに覗のぞいてみると涼しそ

うな部屋がたくさん空いている。失敬な奴だ。嘘をつきやあがつた。それから下女が膳を持って来た。部屋は熱つかつたが、飯は下宿のよりも大分旨かつた。給仕をしながら下女がどちらからおいでになりましたと聞くから、東京から来たたと答えた。すると東京はよい所でございましょうと云つたから当り前だと答えてやつた。膳を下げた下女が台所へいつた時分、大きな笑い声が聞えた。くだらないから、すぐ寝たが、なかなか寝られない。熱いばかりではない。騒々しい。下宿の五倍ぐらいやかましい。うとうとしたら清の夢を見た。清が越後の笹飴を笹ぐるみ、むしやむしや食っている。笹は毒だからよしたらよからうと云うと、いえこの笹がお菓でございまずと云つて旨そうに食っている。おれがあきれ返つて大きな口を開いてハハハハと笑つたら眼が覚めた。下女が雨戸を明けている。相変らず空の底が突き抜けたような天気だ。

道中をしたら茶代をやるものだと聞いていた。茶代をやらないと粗末に取り扱われると聞いていた。こんな、狭くて暗い部屋へ押し込めるのも茶代をやらぬまいせいだらう。見すばらしい服装をして、ズツクの革靴と毛織子の蝙蝠傘を提げてるからだらう。田舎者の癖に人を見括つたな。一番茶代をやつて驚かしてやろう。おれはこれでも学資のあまりを三

十円ほど懐ふところに入れて東京を出て来たのだ。汽車と汽船の切符代と雑費を差し引いて、まだ十四円ほどある。みんなやっただけからには月給を貰もらうんだから構わない。田舎者はしみつたれだから五円もやれば驚おどろいて眼を廻まわすに極きまっている。どうするか見ると済すまして顔を洗って、部屋へ帰って待つてると、夕べの下女が膳を持って来た。盆ぼんを持って給仕をしながら、やににやにや笑つてゐる。失敬な奴だ。顔のなかをお祭りでも通りやしまし。これでもこの下女の面つらよりよっぽど上等だ。飯を済ましてからにしようと思つていたが、癩しかくに障さわつたから、中途ちゆうとで五円札さつを一枚まい出して、あとでこれを帳場へ持つて行けと云つたら、下女は変な顔をしてゐた。それから飯を済ましてすぐ学校へ出懸でかけた。靴くつは磨みがいてなかつた。

学校は昨日きのう車で乗りつけたから、大概たいがいの見当は分つてゐる。四つ角を二三度曲がつたらすぐ門の前へ出た。門から玄関げんかんまでは御影石みかげいしで敷しきつめてある。きのうこの敷石の上を車でがらがらと通つた時は、無暗むやみに仰山ぎやうさんな音がするので少し弱つた。途中から小倉こくらの制服を着た生徒にたくさん逢あつたが、みんなこの門をはいつて行く。中にはおれより背が高くつて強そうなのが居る。あんな奴を教えるのかと思つたら何だか気味が悪わるくなつた。名刺めいし

を出したら校長室へ通した。校長は薄髯うすひげのある、色の黒い、目の大きな狸たぬきのような男である。やにもつたいぶつていた。まあ精出して勉強してくれと云つて、恭うやうやしく大きな印の捺おさつた、辞令を渡した。この辞令は東京へ帰るとき丸めて海の中へ抛り込んでしまった。校長は今に職員に紹介してやるから、一々その人にこの辞令を見せるんだと云つて聞かした。余計な手数だ。そんな面倒めんどうな事をするよりこの辞令を三日間職員室へ張り付ける方がましだ。

教員が控所ひかえじよへ揃そろうには一時間目の喇叭らつぱが鳴らなくてはならぬ。大分時間がある。校長は時計を出して見て、追々おほおほゆると話すつもりだが、まず大体の事を呑み込んでおいてもらおうと云つて、それから教育の精神について長いお談義を聞かした。おれは無論いい加減に聞いていたが、途中からこれは飛んだ所へ来たと思つた。校長の云うようにはとても出れない。おれみたような無鉄砲むてつぱうなものをつらまえて、生徒の模範もはんになれの、一校の師表しひょうと仰あおがれなくてはいかんの、学問以外に個人の徳化とくわを及およぼさなくては教育者になれないの、と無暗に法外な注文をする。そんなえらい人が月給四十円で遙々はるばるこんな田舎へくるもんか。人間は大概似たもんだ。腹が立てば喧嘩けんかの一つぐらひは誰でもするだろうと思つてたが、

この様子じゃめつたに口も聞けない、散歩も出来ない。そんなむずかしい役なら雇う前にこれこれだと話すがいい。おれは嘘をつくのが嫌いだから、仕方がない、だまされて来たのだとあきらめて、思い切りよく、ここで断わつて帰つちまおうと思つた。宿屋へ五円やつたから財布の中には九円なにかししかない。九円じゃ東京までは帰れない。茶代なんかやらなければよかつた。惜しい事をした。しかし九円だつて、どうかならない事はない。旅費は足りなくつても嘘をつくよりましだと思つて、到底あなたのおつしやる通りにや、出来ません、この辞令は返しますと云つたら、校長は狸のような眼をぱちつかせておれの顔を見ていた。やがて、今のはただ希望である、あなたが希望通り出来ないのはよく知つているから心配しなくつてもいいと云いながら笑つた。そのくらいよく知つてるなら、始めから威嚇さなければいいのに。

そう、こうする内に喇叭が鳴つた。教場の方が急にがやがやする。もう教員も控所へ揃いましたらうと云うから、校長に尾いて教員控所へはいつた。広い細長い部屋の周囲に机を並べてみんな腰をかけている。おれがはいつたのを見て、みんな申し合せたようにおれの顔を見た。見世物じゃあるまいし。それから申し付けられた通り一人一人の前へ行つて

辞令を出して挨拶をした。大概は椅子を離れて腰をかかめるばかりであったが、念の入つたのは差し出した辞令を受け取つて一応拝見をしてそれを恭しく返却した。まるで宮芝居の真似だ。十五人目に体操の教師へと廻つて来た時には、同じ事を何返もやるので少々じれつたくなつた。向うは一度で済む。こつちは同じ所作を十五返繰り返している。少しはひとの了見も察してみるがいい。

挨拶をしたうちに教頭のなにごしと云うのが居た。これは文学士だそうだ。文学士と云えば大学の卒業生だからえらい人なんだろう。妙に女のような優しい声を出す人だつた。もつとも驚いたのはこの暑いのにフランネルの襯衣を着ている。いくら薄地には相違なくつても暑いには極つてる。文学士だけにご苦労千万な服装をしたもんだ。しかもそれが赤シャツだから人を馬鹿にしている。あとから聞いたらこの男は年が年中赤シャツを着るんだそうだ。妙な病気があつた者だ。当人の説明では赤は身体に薬になるから、衛生のためにわざわざ誂らえるんだそうだが、入らざる心配だ。そんならついでに着物も袴も赤にすればいい。それから英語の教師に古賀とか云う大變顔色の悪い男が居た。大概顔の蒼い人は瘡せてるもんだがこの男は蒼くふくれている。昔小学校へ行く時分、浅井の民さ

んと云う子が同級生にあつたが、この浅井のおやじがやはり、こんな色つやだった。浅井は百姓だから、百姓になるとあんな顔になるかと清に聞いてみたら、そうじゃありません、あの人はうらなりの唐茄子ばかり食べるから、蒼くふくれるんですと教えてくれた。それ以来蒼くふくれた人を見れば必ずうらなりの唐茄子を食つた酬いだと思う。この英語の教師もうらなりばかり食つてるに違いない。もつともうらなりとは何の事か今もつて知らない。清に聞いてみた事はあるが、清は笑つて答えなかつた。大方清も知らないんだらう。それからおれと同じ数学の教師に堀田というのが居た。これは逞しい毬栗坊主で、叡山の悪僧と云うべき面構である。人が叮寧に辞令を見せたら見向きもせず、やあ君が新任の人か、ちと遊びに来給えアハハと云つた。何がアハハだ。そんな礼儀を心得ぬ奴の所へ誰が遊びに行くものか。おれはこの時からこの坊主に山嵐という渾名をつけてやつた。漢学の先生はさすがに堅いものだ。昨日お着きで、さぞお疲れで、それでもう授業をお始めで、大分ご励精で、——とのべつに弁じたのは愛嬌のあるお爺さんだ。画学の教師は全く芸人風だ。べらべらした透綾の羽織を着て、扇子をぱちつかせて、お国はどちらでげす、え？ 東京？ そりや嬉しい、お仲間が出来て……私もこれで江戸っ子ですと云つた。こ

んなのが江戸っ子なら江戸には生れたくないもんだと心中に考えた。そのほか一人一人についてこんな事を書けばいくらでもある。しかし際限がないからやめる。

挨拶が一通り済んだら、校長が今日はもう引き取ってもいい、もつとも授業上の事は数学の主任と打ち合せをしておいて、明後日あさってから課業を始めてくれと云った。数学の主任は誰かと聞いてみたら例の山嵐であった。忌々しいいまいま、こいつの下に働くのかおやおやと失望した。山嵐は「おい君どこに宿とまつてるか、山城屋か、うん、今に行つて相談する」と云い残して白墨はくぼくを持つて教場へ出て行つた。主任の癖に向うから来て相談するなんて不見識な男だ。しかし呼び付けるよりは感心だ。

それから学校の門を出て、すぐ宿へ帰ろうと思つたが、帰つたつて仕方がないから、少し町を散歩してやろうと思つて、無暗に足の向く方があるき散らした。県庁も見た。古い前世紀の建築である。兵営も見た。麻布あさぶの聯隊れんたいより立派でない。大通りも見た。神楽坂かぐらざかを半分に狭くしたぐらいな道幅みちはばで町並まちなみはあれより落ちる。二十五万石の城下だつて高の知れたものだ。こんな所に住んでご城下などと威張いばつてる人間は可哀想かわいそうなものだと考えながらくると、いつしか山城屋の前に出た。広いようでも狭いものだ。これで大抵たいていは見尽みつくした

のだろう。帰って飯でも食おうと門口をはいった。帳場に坐すわっていたかみさんが、おれの顔を見ると急に飛び出してきてお帰り……と板の間へ頭をつけた。靴くつを脱ぬいで上がると、お座敷ざしきがあきましたからと下女が二階へ案内をした。十五畳じゅうごの表二階で大きな床とこの間まがついてゐる。おれは生れてからまだこんな立派な座敷へはいった事はない。この後いつは入れるか分らないから、洋服を脱いで浴衣ゆかた一枚になつて座敷の真中まんなかへ大の字に寝てみた。いい心持ちである。

昼飯を食つてから早速清へ手紙をかいてやつた。おれは文章がまずい上に字を知らないから手紙を書くのが大嫌だいきらいだ。またやる所もない。しかし清は心配してゐるだろう。難船して死にやしないかなどと思つちや困るから、奮発ふんぱつして長いのを書いてやつた。その文句はこうである。

「きのう着いた。つまらん所だ。十五畳の座敷に寝ている。宿屋へ茶代を五円やつた。かみさんが頭を板の間へすりつけた。夕べは寝られなかつた。清が笹飴を笹ごと食う夢を見た。来年の夏は帰る。今日学校へ行つてみんなにあだなをつけてやつた。校長は狸、教頭

は赤シャツ、英語の教師はうらなり、数学は山嵐、画学はのだいこ。今にいろいろな事を書いてやる。さようなら」

手紙をかいてしまつたら、いい心持ちになつて眠気がさしたから、最前のように座敷の真中へのびのびと大の字に寝た。今度は夢も何も見ないでぐつすり寝た。この部屋かいと大きな声があるので目が覚めたら、山嵐がはいつて来た。最前は失敬、君の受持ちは……と人が起き上がるや否や談判を開かれたので大いに狼狽した。受持ちを聞いてみると別段むずかしい事もなさそうだから承知した。このくらいの事なら、明後日は愚、明日から始めると云つたつて驚ろかない。授業上の打ち合せが済んだら、君はいつまでこんな宿屋に居るつもりでもあるまい、僕がいい下宿を周旋してやるから移りたまえ。外のものでは承知しないが僕が話せばすぐ出来る。早い方がいいから、今日見て、あす移つて、あさつてから学校へ行けば極りがいいと一人で呑み込んで居る。なるほど十五畳敷にいつまで居る訳にも行くまい。月給をみんな宿料に払つても追つつかないかもしれぬ。五円の茶代を奮発してすぐ移るのはちと残念だが、どうせ移る者なら、早く引き越して落ち付く方が便利だから、そのところはよろしく山嵐に頼む事にした。すると山嵐はともかくもいつ

夏目漱石

しよに来てみると云うから、行つた。町はずれの岡の中腹にある家で至極閑静だ。主人は骨董こつとうを売買するいか銀と云う男で、女房にようぼうは亭主ていしゅよりも四つばかり年嵩としかさの女だ。中学校に居た時ウィッチと云う言葉を習つた事があるがこの女房はまさにウィッチに似ている。ウィッチだつて人の女房だから構わない。とうとう明日から引き移る事にした。帰りに山嵐とおりちようは通町で氷水を一杯ぱいおじ奢つた。学校で逢つた時はやに横風おうふうな失敬な奴だと思つたが、こんないろいろな世話をしてくれるところを見ると、わるい男でもなさそうだ。ただおれと同じようにせつかちで肝癪かんしゃく持らしい。あとで聞いたらこの男が一番生徒に人望があるのだ。うだ。

いよいよ学校へ出た。初めて教場へはいって高い所へ乗った時は、何だか変だった。講釈をしながら、おれでも先生が勤まるのかと思つた。生徒はやかましい。時々図抜けた大きな声で先生と云う。先生には応えた。今まで物理学校で毎日先生先生と呼びつけていたが、先生と呼ぶのと、呼ばれるのは雲泥の差だ。何だか足の裏がむずむずする。おれは卑怯な人間ではない。臆病な男でもないが、惜しい事に胆力が欠けている。先生と大きな声をされると、腹の減つた時に丸の内で午砲を聞いたような気がする。最初の一時間は何だかいい加減にやつてしまった。しかし別段困つた質問も掛けられずに済んだ。控所へ帰つて来たら、山嵐がどうだと聞いた。うんと単簡に返事したら山嵐は安心したらしかつた。

二時間目に白墨を持って控所を出た時には何だか敵地へ乗り込むような気がした。教場へ出ると今度の組は前より大きな奴ばかりである。おれは江戸つ子で華奢に小作りに出来ているから、どうも高い所へ上がつても押しが利かない。喧嘩なら相撲取とでもやつてみ

せるが、こんな大僧おおぞうを四十人も前へ並べて、ただ一枚まいの舌をたたいて恐縮きようしゆくさせる手際はない。しかしこんな田舎者いなかものに弱身を見せると癖くせになると思つたから、なるべく大きな声をして、少々巻き舌で講釈してやつた。最初のうちは、生徒も烟けむに捲まかれてほんやりしていたから、それ見るとますます得意になつて、べらんめい調を用いてたら、一番前の列の真中まんなかに居た、一番強そうな奴が、いきなり起立して先生と云う。そら来たと思ひながら、何だと聞いたら、「あまり早くて分からんけれ、もちつと、ゆるゆる遣やつて、おくれんかな、もし」と云つた。おくれんかな、もしくは生温なまぬる言葉だ。早過ぎるなら、ゆつくり云つてやるが、おれは江戸っ子だから君等きみらの言葉は使えない、分わからなければ、分るまで待つてるが、いと答えてやつた。この調子で二時間目は思つたより、うまく行つた。ただ帰りがけに生徒の一人がちよつとこの問題を解釈をしておくれんかな、もし、と出来そうもない幾何きこの問題を持つて逼せまつたには冷汗ひやあせを流した。仕方がないから何だか分らない、この次教えてやると急いで引き揚げたら、生徒がわあと囁はさした。その中に出来ん出来んと云う声が聞えきこる。篋べらぼう棒め、先生だつて、出来ないのは当り前だ。出来ないのを出来ないと言ふのに不思議があるもんか。そんなものが出来るくらいなら四十円でこんな田舎へくるもんかと控所

へ帰つて来た。今度はどうだとまた山嵐が聞いた。うんと云つたが、うんだけでは気が済まなかつたから、この学校の生徒は分らずやだなと云つてやつた。山嵐は妙な顔をしていった。

三時間目も、四時間目も昼過ぎの一時間も大同小異であつた。最初の日に出了た級は、いずれも少々ずつ失敗した。教師ははたで見るとほど楽じゃないと思つた。授業はひと通り済んだが、まだ帰れない、三時までぼつ然として待つてなくてはならん。三時になると、受持級の生徒が自分の教室を掃除して報知にくるから検分をするんだそうだ。それから、出席簿を一応調べてようやくお暇が出る。いくら月給で買われた身体だつて、あいた時間まで学校へ縛りつけて机と睨めつくらをさせるなんて法があるものか。しかしほかの連中はみんな大人しくご規則通りやつてるから新参のおればかり、だだを捏ねるのもよろしくないと思つて我慢していた。帰りがけに、君何でもかんでも三時過まで学校にいさせるのは愚だぜと山嵐に訴えたら、山嵐はそうさアハハハと笑つたが、あとから真面目になつて、君あまり学校の不平を云うと、いかんぜ。云うなら僕だけに話せ、随分妙な人も居るからなと忠告がましい事を云つた。四つ角で分れたから詳しい事は聞くひまがなかつた。

それからうちへ帰つてくると、宿の亭主ていしゅがお茶を入れましようと云つてやつて来る。お茶を入れると云うからご馳走をするのかと思つと、おれの茶を遠慮えんりよなく入れて自分が飲むのだ。この様子では留守中るすちゆうも勝手にお茶を入れましようを一人で履行りこうしているかも知れない。亭主が云うには手前は書画骨董しよがこつとうがすぎで、とうとうこんな商買を内々で始めるようになりました。あなたもお見受け申すところ大分ご風流でいらつしやるらしい。ちと道楽にお始めなすつてはいかがですと、飛んでもない勧誘かんゆうをやる。二年前ある人の使つかいに帝國ホテルへ行つた時は錠前直じようまえしと間違まちがえられた事がある。ケツトを被かぶつて、鎌倉の大仏を見物した時は車屋から親方と云われた。その外ごん今日まで見損みそくなわれた事は随分あるが、まだおれをつらまえて大分ご風流でいらつしやると云つたものはない。大抵はなりや様子でも分る。風流人なんていうものは、画えを見ても、頭巾ずきんを被かぶるか短冊たんざくを持つてるものだ。このおれを風流人だなどと真面目に云うのはただの曲者くせものじゃやない。おれはそんな呑気のんきな隠居いんきよのやるような事は嫌いだと云つたら、亭主はへへへと笑いながら、いえ始めから好きなもの、どなたもごぎいませんが、いつたんこの道にはいるとなかなか出られませんと一人で茶を注いで妙な手付てつきをして飲んでゐる。実はゆうべ茶を買つてくれと頼たのんでおいたのだが、こ

んな苦い濃い茶はいやだ。一杯飲むと胃に答えるような気がする。今度からもつと苦くないのを買ってくれと云つたら、かしこまりましたとまた一杯しぼって飲んだ。人の茶だと思つて無暗に飲む奴だ。主人が引き下がってから、明日の下読をしてすぐ寝てしまった。

それから毎日毎日学校へ出ては規則通り働く、毎日毎日帰つて来ると主人がお茶を入れましようとしてくる。一週間ばかりしたら学校の様子もひと通りは飲み込めたし、宿の夫婦の人物も大概は分つた。ほかの教師に聞いてみると辞令を受けて一週間から一ヶ月ぐらの間は自分の評判がいいだろうか、悪るいだろうか非常に気に掛かるそうであるが、おれは一向そんな感じはなかつた。教場で折々しくじるとその時だけはやな心持ちだが十分ばかり立つと奇麗に消えてしまう。おれは何事によらず長く心配しようと思つても心配が出来ない男だ。教場のしくじりが生徒にどんな影響を与えて、その影響が校長や教頭にどんな反応を呈するかまるで無頓着であつた。おれは前に云う通りあまり度胸の据つた男ではないのだが、思い切りはすこぶるいい人間である。この学校がいけなければすぐどこかへ行く覚悟でいたから、狸も赤シャツも、ちつとも恐しくはなかつた。まして教場の小僧共なんかには愛嬌もお世辞も使う気になれなかつた。学校はそれでいいのだが下宿の

方はそうはいかなかつた。亭主が茶を飲みに来るだけなら我慢もするが、いろいろな者を持つてくる。始めに持つて来たのは何でも印材で、十ばかり並べておいて、みんなで三円なら安い物だお買いなさいと云う。田舎巡りのへボ絵師じやあるまいし、そんなものは入らないと云つたら、今度は華山とか何とか云う男の花鳥の掛物をもつて来た。自分で床の間へかけて、いい出来じやありませんかと云うから、そうかなと好加減に挨拶をすると、華山には二人ある、一人は何とか華山で、一人は何とか華山ですが、この幅はその何とか華山の方だと、くだらない講釈をしたあとで、どうです、あなたなら十五円にしておきます。お買いなさいと催促をする。金がないと断わると、金なんか、いつでもようございましてなかなか頑固だ。金があつても買わないんだと、その時は追つ払つちまつた。その次には鬼瓦ぐらいな大硯を担ぎ込んだ。これは端溪です、端溪ですと二遍も三遍も端溪がるから、面白半分に端溪は何だいと聞いたら、すぐ講釈を始め出した。端溪には上層中層下層とあつて、今時のものはみんな上層ですが、これはたしかに中層です、この眼をご覧なさい。眼が三つあるのは珍らしい。澆墨の具合も至極よろしい、試してご覧なさいと、おれの前へ大きな硯を突きつける。いくらだと聞くと、持主が支那から持つて帰つて来て是

非売りたいと云いますから、お安くして三十円にしておきましようと言う。この男は馬鹿ばかに相違そういない。学校の方はどうかこうか無事に勤まりそうだが、こう骨董責こつとうぜめに逢あつてはとも長く続きそうにない。

そのうち学校もいやになった。ある日の晩大町おほいまちと云う所を散歩していたら郵便局の隣となりに蕎麦そばとかいて、下に東京と注を加えた看板があつた。おれは蕎麦が大好きである。東京に居おつた時でも蕎麦屋の前を通つて薬味の香においをかぐと、どうしても暖簾のれんがくぐりたくなつた。今日までは数学と骨董で蕎麦を忘れていたが、こうして看板を見ると素通りが出来なくなる。ついだから一杯食つて行こうと思つて上がり込んだ。見ると看板ほどでもない。東京と断ことわる以上はもう少し奇麗にしそうなものだが、東京を知らないのか、金がないのか、滅法めつぽうきたない。晷たたみは色が変わつてお負おけに砂でざらざらしている。壁かべは煤すすで真黒まっくろだ。天井てんじょうはランプの油烟ゆえんで燻くすぼつてるのみか、低くつて、思わず首を縮めるくらいだ。ただ麗々と蕎麦の名前をかいで張り付けたねだん付ねだんだけは全く新しい。何でも古いうちを買つて二三日にさんち前から開業したに違ちがいなからう。ねだん付の第一号だいいちごうに天麩羅てんぷらとある。おい天麩羅てんぷらを持つてこいと大きな声を出した。するとこの時まで隅すみの方に三人かたまつて、何

かつるつる、ちゆうちゆう食つてた連中が、ひとしくおれの方を見た。部屋が暗いので、ちよつと気がつかなかったが顔を合せると、みんな学校の生徒である。先方で挨拶をしたから、おれも挨拶をした。その晩は久し振に蕎麦を食つたので、旨かつたから天麩羅を四杯平げた。

翌日何の気もなく教場へはいると、黒板一杯ぐらいな大きな字で、天麩羅先生とかいてある。おれの顔を見てみんなわあと笑つた。おれは馬鹿馬鹿しいから、天麩羅を食つちや可笑しいかと聞いた。すると生徒の一人が、しかし四杯は過ぎるぞな、もし、と云つた。四杯食おうが五杯食おうがおれの錢でおれが食うのに文句があるもんかと、さつさと講義を済まして控所へ歸つて来た。十分立つて次の教場へ出ると一つ天麩羅四杯なり。但し笑うべからず。と黒板にかいてある。さつきは別に腹も立たなかつたが今度は癩に障つた。冗談も度を過ぎたぜばいたずらだ。焼餅の黒焦のようなもので誰も賞め手はない。田舎者はこの呼吸が分からないからどこまで押して行つても構わないと云う了見だろう。一時間あるくと見物する町もないような狭い都に住んで、外に何にも芸がないから、天麩羅事件を日露戦争のように触れちらかすんだろう。憐れな奴等だ。小供の時から、こんなに教育さ

れるから、いやにひねっこびた、植木鉢うえきばちの楓かえでみたような小人しょうじんが出来るんだ。無邪気むじゃぎならいつしよに笑つてもいいが、こりやなんだ。小供こどもの癖くせに乙おつに毒気どくけを持つてる。おれはだまって、天麩羅を消して、こないたずらが面白いか、卑怯ひきような冗談じょうたんだ。君等は卑怯と云う意味を知ってるか、と云つたら、自分がした事を笑われて怒おこるのが卑怯じゃろうがな、もとと答えた奴がある。やな奴だ。わざわざ東京から、こんな奴を教えに来たのかと思つたら情なくなつた。余計な減らず口を利かないで勉強しろと云つて、授業を始めてしまった。それから次の教場へ出たら天麩羅を食うと減らず口が利きなくなるものなりと書いてある。どうも始末に終えない。あんまり腹が立つたから、そんな生意気な奴は教えないと云つてすたすた帰つて来てやつた。生徒は休みになつて喜んだそうだ。こうなると学校より骨董の方がまだましだ。

天麩羅蕎麦もうちへ帰つて、一晚寝たらそんなに肝癪かんしゃくに障らなくなつた。学校へ出てみると、生徒も出ている。何だか訳が分らない。それから三日ばかりは無事であつたが、四日目の晩に住田すみたと云う所へ行つて団子だんごを食つた。この住田と云う所は温泉のある町で城下から汽車だと十分ばかり、歩いて三十分で行かれる、料理屋も温泉宿も、公園もある上に

遊廓ゆうかくがある。おれのはいつた団子屋は遊廓の入口にあつて、大変うまいという評判だから、温泉に行った帰りがけにちよつと食つてみた。今度は生徒にも逢わなかつたから、誰だれも知るまいと思つて、翌日学校へ行つて、一時間目の教場へはいると団子二皿さんら七銭と書いてある。実際おれは二皿食つて七銭払はらつた。どうも厄介やっかいな奴等だ。二時間目にもきつと何かあると思つたと遊廓の団子旨い旨いと書いてある。あきれ返つた奴等だ。団子がそれで済んだと思つたら今度は赤手拭あかてぬぐいと云うのが評判になつた。何の事だと思つたら、つまらない来歴だ。おれはここへ来てから、毎日住田の温泉へ行く事に極きめている。ほかの所は何を見ても東京の足元にも及およばないが温泉だけは立派なものだ。せつかく来た者だから毎日はいつてやろうという気で、晩飯前に運動かたがた出掛でかける。ところが行くときは必ず西洋手拭の大きな奴をぶら下げて行く。この手拭が湯に染そまつた上へ、赤い縞しまが流れ出したのでちよつと見ると紅色べにいろうに見える。おれはこの手拭を行きも帰りも、汽車に乗つてもあるいても、常にぶら下げてゐる。それで生徒がおれの事を赤手拭赤手拭と云うんだそうだ。どうも狭い土地に住んでるとうるさいものだ。まだある。温泉は三階の新築で上等は浴衣ゆかたをかして、流しをつけて八銭で済む。その上に女が天目てんもくへ茶を載のせて出す。おれはいつでも上等へは

いった。すると四十円の月給で毎日上等へはいるのは贅沢だと云い出した。余計なお世話だ。まだある。湯壺は花崗石を畳み上げて、十五畳敷ぐらいの広さに仕切つてある。大抵は十三四人漬つてるがたまには誰も居ない事がある。深さは立つて乳の辺まであるから、運動のために、湯の中を泳ぐのはなかなか愉快だ。おれは人の居ないのを見済しては十五畳の湯壺を泳ぎ巡つて喜んでいた。ところがある日三階から威勢よく下りて今日も泳げることごとく口を覗いてみると、大きな札へ黒々と湯の中で泳ぐべからずとかいて貼りつけてある。湯の中で泳ぐものは、あまりあるまいから、この貼札はおれのために特別に新調したのかも知れない。おれはそれから泳ぐのは断念した。泳ぐのは断念したが、学校へ出てみると、例の通り黒板に湯の中で泳ぐべからずと書いてあるには驚ろいた。何だか生徒全体がおれ一人を探偵しているように思われた。くさくさした。生徒が何を云つたつて、やろうと思つた事をやめるようなおれではないが、何でこんな狭苦しい鼻の先がつかえるような所へ来たのかと思うと情なくなつた。それでうちへ帰ると相変らず骨董責である。

四

学校には宿直があつて、職員が代る代るこれをつとめる。但し狸と赤シャツは例外である。何でこの兩人が当然の義務を免かれるのかと聞いてみたら、奏任待遇だからと云う。面白くもない。月給はたくさんとる、時間は少ない、それで宿直を逃がれるなんて不公平があるものか。勝手な規則をこしらえて、それが当り前だというような顔をしている。よくまああんなにずうずうしく出来るものだ。これについては大分不平であるが、山嵐の説によると、いくら一人で不平を並べたつて通るものじゃないそうだ。一人だつて二人だつて正しい事なら通りそうなものだ。山嵐は might is right という英語を引いて説論を加えたが、何だか要領を得ないから、聞き返してみたら強者の権利と云う意味だそうだ。強者の権利ぐらいなら昔から知つてゐる。今さら山嵐から講釈をきかなくつてもいい。強者の権利と宿直とは別問題だ。狸や赤シャツが強者だなんて、誰が承知するものか。議論は議論としてこの宿直がいよいよおれの番に廻つて来た。一体疝性だから夜具蒲団などは自分のものへ楽に寝ないと寝たような心持ちがしない。小供の時から、友達のうちへ泊つた

事はほとんどないくらいだ。友達のうちでさえ厭いやなら学校の宿直はなおさら厭だ。厭だけれども、これが四十円のうちへ籠こもっているなら仕方がない。我慢がまんして勤めてやろう。

教師も生徒も帰ってしまったあとで、一人ぼかんとしているのは随分間ずいぶんが抜ぬけたものだ。宿直部屋は教場の裏手にある寄宿舎の西はずれの一室だ。ちよつとはいつてみたが、西日をまともに受けて、苦しくつて居たたまれない。田舎いなかだけあつて秋がきても、氣長に暑いもんだ。生徒の賄まかないを取りよせて晩飯を済ましたが、まずいには恐れ入いつた。よくあんなものを食つて、あれだけに暴あれられたもんだ。それで晩飯を急いで四時半に片付けてしまふんだから豪傑ごうけつに違ちがいがない。飯は食つたが、まだ日が暮くれないから寝ねる訳に行かない。ちよつと温泉に行きたくなつた。宿直をして、外へ出るのはいい事だか、悪わるい事だかしらないが、こうつくねんとして重禁錮じゅうきんこ同様な憂目うきめに逢あうのは我慢の出来るもんじゃやない。始めて学校へ来た時当直の人はと聞いたら、ちよつと用達ようたしに出たと小使こつかいが答えたのを妙みょうだと思つたが、自分に番ばんが廻まわつてみると思い当る。出る方が正しいのだ。おれは小使にちよつと出てくると云つたら、何かご用ですかと聞くから、用じやない、温泉へはいるん

だと答えて、きつさと出掛けた。赤手拭は宿へ忘れて来たのが残念だが今日は先方で借りるとしよう。

それからかなりゆるりと、出たりはいったりして、ようやく日暮方になったから、汽車へ乗って古町の停車場まで来て下りた。学校まではこれから四丁だ。訳はないとあるき出すと、向うから狸が来た。狸はこれからこの汽車で温泉へ行こうと云う計画なんだろう。すたすた急ぎ足にやってきたが、擦れ違った時おれの顔を見たから、ちよつと挨拶をした。すると狸はあなたは今日は宿直ではなかつたですかねえと真面目くさつて聞いた。なかつたですかねえもないもんだ。二時間前おれに向つて今夜は始めての宿直ですね。ご苦労さま。と礼を云つたじゃないか。校長なんかになるといやに曲りくねつた言葉を使うもんだ。おれは腹が立ったから、ええ宿直です。宿直ですから、これから帰つて泊る事はたしかに泊りますと云い捨てて済ましてあるき出した。豎町の四つ角までくると今度は山嵐に出つ喰わした。どうも狭い所だ。出であるきさえすれば必ず誰かに逢う。「おい君は宿直じゃないか」と聞くから「うん、宿直だ」と答えたら、「宿直が無暗に出てあるくなんて、不都合じゃないか」と云つた。「ちつとも不都合なもんか、出であるかない方が不都合だ」と

威張^{いば}つてみせた。「君のずぼらにも困るな、校長か教頭に出逢うと面倒^{めんどう}だぜ」と山嵐に似合わない事を云うから「校長にはたつた今逢つた。暑い時には散歩でもしないと宿直も骨でしよう」と校長が、おれの散歩をほめたよ」と云つて、面倒臭^{くさ}いから、さつきと学校へ帰つて来た。

それから日はすぐくれる。くれてから二時間ばかりは小使を宿直部屋へ呼んで話をしたが、それも飽^あきたから、寝られないまでも床^{とこ}へはいろいろと思つて、寝巻に着換^かえて、蚊帳^{かや}を捲^まくつて、赤い毛布^{けつと}を跳ねのけて、とんと尻持^{しりもち}を突^ついて、仰^{あおむ}向けになつた。おれが寝るときにとんと尻持をつくのは小供の時からの癖^{くせ}だ。わるい癖だと云つて小川町^{おがわまち}の下宿に居た時分、二階下に居た法律学校の書生が苦情を持ち込んだ事がある。法律の書生なんてものは弱い癖に、やに口が達者なもので、愚^ぐな事を長たらしく述べ立てるから、寝る時にどんな音がするのはおれの尻^{しり}がわるいのじゃない。下宿の建築が粗末^{そまつ}なんだ。掛^かけ合うなら下宿へ掛^かけ合えと凹^{へこ}ましてやつた。この宿直部屋は二階じゃないから、いくら、どしんと倒^{たお}れても構^{かま}わない。なるべく勢^{いきおい}よく倒れないと寝たような心持ちがしない。ああ愉快だと足をうんと延ばすと、何だか両足へ飛び付いた。ざらざらして蚤^{のみ}のようでもないからこい

つあと驚ろいて、足を二三度毛布の中で振つてみた。するとぎらぎらと当つたものが、急に殖え出して脛が五六カ所、股が二三カ所、尻の下でぐちやりと踏み潰したのが一つ、臍の所まで飛び上がったのが一つ——いよいよ驚ろいた。早速起き上つて、毛布をぱつと後ろへ抛ると、蒲団の中から、バツタが五六十飛び出した。正体の知れない時は多少気味が悪るかつたが、バツタと相場が極まつてみたら急に腹が立つた。バツタの癖に人を驚ろかしゃがつて、どうするか見ると、いきなり括り枕を取つて、二三度擲きつけたが、相手が小さ過ぎるから勢よく抛げつける割に利目がない。仕方がないから、また布団の上へ坐つて、煤掃の時に塵を丸めて畳を叩くように、そこから近辺を無暗にたたいた。バツタが驚ろいた上に、枕の勢で飛び上がるものだから、おれの肩だの、頭だの鼻の先だのへくつ付いたり、ぶつかつたりする。顔へ付いた奴は枕で叩く訳に行かないから、手で攫んで、一生懸命に擲きつける。忌々しい事に、いくら力を出しても、ぶつかる先が蚊帳だから、ふわりと動くだけで少しも手筈がない。バツタは擲きつけられたまま蚊帳へつらまつている。死にもどうもしない。ようやくの事に三十分ばかりでバツタは退治した。箒を持って来てバツタの死骸を掃き出した。小使が来て何ですかと云うから、何ですかもあるもんか、バツタを床

の中に飼かつとく奴がどこの国にある。間拔まぬけめ。と叱しかつたら、私は存じませんと弁解をした。存じませんで済むかと箒えんがわを椽側ぼうへ抛り出したら、小使は恐る恐る箒を担いで帰って行つた。おれは早速寄宿生を三人ばかり総代に呼び出した。すると六人出て来た。六人だろうが十人だろうが構うものか。寝巻のまま腕うでまくりをして談判を始めた。

「なんでバツタなんか、おれの床の中へ入れた」

「バツタた何ぞな」と真先まっぴんの一人がいつた。やに落ち付いていやがる。この学校じゃ校長ばかりじゃない、生徒まで曲りくねつた言葉を使うんだろう。

「バツタを知らないのか、知らなけりや見せてやろう」と云つたが、生憎あいにく掃あき出してしまつて一匹びきも居ない。また小使を呼んで、「さっきのバツタを持つてこい」と云つたら、「もう掃溜はきだめへ棄すててしまいましたが、拾ひろつて参りましようか」と聞いた。「うんすぐ拾ひろつて来い」と云うと小使は急いで馳かけ出したが、やがて半紙の上へ十匹ばかり載のせて来て「どうもお気の毒ですが、生憎夜でこれだけしか見当りません。あしたになりましたらもつと拾ひろつて参ります」と云う。小使まで馬鹿ばかだ。おれはバツタの一つを生徒に見せて「バツタたこれだ、大きなずう体をして、バツタを知らないた、何の事だ」と云うと、一番左の方に居た顔

の丸い奴が「そりや、イナゴぞな、もし」と生意気におれを遣り込めた。「箆棒め、イナゴもバツタも同じもんだ。第一先生を捕まえてなもした何だ。菜飯は田楽の時より外に食うもんじゃやない」とあべこべに遣り込めてやつたら「なもしと菜飯とは違うぞな、もし」と云った。いつまで行つてもなもしを使う奴だ。

「イナゴでもバツタでも、何でおれの床の中へ入れたんだ。おれがいつ、バツタを入れてくれと頼んだ」

「誰も入れやせんがな」

「入れないものが、どうして床の中に居るんだ」

「イナゴは温い所が好きじゃけれ、大方一人でおはいりたのじやあろ」

「馬鹿あ云え。バツタが一人でおはいりになるなんて——バツタにおはいりになられてたまるもんか。——さあなぜこんないたずらをしたか、云え」

「云えてて、入れんものを説明しようがないがな」

「けちな奴等だ。自分で自分のした事が云えないくらいなら、てんでしないがいい。証拠さえ拳がらなければ、しらを切るつもりで凶太く構えていやがる。おれだつて中学に居た

時分は少しはいたずらもしたもんだ。しかしだれがしたと聞かれた時に、尻込みをするよ
うな卑怯ひきような事はただの一度もなかった。したものはしたので、しないものはしないに極きま
てる。おれなんぞは、いくら、いたずらをしたつて潔白なものだ。嘘を吐ついて罰ばつを逃にげる
くらいなら、始めからいたずらなんかやるものか。いたずらと罰はつきもんだ。罰がある
からいたずらも心持ちよく出来る。いたずらだけで罰はご免蒙めんこうむるなんて下劣げれつな根性がどこ
の国に流行はやると思つてるんだ。金は借りるが、返す事はご免だと云う連中はみんな、こん
な奴等が卒業してやる仕事に相違そういない。全体中学校へ何しにはいつてるんだ。学校へは
いつて、嘘を吐いて、胡魔化ごまかして、陰かげでこせこせ生意気な悪いたずらをして、そうして大き
な面で卒業すれば教育を受けたもんだと癩違かんちがいをしていやがる。話せない雑兵ぞうひやうだ。

おれはこんな腐くさった了見りようけんの奴等と談判するのは胸糞むなくそが悪わるいから、「そんなに云われな
きや、聞かなくつていい。中学校へはいつて、上品も下品も区別が出来ないのは気の毒な
ものだ」と云つて六人を逐おつ放はなしてやった。おれは言葉や様子こそあまり上品じゃないが、
心はこいつらよりも遙はるかに上品なつもりだ。六人は悠々ゆうゆうと引き揚げた。上部うわべだけは教師の

おれよりよつぽどえらく見える。実は落ち付いているだけなお悪るい。おれには到底これほどの度胸はない。

それからまた床へはいつて横になつたら、さつきの騒動で蚊帳の中はぶんぶん唸つてい。手燭をつけて一匹ずつ焼くなんて面倒な事は出来ないから、釣手をはずして、長く畳んでおいて部屋の中で横堅十文字に振つたら、環が飛んで手の甲をいやというほど撲つた。三度目に床へはいつた時は少々落ち付いたがなかなか寝られない。時計を見ると十時半だ。考えてみると厄介な所へ来たもんだ。一体中学の先生なんて、どこへ行つても、こんなものを相手にするなら気の毒なものだ。よく先生が品切れにならない。よつぽど辛防強い。朴念仁がなるんだらう。おれには到底やり切れない。それを思うと清なんてのは見上げたものだ。教育もない身分もない婆さんだが、人間としてはすこぶる尊とい。今まではあんなに世話になつて別段難有いとも思わなかつたが、こうして、一人で遠国へ来てみると、始めてあの親切がわかる。越後の笹飴が食いたければ、わざわざ越後まで買いに行つて食わしてやつても、食わせるだけの価値は充分ある。清はおれの事を欲がなくなつて、真直な

気性だと云つて、ほめるが、ほめられるおれよりも、ほめる本人の方が立派な人間だ。何だか清に逢いたくなつた。

清の事を考えながら、のつそつしていると、突然おれの頭の上で、数で云つたら三四十人もあろうか、二階が落つこちるほどどん、どん、どんと拍子を取つて床板を踏みならす音がした。すると足音に比例した大きな鬨の声が上がつた。おれは何事が持ち上がったのかと驚ろいて飛び起きた。飛び起きる途端に、ははあさっきの意趣返しに生徒があげられるのだなと気がついた。手前のわるい事は悪るかつたと言つてしまわないうちは罪は消えないもんだ。わるい事は、手前達に覚があるだろう。本来なら寝てから後悔してあしたの朝でもあやまりに来るのが本筋だ。たとい、あやまらないまでも恐れ入つて、静粛に寝ているべきだ。それを何だこの騒ぎは。寄宿舎を建てて豚でも飼つておきあしまいし。気狂いじみた真似も大抵にするがいい。どうするか見ると、寝巻のまま宿直部屋を飛び出して、楷子段を三股半に二階まで躍り上がった。すると不思議な事に、今まで頭の上で、たしかにどたばた暴れていたのが、急に静まり返つて、人声どころか足音もしなくなつた。これは妙だ。ランプはずでに消してあるから、暗くてどこに何が居るか判然と分らないが、

人気のあるとないとは様子でも知れる。長く東から西へ貫いた廊下には鼠一匹も隠れていない。廊下のはずれから月がさして、遙か向うが際どく明るい。どうも変だ、おれは小供の時から、よく夢を見る癖があつて、夢中に跳ね起きて、わからぬ寢言を云つて、人に笑われた事がよくある。十六七の時ダイヤモンドを拾つた夢を見た晩なぞは、むくりと立ち上がつて、そばに居た兄に、今のダイヤモンドはどうしたと、非常な勢で尋ねたくらいだ。その時は三日ばかりうち中の笑い草になつて大いに弱つた。ことによると今のも夢かも知れない。しかしたしかにあげられたに違いないがと、廊下の真中で考え込んでいると、月のさしている向うのはずれで、一二三わあと、三四十人の声がかたまつて響いたかと思う間もなく、前のように拍子を取つて、一同が床板を踏み鳴らした。それ見る夢じゃないやつぱり事実だ。静かにしろ、夜なかだぞ、とこつちも負けんくらしいな声を出して、廊下を向うへ馳けだした。おれの通る路は暗い、ただはずれに見える月あかりが目標だ。おれが馳け出して二間も来たかと思うと、廊下の真中で、堅い大きなものに向脛をぶつけて、あ痛いが頭へひびく間に、身体はすとんと前へ抛り出された。こん畜生と起き上がつてみたが、馳けられない。気はせくが、足だけは云う事を利かない。じれつたいから、一本足で飛ん

で来たら、もう足音も人声も静まり返つて、森しんとしている。いくら人間が卑怯ひけつだつて、こんな卑怯ひけつに出来るものじゃない。まるで豚だ。こうなれば隠れている奴を引きずり出して、あやまらせてやるまではひかないぞと、心を極きめて寢室しんしつの一つを開けて中を検査しようと思つたが開かない。銃じゆうをかけてあるのか、机か何か積んで立て懸かけてあるのか、押おしても、押しても決して開かない。今度は向う合せの北側へやの室を試みた。開かない事はやつぱり同然である。おれが戸を開けて中に居る奴を引つ捕つらまえてやろうと、焦慮いらつてると、また東のはずれで鬨なげの声と足拍子が始まつた。この野郎やろう申し合せて、東西相應じておれを馬鹿にする気だな、とは思つたがさてどうしていいか分らない。正直に白状してしまふが、おれは勇氣のある割合に智慧ちえが足りない。こんな時にはどうしていいかさつぱりわからな。わからないけれども、決して負けるつもりはない。このままに済ましてはおれの顔にかかわる。江戸えどつ子は意気地いきちがないと云われるのは残念だ。宿直をして鼻垂はなつたれ小僧こぞうにかかわれて、手のつけようがなくなつて、仕方がないから泣き寝入りにしたと思われちゃ一生の名折れだ。それでも元は旗本はたもとだ。旗本の元は清和源氏せいわけんじで、多田ただの満仲まんじゆうの後裔こうえいだ。こんな土百姓どひやくしやうとは生まれからして違ちがうんだ。ただ智慧のないうところが惜しいだけだ。どうして

いか分らないのが困るだけだ。困ったって負けるものか。正直だから、どうしていいか分らないんだ。世の中に正直が勝たないで、外に勝つものがあるか、考えてみる。今夜中に勝てなければ、あした勝つ。あした勝てなければ、あさつて勝つ。あさつて勝てなければ、下宿から弁当を取り寄せて勝つまでここに居る。おれはこう決心をしたから、廊下の真中へあぐらをかいて夜のあけるのを待っていた。蚊がぶんぶん来たけれども何ともなかった。さつき、ぶつけた向脛を撫でてみると、何だかぬらぬらする。血が出るんだろう。血なんか出たければ勝手に出るがいい。そのうち最前からの疲れが出て、ついうとうと寝てしまった。何だか騒がしいので、眼が覚めた時はえつ糞しまつたと飛び上がった。おれの坐つた右側にある戸が半分あいて、生徒が二人、おれの前に立っている。おれは正気に返つて、はつと思ふ途端に、おれの鼻の先にある生徒の足を引つ攫んで、力任せにぐいと引いたら、そいつは、どたりと仰向に倒れた。ざまを見ろ。残る一人がちよつと狼狽したところを、飛びかかつて、肩を抑えて二三度こづき廻したら、あつけに取られて、眼をぱちぱちさせた。さあおれの部屋まで来いと引つ立てると、弱虫だと見えて、一も二もなく尾いて来た。夜はとうにあけている。

おれが宿直部屋へ連れてきた奴を詰問し始めると、豚は、打つても擲いても豚だから、ただ知らんがなで、どこまでも通す了見と見えて、けつして白状しない。そのうち一人来る、二人来る、だんだん二階から宿直部屋へ集まつてくる。見るとみんな眠そうに臉をばらしている。けちな奴等だ。一晩ぐらい寝ないで、そんな面をして男と云われるか。面でも洗つて議論に來いと云つてやつたが、誰も面を洗いに行かない。

おれは五十人あまりを相手に約一時間ばかり押問答をしていると、ひよつくり狸がやつて來た。あとから聞いたら、小使が学校に騒動がありますつて、わざわざ知らせに行つたのだそうだ。これしきの事に、校長を呼ぶなんて意氣地がなさ過ぎる。それだから中学校の小使なんぞをしてるんだ。

校長はひと通りおれの説明を聞いた。生徒の言草もちよつと聞いた。追つて処分するまでは、今まで通り学校へ出る。早く顔を洗つて、朝飯を食わないと時間に間に合わないから、早くしろと云つて寄宿生をみんな放免した。手温るい事だ。おれなら即席に寄宿生をことごとく退校してしまふ。こんな悠長な事をするから生徒が宿直員を馬鹿にするんだ。その上おれに向つて、あなたもさぞご心配でお疲れでしょう、今日のご授業に及ばんと云

うから、おれはこう答えた。「いえ、ちつとも心配じゃありません。こんな事が毎晩あつても、命のある間は心配にやなりません。授業はやりませぬ、一晩ぐらい寝なくつて、授業が出来ないくらいなら、頂戴ちやうだいした月給を学校の方へ割戻わりもどします」校長は何と思つたものか、しばらくおれの顔を見つめていたが、しかし顔が大分はれていますよと注意した。なるほど何だか少々重たい気がする。その上べた一面痒かゆい。蚊がよつぽと刺さしたに相違ない。おれは顔中つかぼりぼり掻かきながら、顔はいくら膨はれたつて、口はたしかにきけますから、授業には差し支つかえませんと答えた。校長は笑いながら、大分元気ですなと賞ほめた。実を云うと賞めたんじやあるまい、ひやかしたんだらう。

君釣りに行きませんかと赤シャツがおれに聞いた。赤シャツは気味の悪るいように優しい声を出す男である。まるで男だか女だか分りやしない。男なら男らしい声を出すもんだ。ことに大学卒業生じゃないか。物理学学校でさえおれくらいな声が出るのに、文学士がこれじゃ見つともない。

おれはそうですなあと少し進まない返事したら、君釣をした事がありますかと失敬な事を聞く。あんまりないが、子供の時、小梅の釣堀で鮒を三匹釣った事がある。それから神楽坂の毘沙門の縁日で八寸ばかりの鯉を針で引つけて、しめたと思つたら、ぽちやりと落としてしまったがこれは今考えても惜しいと云つたら、赤シャツは顔を前の方へ突き出してホホホと笑つた。何もそう気取つて笑わなくつても、よきそうな者だ。「それじゃ、まだ釣りの味は分らんですな。お望みならちと伝授しましょう」とすこぶる得意である。だれがご伝授をうけるものか。一体釣や猟をする連中はみんな不人情な人間ばかりだ。不人情でなくつて、殺生をして喜ぶ訳がない。魚だつて、鳥だつて殺されるより生きてる方

が楽に極きまつてる。釣や猟をしなくつちや活計かつけいがたたないなら格別だが、何不足なく暮くらしている上に、生き物を殺さなくつちや寝られないなんて贅ぜい沢な話だ。こう思ったが向むうは文学士だけに口が達者だから、議論じや叶かなわないと思つて、だまつた。すると先生このおれを降参させたと疇かんちが違ちがいして、早速伝授しましょう。おひまなら、今日どうです、いつしよに行つちや。吉川君と二人ふたりぎりじや、淋さびしいから、来たまえとしきりに勧める。吉川君というのは画学の教師で例の野だいこの事だ。この野だは、どういう了見りようけんだか、赤シャツのうちへ朝夕出入でいりして、どこへでも随行ずいこうして行く。まるで同輩どうはいじやない。主従しゅうじゆうみたようだ。赤シャツの行く所なら、野だは必ず行くに極きまっているんだから、今さら驚おどろきもしないが、二人で行けば済むところを、なんで無愛想ぶあいそのおれへ口を掛かけたんだらう。大方高慢こうまんちきな釣道楽で、自分の釣るところをおれに見せびらかすつもりかなんかで誘さそつたに違ちがいない。そんな事で見せびらかされるおれじやない。鮪まぐろの二匹や三匹釣つたつて、びくともするもんか。おれだつて人間だ、いくら下手へただつて糸さえ卸おろしや、何かかかると、ここでおれが行かないと、赤シャツの事だから、下手だから行かないんだ、嫌きらいだから行かないんじゃないと邪推じゃすいするに相違そういない。おれはこう考えたから、行きましようと思つた。

それから、学校をしまつて、一応うちへ帰つて、支度を整えて、停車場で赤シャツと野だを待ち合せて浜へ行つた。船頭は一人で、船は細長い東京辺では見た事もない恰好である。さつきから船中見渡すが釣竿が一本も見えない。釣竿なしで釣が出来るものか、どうする見だらうと、野だに聞くと、沖釣には竿は用いませぬ、糸だけでげすと鰓を撫でて黒人じみた事を云つた。こう遣り込められるくらいならだまつていればよかつた。

船頭はゆつくりゆつくり漕いでいるが熟練は恐いもので、見返えると、浜が小さく見えるくらいもう出ている。高柏寺の五重の塔が森の上へ抜け出して針のように尖がつてる。向側を見ると青嶋が浮いている。これは人の住まない島だそうだ。よく見ると石と松ばかりだ。なるほど石と松ばかりじゃ住めっこない。赤シャツは、しきりに眺望していい景色だと云つてる。野だは絶景でげすと云つてる。絶景だか何だか知らないが、いい心持ちには相違ない。ひろびろとした海の上で、潮風に吹かれるのは葉だと思つた。いやに腹が減る。「あの松を見たまえ、幹が真直で、上が傘のように開いてターナーの画にありそうだね」と赤シャツが野だに云うと、野だは「全くターナーですね。どうもあの曲り具合つたらありませんね。ターナーそっくりですよ」と心得顔である。ターナーとは何の事だか知ら

ないが、聞かないでも困らない事だから黙だまっていた。舟は島を右に見てぐるりと廻まわった。波は全くない。これで海だとは受け取りにくいほど平たいらだ。赤シャツのお陰かげではなはだ愉快だ。出来る事なら、あの島の上へ上がつてみたいと思つたから、あの岩のある所へは舟はつけられないんですかと聞いてみた。つけられん事もないですが、釣をするには、あまり岸じゃいけないですと赤シャツが異議を申し立てた。おれは黙つてた。すると野だがどうです教頭、これからあの島をターナー島と名づけようじゃありませんかと余計な発議ほつぎをした。赤シャツはそいつは面白い、吾々われわれはこれからそう云おうと賛成した。この吾々のうちにおれもはいつてるなら迷惑めいわくだ。おれには青嶋でたくさんだ。あの岩の上に、どうです、ラフハエルのマドンナを置いてちや。いい画が出来ますぜと野だが云うと、マドンナの話はよそうじゃないかホホホホと赤シャツが気味の悪い笑い方をした。なに誰も居ないから大丈夫だいじょうぶですと、ちよつとおれの方を見たが、わざと顔をそむけてにやにやと笑つた。おれは何だかやな心持ちがした。マドンナだろうが、小旦那こだんなだろうが、おれの関係した事でないから、勝手に立たせるがよかろうが、人に分らない事を言つて分らないから聞いたつて構やしませんてえような風をする。下品な仕草だ。これで当人は私わたしも江戸えどつ子でげすなど

と云つてる。マドンナと云うのは何でも赤シャツの馴染の芸者の渾名か何かに違いないと思つた。なじみの芸者を無人島の松の木の下に立たして眺めていれば世話はない。それを野だか油絵にでもかいて展覧会へ出したらよからう。

ここいらがいいだろうと船頭は船をとめて、錨を卸した。幾尋あるかねと赤シャツが聞くと、六尋ぐらいだと云う。六尋ぐらいじゃ鯛はむずかしいなと、赤シャツは糸を海へなげ込んだ。大将鯛を釣る気と見える、豪胆なものだ。野だは、なに教頭のお手際じやかかりますよ。それになぎですからとお世辞を云いながら、これも糸を繰り出して投げ入れる。何だか先に錘のような鉛がぶら下がつてただけだ。浮がない。浮がなくなつて釣をするのは寒暖計なしで熱度をはかるようなものだ。おれには到底出来ないと見ていると、さあ君もやりたまえ糸はありますかと聞く。糸はあまるほどあるが、浮がありませんと云つたら、浮がなくなつちや釣が出来ないのは素人ですよ。こうしてね、糸が水底へついた時分に、船縁の所で人指しゆびで呼吸をはかるんです、食うとすぐ手に答える。——そらきた、と先生急に糸をたぐり始めるから、何かかかったと思つたら何にもかからない、餌がなくなつてたばかりだ。いい気味だ。教頭、残念な事をしましたね、今のはたしかに大ものに違い

なかつたんですが、どうも教頭のお手際できえ逃げられちゃ、今日は油断ができませんよ。しかし逃げられても何ですね。浮と睨めくらしをしてる連中よりはましですね。ちようど歯どめがなくつちや自転車へ乗れないのと同程度ですからねと野だは妙な事ばかり喋舌る。よつほど撲りつけてやろうかと思つた。おれだつて人間だ、教頭ひとりで借り切つた海じゃあるまいし。広い所だ。鯉の一匹ぐらい義理にだつて、かかつてくれるだろうと、どぼんと錘と糸を抛り込んでいい加減に指の先であやつつていた。

しばらくすると、何だかぴくぴくと糸にあたるものがある。おれは考えた。こいつは魚に相違ない。生きてるものでなくつちや、こうぴくつく訳がない。しめた、釣れたとぐいぐい手繰り寄せた。おや釣れましたかね、後世恐るべしだと野だがひやかすうち、糸はもう大概手繰り込んでただ五尺ばかりほどしか、水に浸いておらん。船縁から覗いてみたら、金魚のような縞のある魚が糸にくつついて、右左へ濺いながら、手に応じて浮き上がってくる。面白い。水際から上げるとき、ぽちやりと跳ねたから、おれの顔は潮水だらけになつた。ようやくつらまえて、針をとろうとするがなかなか取れない。捕まえた手はぬるぬるする。大いに気味がわるい。面倒だから糸を振つて胴の間へ擲きつけたら、すぐ死ん

でしまった。赤シャツと野だは驚ろいて見ている。おれは海の中で手をぎぶぎぶと洗って、鼻の先へあてがつてみた。まだ腥臭い。もう懲り懲りだ。何が釣れたつて魚は握りたくない。魚も握られなくなろう。そうそう糸を捲いてしまった。

一番槍はお手柄だがゴルキじゃ、と野だがまた生意気を云うと、ゴルキと云うと露西亞の文学者みたような名だねと赤シャツが洒落た。そうですね、まるで露西亞の文学者です。ねと野だはすぐ賛成しやがる。ゴルキが露西亞の文学者で、丸木が芝の写真師で、米の名木が命の親だろう。一体この赤シャツはわるい癖だ。誰を捕まえても片仮名の唐人の名を並べたがる。人にはそれぞれ専門があつたものだ。おれのような数学の教師にゴルキだか車力だか見当がつくものか、少しは遠慮するがいい。云うならフランクリンの自伝だとかプツシング、ツ、ぜ、フロントだとか、おれでも知つてる名を使うがいい。赤シャツは時々帝国文学とかいう真赤な雑誌を学校へ持つて来て難有そうに読んでいる。山嵐に聞いてみたら、赤シャツの片仮名はみんなあの雑誌から出るんだそうだ。帝国文学も罪な雑誌だ。

それから赤シャツと野だは一生懸命に釣っていたが、約一時間ばかりのうちに二人で十五六上げた。可笑しい事に釣れるのも、釣れるのも、みんなゴルキばかりだ。鯛なんて葉にしたくつてもありやしない。今日は露西亜文学の大当りだと赤シャツが野だに話している。あなたの手腕でゴルキなんですから、私なんぞがゴルキなのは仕方ありません。当り前ですなと野だが答えている。船頭に聞くとこの小魚は骨が多くつて、まずくつて、とても食えないんだそうだ。ただ肥料には出来るそうだ。赤シャツと野だは一生懸命に肥料を釣っているんだ。気の毒の至りだ。おれは一匹で懲りたから、胴の間へ仰向けになつて、さつきから大空を眺めていた。釣をするよりこの方がよつほど洒落ている。

すると二人は小声で何か話し始めた。おれにはよく聞えない、また聞きたくもない。おれは空を見ながら清の事を考えている。金があつて、清をつれて、こんな綺麗な所へ遊びに来たらさぞ愉快だろう。いくら景色がよくつても野だなどといつしよじゃつまらない。清は皺苦茶だらけの婆さんだが、どんな所へ連れて出たつて恥ずかしい心持ちはしない。野だのようなのは、馬車に乗ろうが、船に乗ろうが、凌雲閣へのろうが、到底寄り付けたものじゃない。おれが教頭で、赤シャツがおれだったら、やつぱりおれにへけつけお世辞を

使つて赤シャツを冷かすに違いない。江戸っ子は軽薄だと云うがなるほどこんなものが田舎巡りをして、私は江戸っ子でげすと繰り返していたら、軽薄は江戸っ子で、江戸っ子は軽薄の事だと田舎者が思うに極まつてる。こんな事を考えていると、何だか二人がくすくす笑い出した。笑い声の間に何か云うが途切れ途切れでとんと要領を得ない。

「え？ どうだか……」……全くです……知らないんですから……罪ですね」「まさか……」「バッタを……本当ですよ」

おれは外の言葉には耳を傾けなかったが、バッタと云う野だの語を聴いた時は、思わずきつとなつた。野だは何のためかバッタと云う言葉だけことさら力を入れて、明瞭におれの耳にはいるようにして、そのあとをわざとぼかしてしまった。おれは動かないでやはり聞いていた。

「また例の堀田が……」「そうかも知れない……」「天麩羅……ハハハハハ」「……煽動して……」「団子も?」「団子も?」

言葉はかように途切れ途切れであるけれども、バッタだの天麩羅だの、団子だのというところをもつて推し測つてみると、何でもおれのことについて内所話しをしているに相違

ない。話すならもつと大きな声で話すがいい、また内所話をするくらいなら、おれなんか誘わなければいい。いけ好かない連中だ。バツタだろうが雪踏だろうが、非はおれにある事じゃない。校長がひとまずあずけると云つたから、狸の顔にめんじてただ今のところは控えているんだ。野だの癖に入らぬ批評をしやがる。毛筆でもしゃぶつて引つ込んでるがいい。おれの事は、遅かれ早かれ、おれ一人で片付けてみせるから、差支えはないが、また例の堀田がとか煽動して、とか云う文句が気にかかる。堀田がおれを煽動して騒動を大きくしたと云う意味なのか、あるいは堀田が生徒を煽動しておれをいじめたと云うのか方角がわからない。青空を見てみると、日の光がだんだん弱つて来て、少しはひやりとする風が吹き出した。線香の烟のような雲が、透き徹る底の上を静かに伸して行つたと思つたら、いつしか底の奥に流れ込んで、うすくもやを掛けたようになった。

もう帰ろうかと赤シャツが思い出したように云うと、ええちようど時分ですね。今夜はマドンナの君にお逢いですかと野だが云う。赤シャツは馬鹿あ云つちやいけない、間違ひになると、船縁に身を倚たした奴を、少し起き直る。エへへへ大丈夫ですよ。聞いたつて……と野だが振り返つた時、おれは皿のような眼を野だの頭の上へまともに浴びせ掛け

てやった。野だはまぼしそうに引つ繰り返つて、や、こいつは降参だと首を縮めて、頭を搔いた。何という猪口才だろう。

船は静かな海を岸へ漕ぎ戻る。君釣はあまり好きでないと見えますねと赤シャツが聞くから、ええ寝ていて空を見る方がいいですと答えて、吸いかけた巻烟草を海の中へたたき込んだら、ジュと音がして艀の足で搔き分けられた浪の上を揺られながら漾っていった。「君が来たんで生徒も大いに喜んでいいるから、奮発してやつてくれたまえ」と今度は釣にはまるで縁故もない事を云い出した。「あんまり喜んでいいないでしょう」「いえ、お世辞じゃない。全く喜んでいいるんです、ね、吉川君」「喜んでいいるところじゃない。大騒ぎです」と野だはにやにやと笑った。こいつの云う事は一々癩に障るから妙だ。「しかし君注意しないと、險呑ですよ」と赤シャツが云うから「どうせ險呑です。こうなりや險呑は覚悟です」と云つてやった。実際おれは免職になるか、寄宿生をことごとくあやまらせるか、どつちか一つにする了見でいた。「そう云つちや、取りつきどころもないが——実は僕も教頭として君のたを思うから云うんだが、わるく取つちや困る」「教頭は全く君に好意を持つてるんですよ。僕も及ばずながら、同じ江戸っ子だから、なるべく長くご在校を願つて、お互に

力になろうと思つて、これでも蔭ながら尽力じんりょくしているんですよ」と野だが人間並なみの事を云つた。野だのお世話になるくらいなら首を縊くつて死んじまわあ。

「それでね、生徒は君の来たのを大變歡迎かんげいしているんだが、そこにはいろいろな事情があつてね。君も腹の立つ事もあるだろうが、ここが我慢がまんだと思つて、辛防しんぼうしてくれたまえ。決して君のためにならないような事はしないから」

「いろいろの事情だ、どんな事情です」

「それが少し込み入つてるんだが、まあだんだん分りますよ。僕ぼくが話さないでも自然と分つて来るです、ね吉川君」

「ええなかなか込み入つてますからね。一朝一夕にや到底分りません。しかしだんだん分ります、僕が話さないでも自然と分つて来るです」と野だは赤シャツと同じような事を云う。

「そんな面倒めんどうな事情なら聞かなくてもいいんですが、あなたの方から話し出したから伺うかがうんです」

「そりゃごもつともだ。こつちで口を切つて、あとをつけないのは無責任ですな。それじゃこれだけの事を云つておきましよう。あなたは失礼ながら、まだ学校を卒業したてで、教師は始めての、経験である。ところが学校というものはなかなか情実のあるもので、その書生流に淡泊には行かないですからね」

「淡泊に行かなければ、どんな風に行くんです」

「さあ君はそう率直だから、まだ経験に乏しいと云うんですがね……」

「どうせ経験には乏しいはずです。履歴書にもかいときましたでしたが二十三年四ヶ月ですから」

「さ、そこで思わぬ辺から乗ぜられる事があるんです」

「正直にしていれば誰が乗じたつて怖くはないです」

「無論怖くはない、怖くはないが、乗ぜられる。現に君の前任者がやられたんだから、気を付けないといけないと云うんです」

野だが大人しくなつたなと気が付いて、ふり向いて見ると、いつしか艫の方で船頭と釣の話をしている。野だが居ないんでよつぽど話しよくなつた。

「僕の前任者が、誰れに乗ぜられたんです」

「だれと指すと、その人の名誉に関係するから云えない。また判然と証拠のない事だから云うとこつちの落度になる。とにかく、せっかく君が来たもんだから、ここで失敗しちや僕等も君を呼んだ甲斐がない。どうか気を付けてくれたまえ」

「気を付けろつたつて、これより気の付けようはありません。わるい事をしなけりや好いんでしよう」

赤シャツはホホホホと笑った。別段おれは笑われるような事を云つた覚えはない。今日ただ今に至るまでこれでいいと堅く信じている。考えてみると世間の大部分の人はわるくなる事を奨励しているように思う。わるくならなければ社会に成功はしないものと信じているらしい。たまに正直な純粋な人を見ると、坊っちゃんだの小僧だのと難癖をつけて軽蔑する。それじゃ小学校や中学校で嘘をつくな、正直にしろと倫理の先生が教えない方がいい。いつそ思い切つて学校で嘘をつく法とか、人を信じない術とか、人を乗せる策を教授する方が、世のためにも当人のためにもなるだろう。赤シャツがホホホホと笑つたのは、おれの単純なのを笑つたのだ。単純や真率が笑われる世の中じゃ仕様がな。清はこ

んな時に決して笑った事はない。大いに感心して聞いたもんだ。清の方が赤シャツよりよっぽど上等だ。

「無論悪^わい事をしなければ好いんですが、自分だけ悪い事をしなくつても、人の悪いのが分らなくつちや、やつぱりひどい目に逢うでしょう。世の中には磊^{らいらく}落^{らく}なように見えても、淡泊なように見えても、親切に下宿の世話なんかしてくれても、めったに油断の出来ないのがありますから……。大分寒くなった。もう秋ですね、浜の方は霽^{もや}でセピア色になった。いい景色だ。おい、吉川君どうだい、あの浜の景色は……。」と大きな声を出して野だを呼んだ。なあるほどこりや奇^{きぜつ}絶^{ぜつ}ですね。時間があると写生するんだが、惜^おしいですね、このままにしておくのはと野だは大いにたたく。

港屋の二階に灯が一つついて、汽車の笛^{ふえ}がヒューと鳴るとき、おれの乗っていた舟は磯^{いそ}の砂へぎぐりと、舳^{へさき}をつき込んで動かなくなつた。お早うお帰りと、かみさんが、浜に立って赤シャツに挨拶^{あいさつ}する。おれは船端^{ふなばた}から、やつと掛^{かけ}声^{こゑ}をして磯へ飛び下りた。

野だは大嫌いだ。こんな奴は沢庵石をつけて海の底へ沈めちまう方が日本のためだ。赤シャツは声が気に食わない。あれは持前の声をわざと気取つてあんな優しいように見せてるんだろう。いくら気取つたつて、あの面じや駄目だ。惚れるものがあつたつてマドンナぐらいなものだ。しかし教頭だけに野だよりむずかしい事を云う。うちへ帰つて、あいつの申し条を考えてみると一応もつとものものである。はつきりとした事は云わないから、見当がつきかねるが、何でも山嵐がよくない奴だから用心しろと云うのらしい。それならそうとはつきり断言するがいい、男らしくもない。そうして、そんな悪い教師なら、早く免職めんしよくしたらよかろう。教頭なんて文学士の癖くせに意気地いきちのないもんだ。蔭口かげぐちをきくのでさえ、公然と名前が云えないくらいな男だから、弱虫に極きまつてる。弱虫は親切なものだから、あの赤シャツも女のような親切ものなんだろう。親切は親切、声は声だから、声が気に入らないつて、親切を無にしちや筋ぢんが違ちがう。それにしても世の中は不思議なものだ、虫の好かない奴が親切で、気のあつた友達が悪漢わるものだなんて、人を馬鹿ばかにしている。大方

田舎だから万事東京のさかに行くんだらう。物騒な所だ。今に火事が氷つて、石が豆腐になるかも知れない。しかし、あの山嵐が生徒を煽動するなんて、いたずらをしそうもないがな。一番人望のある教師だと云うから、やろうと思つたら大抵の事は出来るかも知れないが、——第一そんな廻りくどい事をしないで、じかにおれを捕まえて喧嘩を吹き懸けりや手数が省ける訳だ。おれが邪魔になるなら、実はこれこれだ、邪魔だから辞職してくれと云や、よきそうなもんだ。物は相談づくでどうでもなる。向うの云い条がもつともなら、明日にでも辞職してやる。ここばかり米が出来る訳でもあるまい。どこの果へ行つたつて、のたれ死はしないつもりだ。山嵐もよつほど話せない奴だな。

ここへ来た時第一番に氷水を奢つたのは山嵐だ。そんな裏表のある奴から、氷水でも奢ってもらつちゃ、おれの顔に関わる。おれはたった一杯しか飲まなかつたから一錢五厘しか払わしちやない。しかし一錢だろうが五厘だろうが、詐欺師の恩になつては、死ぬまで心持ちがよくない。あした学校へ行つたら、一錢五厘返しておこう。おれは清から三円借りている。その三円は五年経つた今日までまだ返さない。返せないんじゃない。返さないんだ。清は今に返すだろうなどと、かりそめにもおれの懐中をあてにしてはいない。お

れも今に返そうなどと他人がましい義理立てはしないつもりだ。こつちがこんな心配をすればするほど清の心を疑ぐるようなもので、清の美しい心にけちを付けると同じ事になる。返さないのは清を踏ふみつけるのじゃない、清をおれの片破かたわれと思うからだ。清と山嵐とはもとより比べ物にならないが、たとい氷水だろうが、甘茶あまちゃだろうが、他人から恵めぐみを受けて、だまつているのは向うをひとかどの人間と見立てて、その人間に対する厚意の所作だ。割前を出せばそれだけの事で済むところを、心のうちで難有ありがたいと恩に着るのは銭金で買える返礼じゃない。無位無冠でも一人前の独立した人間だ。独立した人間が頭を下げるのは百万両より尊たつといお礼と思わなければならぬ。

おれはこれでも山嵐に一銭五厘奮ふんぱつ発させて、百万両より尊とい返礼をした気である。山嵐は難有ありがたいと思つてしかるべきだ。それに裏へ廻ひれつつて卑劣ひねつな振舞ふるまいをするとは怪けしからん野郎やろうだ。あした行つて一銭五厘返してしまえば借りも貸しもない。そうしておいて喧嘩けんかをしてやろう。

おれはここまで考えたら、眠ねむくなつたからぐうぐう寝ねてしまった。あくる日は思う仔細しさいがあるから、例刻より早や目に出校して山嵐を待ち受けた。ところがなかなか出て来ない。

うらなりが出て来る。漢学の先生が出て来る。野だが出て来る。しまいには赤シャツまで出て来たが山嵐の机の上は白墨が一本一本に寝ているだけで閑静かんせいなものだ。おれは、控所ひかえじよへはいるや否や返そうと思つて、うちを出る時から、湯銭のように手の平へ入れて一銭五厘、学校まで握にぎつて来た。おれは膏あぶらつ手だから、開けてみると一銭五厘が汗あせをかいている。汗をかいてる銭を返しちや、山嵐が何とか云うだろうと思つたから、机の上へ置いてふうふう吹いてまた握にぎつた。ところへ赤シャツが来て昨日は失敬、迷惑めいわくでしたらうと云つたから、迷惑じゃありません、お蔭で腹が減りましたと答えた。すると赤シャツは山嵐の机の上へ肱ひじを突ついて、あの盤ばん面だいづらをおれの鼻の側面へ持つて来たから、何をするかと思つたら、君昨日返りがけに船の中で話した事は、秘密にしてくれたまえ。まだ誰だれにも話しやしません。いねと云つた。女のような声を出すだけに心配性な男と見える。話さない事はたしかである。しかしこれから話そうと云う心持ちで、すでに一銭五厘手の平に用意しているくらいだから、ここで赤シャツから口留めをされちや、ちと困る。赤シャツも赤シャツだ。山嵐と名を指さないにしろ、あれほど推察の出来る謎なぞをかけておきながら、今さらその謎を解といてちや迷惑だとは教頭とも思えぬ無責任だ。元来ならおれが山嵐と戦争をはじめて鎬しのぎを

削けずつてる真中まんなかへ出て堂々とおれの肩かたを持つべきだ。それでこそ一校の教頭で、赤シャツを着ている主意も立つというもんだ。

おれは教頭に向むかつて、まだ誰にも話さないが、これから山嵐と談判するつもりだと云つたら、赤シャツは大いに狼狽ろうばいして、君そんな無法な事をしちや困る。僕は堀田君ほったの事について、別段君に何も明言した覚えはないんだから——君がもしここで乱暴を働はたらいてくれると、僕は非常に迷惑する。君は学校に騒動そうどうを起すつもりで来たんじゃないやなかうと妙みょうに常識をはずれた質問をするから、当り前あたまえです、月給をもらつたり、騒動を起したりしちや、学校の方でも困るでしょうと云つた。すると赤シャツはそれじゃ昨日の事は君の参考だけにとめて、口外してくれるなと汗をかいて依頼いらいに及およぶから、よろしい、僕も困るんだが、そんなにあなたが迷惑ならよしましよと受け合つた。君大丈夫だいじょうぶかいと赤シャツは念を押おした。どこまで女らしいんだか奥行おくゆきがわからない。文学士なんて、みんなあんな連中ならつまらんものだ。辻褄つじつまの合わない、論理に欠けた注文をして恬然てんぜんとしている。しかもこのおれを疑うぐつてる。憚はばかりながら男だ。受け合つた事を裏へ廻まわつて反古ほんこにするようなさもしい見りようけんはもつてるもんか。

ところへ両隣りの机の所有主も出校したんで、赤シャツは早々自分の席へ帰って行つた。赤シャツは歩くき方から気取つてる。部屋の中を往来するのでも、音を立てないように靴の底をそつと落す。音を立てないであるくのが自慢になるもんだとは、この時から始めて知つた。泥棒の稽古じゃあるまいし、当り前にするがいい。やがて始業の喇叭がなつた。

山嵐はとうとう出て来ない。仕方がないから、一銭五厘を机の上へ置いて教場へ出掛けた。授業の都合で一時間目は少し後れて、控所へ帰つたら、ほかの教師はみんな机を控えて話をしている。山嵐もいつの間にか来ている。欠勤だと思つたら遅刻したんだ。おれの顔を見るや否や今日は君のお蔭で遅刻したんだ。罰金を出したままと云つた。おれは机の上にあつた一銭五厘を出して、これをやるから取つておけ。先達て通町で飲んだ氷水の代だと山嵐の前へ置くと、何を云つてるんだと笑いかけたが、おれが存外真面目でいるので、つまらない冗談をするなと錢をおれの机の上に掃き返した。おや山嵐の癖にどこまでも奢る気だな。

「冗談じゃない本当だ。おれは君に氷水を奢られる因縁がないから、出すんだ。取らない法があるか」

「そんなに一錢五厘が気になるなら取つてもいいが、なぜ思い出したように、今時分返すんだ」

「今時分でも、いつ時分でも、返すんだ。奢られるのが、いやだから返すんだ」

山嵐は冷然とおれの顔を見てふんと云つた。赤シャツの依頼がなければ、ここで山嵐の卑劣^{ひれつ}をあげばいて大喧嘩をしてやるんだが、口外しないと受け合つたんだから動きがとれない。人がこんなに真赤^{まっか}になつてるのにふんという理窟^{りくつ}があるものか。

「氷水の代は受け取るから、下宿は出てくれ」

「一錢五厘受け取ればそれでいい。下宿を出ようが出まいがおれの勝手だ」

「ところが勝手でない、昨日、あすこの亭主^{ていしゅ}が来て君に出てもらいたいと云うから、その訳を聞いたら亭主の云うのはもつともだ。それでももう一応たしかめるつもりで今朝^{けさ}あすこへ寄つて詳^{くわ}しい話を聞いてきたんだ」

おれには山嵐の云う事が何の意味だか分らない。

「亭主が君に何を話したんだか、おれが知ってるもんか。そう自分だけで極めたって仕様があるか。訳があるなら、訳を話すが順だ。てんから亭主の云う方がもつともだなんて失敬千萬な事を云うな」

「うん、そんなら云ってやろう。君は乱暴であの下宿で持て余まされてるんだ。いくら下宿の女房だって、下女たあ違うぜ。足を出して拭かせるなんて、威張り過ぎるさ」
 「おれが、いつ下宿の女房に足を拭かせた」

「拭かせたかどうか知らないが、とにかく向うじゃ、君に困ってるんだ。下宿料の十円や十五円は懸物を一幅売りや、すぐ浮いてくるって云ってたぜ」

「利いた風な事をぬかす野郎だ。そんなら、なぜ置いた」
 「なぜ置いたか、僕は知らん、置くことは置いたんだが、いやになったんだから、出ると云うんだらう。君出てやれ」

「当り前だ。居てくれと手を合せたって、居るものか。一体そんな云い懸りを云うような所へ周旋する君からしてが不埒だ」

「おれが不埒か、君が大人しくないんだか、どっちかだらう」

山嵐もおれに劣らぬ肝癪持ちだから、負け嫌いな大きな声を出す。控所に居た連中は何事が始まったかと思つて、みんな、おれと山嵐の方を見て、顔を長くしてぼんやりしている。おれは、別に恥ずかしい事をした覚えはないんだから、立ち上がりながら、部屋中一通り見巡わしてやった。みんなが驚ろいてるなかに野ただだけは面白そうに笑つていた。おれの大きな眼が、貴様も喧嘩をするつもりかと云う権幕で、野だの干瓢づらを射貫いた時に、野だは突然真面目な顔をして、大いにつつしんだ。少し怖わかつたと見える。そのうち喇叭が鳴る。山嵐もおれも喧嘩を中止して教場へ出た。

午後は、先夜おれに対して無礼を働いた寄宿生の処分法についての会議だ。会議というものは生れて始めてだからとんと容子が分らないが、職員が寄つて、たかつて自分勝手な説をたてて、それを校長が好い加減に纏めるのだろう。纏めるというのは黒白の決しかねる事柄について云うべき言葉だ。この場合のような、誰が見たつて、不都合としか思われない事件に会議をするのは暇潰しだ。誰が何と解釈したつて異説の出ようはずがない。こ

んな明白なのは即座そくざに校長が処分しぶんしてしまえばいいに。随分ずいぶん決断けつだんのない事だ。校長つてものが、これならば、何の事はない、煮え切にらない愚図ぐずの異名だ。

会議室は校長室の隣となりにある細長い部屋で、平常は食堂の代理を勤める。黒い皮で張つた椅子いすが二十脚きやくばかり、長いテーブルの周囲まわりに並ならんでちよつと神田の西洋料理屋りやうりやぐらいな格だ。そのテーブルの端はじに校長が坐すわつて、校長の隣りに赤シャツが構える。あとは勝手次第しだいに席せきに着きくんだそうだが、体操たいそうの教師きょうしだけはいつも席末せきまつに謙遜けんそんするという話だ。おれは様子ようすが分らないから、博物の教師と漢学の教師の間へはいり込んだ。向うを見ると山嵐と野だのが並ならんでる。野だの顔かほはどう考えても劣等りやくとうだ。喧嘩けんかはしても山嵐の方が遙はるかに趣おもむきがある。おやじの葬式そうしきの時に小日向こびなたの養源寺ようげんじの座敷ざしきにかかつてた懸物けんぶつはこの顔によく似ている。坊主ぼうずに聞いてみたら韋駄天いだてんと云う怪物かいぶつだそうだ。今日は怒おこつてるから、眼まなこをぐるぐる廻まわしちゃ、時々おれの方かたを見る。そんな事で威嚇おどかされてたまるもんかと、おれも負けない気で、やつぱり眼まなこをぐりつかせて、山嵐をにらめてやった。おれの眼まなこは恰好かっこうはよくないが、大きい事ことにおいては大抵たいていな人には負けない。あなたは眼まなこが大きいから役者やくしやになるときつと似合にあいますと清きよがよく云いつたくらいだ。

もう大抵お揃いでしようかと校長が云うと、書記の川村と云うのが一つ二つと頭数を勘定してみる。一人足りない。一人不足ですがと考えていたが、これは足りないはずだ。唐茄子のうらなり君が来ていない。おれとうらなり君とはどう云う宿世の因縁か知らないが、この人の顔を見て以来どうしても忘れられない。控所へくれば、すぐ、うらなり君が眼に付く、途中をあるいていても、うらなり先生の様子が心に浮ぶ。温泉へ行くと、うらなり君が時々蒼い顔をして湯壺のなかに膨れている。挨拶をするへえと恐縮して頭を下げるから気の毒になる。学校へ出てうらなり君ほど大人しい人は居ない。めつたに笑った事もないが、余計な口をきいた事もない。おれは君子という言葉を書物の上で知ってるが、これは字引にあるばかりで、生きてるものではないと思つてたが、うらなり君に逢つてから始めて、やつぱり正体のある文字だと感心したくらいだ。

このくらい関係の深い人の事だから、会議室へはいるや否や、うらなり君の居ないのは、すぐ気がついた。実を云うと、この男の次へでも坐わろうかと、ひそかに目標にして来たくらいだ。校長はもうやがて見えるでしょうと、自分の前にある紫の袱紗包をほどいて、蒟蒻版のような者を読んでいる。赤シャツは琥珀のパイプを絹ハンケチで磨き始めた。こ

の男はこれが道楽である。赤シャツ相当のところだろう。ほかの連中は隣り同志で何だか私語さしごき合っている。手持無沙汰てもちぶさたなのは鉛筆えんぴつの尻しりに着いている、護謨ゴムの頭でテーブルの上へしきりに何か書いている。野だは時々山嵐やまあらしに話しかけるが、山嵐は一向応じない。ただうんとかああと云うばかりで、時々怖い眼こわをして、おれの方を見る。おれも負けずに睨にらめ返す。

ところへ待ちかねた、うらなり君が気の毒そうにはいつて来て少々用事がありました、遅刻いと致いたしましたと慇懃いんぎんに狸たぬきに挨拶あいさつをした。では会議を開きますと狸はまず書記の川村君に蒟蒻版こしやくばんを配布させる。見ると最初が処分の件、次が生徒取締とりしまりの件、その他二三ヶ条である。狸は例の通りもったいぶって、教育の生霊いきりょうという見えでこんな意味の事を述べた。「学校の職員や生徒に過失のあるのは、みんな自分の寡徳かとくの致すところで、何か事件がある度に、自分はよくこれで校長が勤まるとひそかに慚愧ざんきの念に堪たえんが、不幸にして今回もまたかかる騒動を引き起したのは、深く諸君に向って謝罪しなければならん。しかしひとたび起った以上は仕方がない、どうにか処分をせんければならん、事實はすでに諸君のご承知の通りであるからして、善後策について腹藏はらぐらのない事を参考のためにお述べ下さい」

おれは校長の言葉を聞いて、なるほど校長だの狸だのと云うものは、えらい事を云うもんだと感心した。こう校長が何もかも責任を受けて、自分の咎だとか、不徳だとか云うくらいなら、生徒を処分するのは、やめにして、自分から先へ免職になったら、よきそうなものだ。そうすればこんな面倒な会議なんぞを開く必要もなくなる訳だ。第一常識から云つても分つてる。おれが大人しく宿直をする。生徒が乱暴をする。わるいのは校長でもなければ、おれでもない、生徒だけに極つてる。もし山嵐が煽動したとすれば、生徒と山嵐を退治ればそれでたくさんだ。人の尻を自分で背負い込んで、おれの尻だ、おれの尻だと吹き散らかす奴が、どこの国にあるもんか、狸でなくつちや出来る芸当じゃない。彼はこんな条理に適わない議論を吐いて、得意気に一同を見廻した。ところが誰も口を開くものがない。博物の教師は第一教場の屋根に鳥がとまつてるのを眺めている。漢学の先生は蒟蒻版を畳んだり、延ばしたりしてる。山嵐はまだおれの顔をにらめている。会議と云うものが、こんな馬鹿気なものなら、欠席して昼寝でもしている方がまだ。

おれは、じれったくなつたから、一番大いに弁じてやろうと思つて、半分尻をあげかけたら、赤シャツが何か云い出したから、やめにした。見るとパイプをしまつて、縞のある

絹ハンケチで顔をふきながら、何か云っている。あの手巾はきつとマドンナから巻き上げてに相違ない。男は白い麻を使うもんだ。「私も寄宿生の乱暴を聞いてはなはだ教頭として不行届であり、かつ平常の徳化が少年に及ばなかったのを深く慚ずるのであります。でこう云う事は、何か陥欠があると起るもので、事件その物を見ると何だか生徒だけがわるいようであるが、その真相を極めると責任はかえって学校にあるかも知れない。だから表面上にあらわれたところだけで嚴重な制裁を加えるのは、かえって未来のためによくいかとも思われます。かつ少年血気のものであるから活気があふれて、善悪の考えはなく、半ば無意識にこんな悪戯をやる事はないとも限らん。でもとより処分法は校長のお考えにある事だから、私の容喙する限りではないが、どうかその辺をご斟酌になつて、なるべく寛大なお取計を願いたいと思ひます」

なるほど狸が狸なら、赤シャツも赤シャツだ。生徒があばれるのは、生徒がわるいんじゃない教師が悪るいんだと公言している。気狂が人の頭を撲り付けるのは、なぐられた人がわるいから、気狂がなぐるんだそうだ。難有い仕合せだ。活気にみちて困るなら運動

場へ出て相撲でも取るがいい、半ば無意識に床の中へバツタを入れられてたまるものか。この様子じゃ寝頸をかかれても、半ば無意識だつて放免するつもりだろう。

おれはこう考えて何か云おうかなと考えてみたが、云うなら人を驚ろすかように滔々と述べたてなくつちやつまらない、おれの癖として、腹が立つたときに口をきくと、二言か三言で必ず行き塞つてしまう。狸でも赤シャツでも人物から云うと、おれよりも下等だが、弁舌はなかなか達者だから、まずい事を喋舌つて揚足を取られちゃ面白くない。ちよつと腹案を作つてみよう、胸のなかで文章を作つてる。すると前に居た野だが突然起立したには驚ろいた。野だの癖に意見を述べるなんて生意気だ。野だは例のへらへら調で「実に今回のバツタ事件及び咄喊事件は吾々心ある職員をして、ひそかに吾校将来の前途に危懼の念を抱かしむるに足る珍事でありまして、吾々職員たるものはこの際奮つて自ら省りみて、全校の風紀を振肅しなければなりません。それでただ今校長及び教頭のお述べになつたお説は、実に肯綮に中つた剴切なお考えで私は徹頭徹尾賛成致します。どうかなるべく寛大のご処分を仰ぎたいと思います」と云つた。野だの云う事は言語はあるが意味がない、

漢語をのべつに陳列ちんれつするぎりて訳が分らない。分つたのは徹頭徹尾賛成致しますと云う言葉だけだ。

おれは野だの云う意味は分らないけれども、何だか非常に腹が立ったから、腹案も出来ないうちに起たち上がってしまった。「私は徹頭徹尾反対です……」と云つたがあとが急に出来来ない。「……そんな頓珍漢とんちんかんな、処分は大嫌いだいいきりです」とつけたら、職員が一同笑い出した。「一体生徒が全然悪わるいんです。どうしても詫あやまらせなくっちゃ、癖あやになります。退校さしても構くいません。……何だ失敬な、新しく来た教師だと思つて……」と云つて着席した。すると右隣りに居る博物館が「生徒がわるい事も、わるいが、あまり嚴重な罰などをするとかえつて反動を起していけないでしょう。やつぱり教頭のおっしゃる通り、寛かんな方に賛成します」と弱い事いまいまを云つた。左隣の漢学は穩便説おんびんせつに賛成と云つた。歴史も教頭と同説だと云つた。忌々いまいましい、大抵のものは赤シャツ党だ。こんな連中が寄り合つて学校を立てていりや世話はない。おれは生徒をあやまらせるか、辞職するか二つのうち一つに極めてるんだから、もし赤シャツが勝ちを制したら、早速うちへ帰つて荷作りをする覚悟かくごでいた。どうせ、こんな手合てあいを弁口べんこうで屈伏くつぷくさせる手際はなし、させたところまでご交際を願う

のは、こつちでご免だ。学校に居ないとすればどうなつたつて構うもんか。また何か云うと笑うに違いない。だれが云うもんかと澄すましていた。

すると今までだまつて聞いていた山嵐が奮然として、起ち上がった。野郎また赤シャツ賛成の意を表するな、どうせ、貴様とは喧嘩だ、勝手にしろと見ていると山嵐は硝子窓ガラスを振ふるわせるような声で「私は教頭及びその他諸君のお説には全然不同意であります。というものはこの事件はどの点から見ても、五十名の寄宿生が新来の教師某氏ぼうしを軽侮けいぶしてこれを翻弄ほんろうしようとした所為しよゐとより外ほかには認められんのであります。教頭はその原因を教師の人物いかに求めになるようでありますが失礼ながらそれは失言かと思ひます。某氏が宿直にあたられたのは着後早々の事で、まだ生徒に接せられてから二十日に満たぬ頃ころであります。この短かい二十日間において生徒は君の学問人物を評価し得る余地がないのであります。軽侮されべき至当な理由があつて、軽侮を受けたのなら生徒の行為に斟酌しんしやくを加える理由もありましようが、何らの原因もないのに新来の先生を愚弄ぐろうするような軽薄な生徒を寛仮かんかしては学校の威信いしんに関わる事と思ひます。教育の精神は単に学問を授けるばかりではない、高尚こうしような、正直な、武士的な元氣を鼓吹こすいすると同時に、野卑やひな、軽躁けいそうな、暴慢ぼうまんな悪風を

掃蕩そうとうするにあると思います。もし反動おそろが恐い、騒動さわうどが大きくなるのと姑息こそくな事を云つた日にはこの弊風へいふうはいつ矯正ききようせい出来るか知れません。かかる弊風へいふうを杜絶とぜつするためにこそ吾々はこの学校に職を奉じているので、これを見逃みのががすくらいなら始めから教師にならぬ方がいいと思います。私は以上の理由で寄宿生一同を厳罰げんばつに処する上に、当該教師とうがいの面前において公けに謝罪の意を表せしむるのを至当の所置と心得ます」と云いながら、どんと腰こしを卸おろした。一同はだまつて何にも言わない。赤シャツはまたパイプを拭ふき始めた。おれは何だか非常に嬉うれしかった。おれの云おうと思うところをおれの代りに山嵐がすっかり言ってくれたようなものだ。おれはこう云う単純な人間だから、今までの喧嘩はまるで忘れて、大いに難有ありがたいと云う顔をもつて、腰を卸した山嵐の方を見たら、山嵐は一向知らぬ面かおをしている。

しばらくして山嵐はまた起立した。「ただ今ちよつと失念して言い落おとしましたから、申します。当夜の宿直員は宿直中外出して温泉に行かれたようであるが、あれはもつての外の事と考えます。いやしくも自分が一校の留守番を引き受けながら、咎とがめる者のないのを幸さいわい

に、場所もあろうに温泉などへ入湯にいくなどと云うのは大きな失体である。生徒は生徒として、この点については校長からとくに責任者にご注意あらん事を希望します」

妙な奴だ、ほめたと思つたら、あとからすぐ人の失策をあげている。おれは何の気もなく、前の宿直があるいた事を知つて、そんな習慣だと思つて、つい温泉まで行つてしまつたんだが、なるほどそう云われてみると、これはおれが悪るかつた。攻撃こうげきされても仕方がない。そこでおれはまた起つて「私は正に宿直中に温泉に行きました。これは全くわるい。あやまります」と云つて着席したら、一同がまた笑い出した。おれが何か云いさえすれば笑う。つまらん奴等やつらだ。貴様等これほど自分のわるい事を公けにわるかつたと断言出来るか、出来ないから笑うんだろう。

それから校長は、もう大抵ご意見もないようでありますから、よく考えた上で処分しましょうと云つた。ついでだからその結果を云うと、寄宿生は一週間の禁足になつた上に、おれの前へ出て謝罪をした。謝罪をしなければその時辞職して帰るところだつたがなまじい、おれのいう通りになつたのでとうとう大変な事になつてしまつた。それはあとから話すが、校長はこの時会議の引き続きだと号してこんな事を云つた。生徒の風儀ふうぎは、教師の

感化で正していかなくはならん、その一着手として、教師はなるべく飲食店などに入しゅつにゅうしない事にしたい。もつとも送別会などの節は特別であるが、単独にあまり上等でない場所へ行くのはよしたい——たとえば蕎麦屋そばやだの、団子屋だんごやだの——と云いかけたらまた一同が笑った。野だが山嵐を見て天麩羅てんぷらと云つて目くばせをしたが山嵐は取り合わなかつた。いい気味きびだ。

おれは脳がわるいから、狸の云うことなんか、よく分らないが、蕎麦屋や団子屋へ行つて、中学の教師が勤まらなくっちゃ、おれみたような食しんぼう心棒しんぼうにや到底出来とつていつ子ないと思つた。それなら、それでいいから、初手から蕎麦と団子の嫌いなものと注文して雇やとうがいい。だんまりで辞令を下げておいて、蕎麦を食うな、団子を食うなと罪なお布令ふれを出すのは、おれのような外に道楽のないものにとつては大変な打撃だ。すると赤シャツがまた口を出した。「元来中学の教師なぞは社会の上流にくらいするものだからして、単に物質的の快樂ばかり求めるべきものでない。その方に耽ふけるとつい品性にわるい影響えいぎやうを及ぼすようになる。しかし人間だから、何か娯樂ごらくがないと、田舎いなかへ来て狭せまい土地では到底暮くらせるもの

夏目漱石

ではない。それで釣つりに行くとか、文学書を読むとか、または新体詩や俳句を作るとか、何でも高尚こうしょうな精神的娛樂を求めなくつてはいけない……」

だまって聞いてると勝手な熱を吹く。沖おきへ行つて肥料こやしを釣つたり、ゴルキが露西亞ロシヤの文學者だつたり、馴染なじみの芸者が松まつの木の下に立つたり、古池かわずへ蛙が飛び込んだりするのが精神的娛樂なら、天麩羅を食つて団子だんごを呑み込むのも精神的娛樂だ。そんな下さらない娛樂を授けるより赤シャツの洗濯せんたくでもするがいい。あんまり腹が立つたから「マドンナに逢あうのも精神的娛樂ですか」と聞いてやつた。すると今度は誰も笑わない。妙な顔をして互たがいに眼と眼を見合せている。赤シャツ自身は苦しそうに下を向いた。それ見ろ。利いたろう。ただ氣の毒だつたのはうらなり君で、おれが、こう云つたら蒼い顔をますます蒼くした。

おれは即夜下宿を引き払った。宿へ帰って荷物をまとめていると、女房が何か不都合でもごぎいしましたか、お腹の立つ事があるなら、云っておくれたら改めますと云う。どうも驚ろく。世の中にはどうして、こんな要領を得ない者ばかり揃つてるんだらう。出てもらいたいんだか、居てもらいたいんだか分りやしない。まるで氣狂だ。こんな者を相手に喧嘩をしたって江戸っ子の名折れだから、車屋をつれて来てさつきと出てきた。

出た事は出たが、どこへ行くというあてもない。車屋が、どちらへ参りますと云うから、だまって尾いて来い、今にわかる、と云つて、すたすたやつて来た。面倒だから山城屋へ行こうかとも考えたが、また出なければならぬから、つまり手数だ。こうして歩いてるうちには下宿とか、何とか看板のあるうちを目付け出すだらう。そうしたら、そこが天意に叶ったわが宿と云う事にしよう。とぐるぐる、閑静で住みよさそうな所をあるいているうち、とうとう鍛冶屋町へ出てしまった。ここは士族屋敷で下宿屋などのある町ではないから、もつと賑やかな方へ引き返そうかとも思ったが、ふといい事を考え付いた。おれが

敬愛するうらなり君はこの町内に住んでいる。うらなり君は土地の人で先祖代々の屋敷を控えているくらいだから、この辺の事情には通じているに相違ない。あの人を尋ねて聞いたら、よきそうな下宿を教えてくださいませんか。幸一度挨拶に来て勝手は知ってるから、捜がしてあるく面倒はない。ここだろうと、いい加減に見当をつけて、ご免ご免と二返ばかり云うと、奥から五十ぐらいな年寄が古風な紙燭をつけて、出て来た。おれは若い女も嫌いではないが、年寄を見ると何だかなつかしい心持ちがする。大方清がすぎだから、その魂が方々のお婆さんに乗り移るんだろう。これは大方うらなり君のおつ母さんだろう。切り下げの品格のある婦人だが、よくうらなり君に似ている。まあお上がり云うところを、ちよつとお目にかかりたいからと、主人を玄関まで呼び出して実はこれこれだ。が君どこか心当りはありませんかと尋ねてみた。うらなり先生それはさぞお困りでございましょう、としばらく考えていたが、この裏町に萩野と云つて老人夫婦ぎりで暮らしているものがある、いつぞや座敷を明けておいても無駄だから、たしかな人があるなら貸してもいいから周旋してくれと頼んだ事がある。今でも貸すかどうか分らんが、まあいつしよに行つて聞いてみましょうと、親切に連れて行つてくれた。

その夜から萩野の家の下宿人となった。驚いたのは、おれがいか銀の座敷を引き払うと、翌日から入れ違いに野だが平気な顔をして、おれの居た部屋を占領した事だ。さすがのおれもこれにはあきれた。世の中はいかさま師ばかりで、お互に乗せつこをしているのかも知れない。いやになつた。

世間がこんなものなら、おれも負けない気で、世間並にしなくちや、遣りきれない訳になる。巾着切の上前をはねなければ三度のご膳が戴けないと、事が極まればこうして、生きてるのも考え物だ。と云つてぴんぴんした達者なからだで、首を縊つちや先祖へ済まない上に、外聞が悪い。考えると物理学校などへはいつて、数学なんて役にも立たない芸を覚えるよりも、六百円を資本にして牛乳屋でも始めればよかつた。そうすれば清もおれの傍を離れずに済むし、おれも遠くから婆さんの事を心配せずに暮される。いつしよに居るうちは、そうでもなかつたが、こうして田舎へ来てみると清はやつぱり善人だ。あんな気立のいい女は日本中さがして歩いたつてめつたにはない。婆さん、おれの立つときに、少々風邪を引いていたが今頃はどうか知らん。先だつての手紙を見たらさぞ喜んだ

ろう。それにしても、もう返事がきそうなものだが——おれはこんな事ばかり考えて二三日暮していた。

気になるから、宿のお婆さんに、東京から手紙は来ませんかと時々尋ねてみるが、聞くたびに何にも参りませんと気の毒そうな顔をする。ここの夫婦はいか銀とは違つて、もとが士族だけに双方共上品だ。爺さんが夜るになると、変な声を出して謡をうたうには閉口するが、いか銀のようにお茶を入れましょうと無暗に出て来ないから大きに楽だ。お婆さんは時々部屋へ来ていろいろな話をする。どうして奥さんをお連れなさつて、いつしよにお出でなんだのぞなもしなどと質問をする。奥さんがあるように見えますかね。可哀想にこれでもまだ二十四ですぜと云つたらそれでも、あなた二十四で奥さんがありなさるのは当り前ぞなもしと冒頭を置いて、どこの誰さんは二十でお嫁をお貰いたの、どこの何とかさんは二十二で子供を二人お持ちたのと、何でも例を半ダースばかり挙げて反駁を試みたには恐れ入った。それじゃ僕も二十四でお嫁をお貰いける、世話しておくれんかなと田舎言葉を真似て頼んでみたら、お婆さん正直に本当かなもしと聞いた。

「本当の本当のつて僕あ、嫁が貰いたくつて仕方がないんだ」

「そうじゃろうがな、もし。若いうちは誰もそんなものじゃけれ」この挨拶あいさつには痛み入つて返事が出来なかつた。

「しかし先生はもう、お嫁がおありなさるに極きまつとらい。私はちゃんと、もう、睨ねらんどるぞなもし」

「へえ、活眼かつがんだね。どうして、睨らんどるんですか」

「どうしてて。東京から便りはないか、便りはないかて、毎日便りを待ち焦こがれておいでるじゃないかなもし」

「こいつあ驚おどろいた。大変な活眼だ」

「中あたりましたろうがな、もし」

「そうですね。中つたかも知れませんが」

「しかし今時の女子おなごは、昔むかしと違ちがうて油断が出来んけれ、お氣をお付けたがええぞなもし」

「いいえ、あなたの奥さんはたしかじゃけれど……」

「それで、やっと安心した。それじゃ何を氣を付けるんですい」

「あなたのはたしか——あなたのはたしかじゃが——」

「どこに不たしかなのが居ますかね」

「ここ等にも大分居ります。先生、あの遠山のお嬢さんをご存知かなもし」

「いいえ、知りませんね」

「まだご存知ないかなもし。ここらであなた一番の別嬪さんじゃがなもし。あまり別嬪さんじゃけれ、学校の先生方はみんなマドンナマドンナと言うといでるぞなもし。まだお聞きんのかなもし」

「うん、マドンナですか。僕あ芸者の名かと思つた」

「いいえ、あなた。マドンナと云うと唐人の言葉で、別嬪さんの事じゃろうがなもし」

「そうかも知れないね。驚いた」

「大方画学の先生がお付けた名ぞなもし」

「野だがつけたんですかい」

「いいえ、あの吉川先生がお付けたのじゃがなもし」

「そのマドンナが不たしかなんですかい」

「そのマドンナさんが不たしかなマドンナさんでな、もし」

「厄介やっかいだね。渾名あだなの付いてる女にや昔むかしから碌ろくなもの居ゐませんからね。そうかも知れませ
んよ」

「ほん当まことにそうじゃなもし。鬼神きじんのお松まつじゃの、姫妃だつきのお百ひゃくじゃのてて怖こわい女おんなが居おりま
したなもし」

「マドンナもその同類どうるいなんですかね」

「そのマドンナさんがなもし、あなた。そらあの、あなたをここへ世話せわをしておくれた古賀
先生せんせいなもし——あの方あの方の所ところへお嫁よめに行く約束やくそくが出来できていたのじゃがなもし——」

「へえ、不思議ふしぎなもんですね。あのうらなり君きみが、そんな艶福えんぷくのある男おとことは思おもわなかつた。
人は見懸みかけによらない者ものだな。ちつと氣きを付けよう」

「ところが、去年こぞあすこのお父ちちさんが、お亡なくなりて、——それまではお金かねもあるし、銀行
の株かぶも持もつてお出いでるし、万事ばんじ都合ごうごがよかつたのじゃが——それからというものは、どうい
うものか急に暮くし向きむきが思おもわしくなくなつて——つまり古賀こがさんがあまりお人ひとが好過よすぎる

けれ、お欺だまされたんぞなもし。それや、これやでお興こいれ入も延びているところへ、あの教頭さんがお出いでて、是非お嫁にほしいとお云いいるのじゃがなもし」

「あの赤シャツがですか。ひどい奴やつだ。どうもあのシャツはただのシャツじゃないと思つてた。それから？」

「人を頼たのんで懸かけ合あうておみると、遠山さんでも古賀さんに義理があるから、すぐには返事は出来かねて——まあよう考かんえてみようぐらいの挨拶あいさつをおしたのじゃがなもし。すると赤シャツさんが、手蔓てづるを求めて遠山さんの方へ出入でいりをおするようになって、とうとうあなた、お嬢ぢやうさんを手馴てな付けておしまいたのじゃがなもし。赤シャツさんも赤シャツさんじゃが、お嬢ぢやうさんもお嬢ぢやうさんじゃてて、みんなが悪わるく云いいますのよ。いったん古賀さんへ嫁よめに行いくて承知ちやうしをしときながら、今さら学がく士しさんが出いだたけれ、その方に替かえよてて、それじゃ今日こんにち様さまへ済すままいがなもし、あなた」

「全く済すままないね。今日こんにち様さまどころか明日あした様さまにも明後あした日にち様さまにも、いつまで行いつたつて済すまみつこありませんね」

「それで古賀さんにお気の毒じゃてて、お友達ほったの堀田さんが教頭の所へ意見をしにお行きたら、赤シャツさんが、あしは約束のあるものを横取りするつもりはない。破約になれば貰うかも知れんが、今のところは遠山家とただ交際をしているばかりじゃ、遠山家と交際をするには別段古賀さんに済まん事もなからうとお云いるけれ、堀田さんも仕方がなしにお戻りもどたそうな。赤シャツさんと堀田さんは、それ以来折合おりあひがわるいという評判ぞなもし」

「よくいろいろな事を知ってますね。どうして、そんな詳くわしい事が分るんですか。感心しちまつた」

「狭せまいけれ何でも分りますぞなもし」
分り過ぎて困るくらいだ。この容子ようすじゃおれの天麩羅てんぷらや団子だんごの事も知ってるかも知れない。厄介やっかいな所だ。しかしお蔭かげ様でマドンナの意味もわかるし、山嵐と赤シャツの関係もわかるし大いに後学になった。ただ困るのはどっちが悪る者だか判然しない。おれのような単純なものには白とか黒とか片づけてもらわないと、どっちへ味方をしていいか分らない。「赤シャツと山嵐たあ、どっちがいい人ですかね」

「山嵐て何ぞなもし」

「山嵐というのは堀田の事ですよ」

「そりゃ強い事は堀田さんの方が強そうじゃけれど、しかし赤シャツさんは学士さんじゃ
けれ、働かたきはある方ぞな、もし。それから優しい事も赤シャツさんの方が優しいが、生徒
の評判は堀田さんの方がええというぞなもし」

「つまりどつちががいいんですかね」

「つまり月給の多い方が豪えらいのがよろうがなもし」

これじゃ聞いたって仕方がないから、やめにした。それから二三日して学校から帰ると
お婆さんがにこにこして、へえお待遠さま。やつと参りました。と一本の手紙を持って来
てゆつくりご覧と云って出て行つた。取り上げてみると清からの便りだ。符箋ふせんが二三枚つ
いてるから、よく調べると、山城屋から、いか銀の方へ廻まわして、いか銀から、萩野はぎのへ廻つて
来たのである。その上山城屋では一週間ばかり逗留とまりゆうしている。宿屋だけに手紙まで泊とめるつ
もりなんだろう。開いてみると、非常に長いもんだ。坊ぼつちちゃんの手紙を頂いてから、す
ぐ返事をかこうと思つたが、あいにく風邪を引いて一週間ばかり寝ねていたものだから、つ

い遅おそくなつて済まない。その上今時のお嬢さんのように読み書きが達者でないものだから、こんなまずい字でも、かくのによつほど骨が折れる。甥おいに代筆を頼もうと思つたが、せつかくあげるのに自分でかかなくつちや、坊っちゃんに済まないと思つて、わざわざ下したがきを一返して、それから清書をした。清書をするには二日で済んだが、下た書きをするには四日かかった。読みにくいかも知れないが、これでも一生懸命いっしょうけんめいにかいたのだから、どうぞしまいまで読んでくれ。という冒頭ぼうとうで四尺ばかり何やらかやら認しためてある。なるほど読みにくい。字がまずいばかりではない、大抵たいてい平仮名だから、どこで切れて、どこで始まるのだから句読くとうをつけるのによつほど骨が折れる。おれは焦せつ勝かちな性分だから、こんな長くて、分りにくい手紙は、五円やるから読んでくれと頼まれても断わるのだが、この時ばかりは真面目まじめになつて、始はじめから終しまいまで読み通した。読み通した事は事実だが、読む方に骨が折れて、意味がつながらないから、また頭から読み直してみた。部屋のなかは少し暗くなつて、前の時より見にくく、なつたから、とうとう椽鼻えんばなへ出て腰こしをかけながら鄭寧ていねいに拝見した。すると初秋はつあきの風が芭蕉ばしやうの葉を動かして、素肌すはだに吹ふきつけた帰りに、読みかけた手紙を庭の方へなびかしたから、しまいぎわには四尺あまりの半切れがさらりさらりと鳴つ

て、手を放すと、向うの生垣まで飛んで行きそうだ。おれはそんな事には構っていられない。坊っちゃんは竹を割ったような気性だが、ただ肝癢が強過ぎてそれが心配になる。——ほかの人に無暗に渾名なんか、つけるのは人に恨まれるものになるから、やたらに使っちゃいけない、もしつけたら、清だけに手紙で知らせろ。——田舎者は人がわるいそうだから、気をつけてひどい目に遭わないようにしろ。——氣候だつて東京より不順に極つてるから、寝冷をして風邪を引いてはいけない。坊っちゃんの手紙はあまり短過ぎて、容子がよくわからないから、この次にはせめてこの手紙の半分ぐらいの長さのを書いてくれ。——宿屋へ茶代を五円やるのはいいが、あとで困りやしないか、田舎へ行つて頼りになるはお金ばかりだから、なるべく儉約して、万一の時に差支えないようにしなくっちゃいけない。——お小遣がなくて困るかも知れないから、為替で十円あげる。——先だつて坊っちゃんからもらった五十円を、坊っちゃんが、東京へ帰つて、うちを持つ時の足しにと思つて、郵便局へ預けておいたが、この十円を引いてもまだ四十円あるから大丈夫だ。——なるほど女と云うものは細かいものだ。

おれが椽鼻で清の手紙をひらつかせながら、考え込んでみると、しきりの襖をあけて、萩野のお婆さんが晩めしを持ってきた。まだ見てお出でるのかなもし。えっほど長いお手紙じゃなもし、と云ったから、ええ大事な手紙だから風に吹かしては見、吹かしては見るんだと、自分でも要領を得ない返事をして膳についた。見ると今夜も薩摩芋の煮つけた。このうちは、いか銀よりも鄭寧で、親切で、しかも上品だが、惜しい事に食い物がまずい。昨日も芋、一昨日も芋で今夜も芋だ。おれは芋は大好きだと明言したには相違ないが、こう立てつづけに芋を食わされては命がつづかない。うらなり君を笑うどころか、おれ自身が遠からぬうちに、芋のうらなり先生になっちまう。清ならこんな時に、おれの好きな鮪のさし身か、蒲鉾のつけ焼を食わせるんだが、貧乏士族のけちん坊と来ちゃ仕方がない。どう考えても清といっしょでなくつちあ駄目だ。もしあの学校に長くても居る模様なら、東京から呼び寄せてやろう。天麩羅蕎麦を食つちやならない、団子を食つちやならない、それで下宿に居て芋ばかり食つて黄色くなつていろなんて、教育者はつらいものだ。禪宗坊主だって、これよりは口に榮耀をさせているだろう。——おれは一皿の芋を平げて、机の

抽斗ひきだしから生卵を二つ出して、茶碗ちやわんの縁ふちでたたき割わつて、ようやくしの凌しのいだ。生卵ひきだしでも營養をとらなくつちあ一週二十一時間の授業じゆぎょうが出来るものか。

今日は清の手紙で湯に行く時間が遅おそくなった。しかし毎日行きつけたのを一日でも欠かすのは心持こころもちちがわるい。汽車にでも乗のつて出懸でかけようと、例れいの赤手拭あかてぬぐいをぶら下さげて停車場ていしやばまで来ると二三分前に発車はつしやしたばかりで、少々待たなければならぬ。ベンチへ腰こしを懸かけて、敷島しきしまを吹ふかしていると、偶然ぐうぜんにもうらなり君きみがやつて来た。おれはさつきさつきの話わを聞いてから、うらなり君きみがななおおささらら気きの毒どくになつた。平常ふだんから天地てんちの間に居候いせうこうをしてしているように、小さく構かまえているのがいかにも憐あわれに見みえたが、今夜こんやは憐あわれどころどころの騒さわぎではない。出来るならば月給げつぎんを倍ばいにして、遠山えんざんのお嬢おぢやうさんと明日あしたから結婚けっこんさして、一ヶ月いっかげつばかり東京とうきやうへでも遊あそびにやつてやりたい気きがした矢先やせんだから、やお湯おゆですか、さあ、こつちへお懸かけなさいと威勢いせいよく席せきを譲ゆずると、うらなり君きみは恐おそれ入いつた体裁ていざいで、いえ構かまうておくれななさるな、と遠慮えんりよだか何なにだかやつぱり立たつてる。少し待まちたなくつちや出でません、草臥くたびれますからお懸かけなさいとまた勧すすめてみた。実はどうかして、そばへ懸かけてもらもらいたかつたくらいに氣きの毒どくでたまらない。それではお邪魔じゃまを致いたしましょうとようやくおれの云いう事ことを聞きいてくれた。

世の中には野だみたように生意気な、出ないで済む所へ必ず顔を出す奴もいる。山嵐のようにおれが居なくっちゃ日本が困るだろうと云うような面を肩の上へ載せてる奴もいる。そうかと思うと、赤シャツのようにコスメチックと色男の間屋をもつて自ら任じているのもある。教育が生きてフロックコートを着ればおれになるんだと云わぬばかりの狸もいる。皆々それ相応に威張つてるんだが、このうらなり先生のように在れどもなきがごとく、人質に取られた人形のように大人しくしているのは見た事がない。顔はふくれているが、こんな結構な男を捨てて赤シャツに靡くなんて、マドンナもよつぼど気の知れないおきやんだ。赤シャツが何ダース寄つたつて、これほど立派な旦那様が出来るもんか。

「あなたはどっか悪いんじゃないですか。大分たいぎそうに見えますが……」 「いえ、別段これという持病もないですが……」

「そりゃ結構です。からだが悪いと人間も駄目ですな」

「あなたは大分ご丈夫のようですな」

「ええ瘠せても病気はしません。病気なんてものが大嫌いですから」

うらなり君は、おれの言葉を聞いてにやにやと笑った。

ところへ入口で若々しい女の笑声が聞えたから、何心なく振り返つてみるとえらい奴が来た。色の白い、ハイカラ頭の、背の高い美人と、四十五六の奥さんとが並んで切符を売る窓の前に立っている。おれは美人の形容などが出来る男でないから何にも云えないが全く美人に相違ない。何だか水晶の珠を香水で暖ためて、掌へ握つてみたような心持ちがした。年寄の方が背は低い。しかし顔はよく似ているから親子だろう。おれは、や、来たなと思う途端に、うらなり君の事は全然忘れて、若い女の方ばかり見ていた。すると、うらなり君が突然おれの隣から、立ち上がつて、そろそろ女の方へ歩き出したんで、少し驚いた。マドンナじゃないかと思つた。三人は切符所の前で軽く挨拶している。遠いから何を云つてるのか分らない。

停車場の時計を見るともう五分で発車だ。早く汽車がくればいいがなと、話し相手が居なくなつたので待ち遠しく思つていると、また一人あわてて場内へ駆け込んで来たものがある。見れば赤シャツだ。何だかべらべら然たる着物へ縮緬の帯をだらしなく巻き付けて、例の通り金鎖りをぶらつかしている。あの金鎖りは贗物である。赤シャツは誰も知らないと思つて、見せびらかしているが、おれはちゃんと知つてる。赤シャツは駆け込んだなり、

何かきよろきよろしていたが、切符売下所うりさげじよの前に話している三人へ慇懃いんぎんにお辞儀じぎをして、何か二こと、三こと、云つたと思つたら、急にこつちへ向いて、例のごとく猫足ねじあしにあるいて来て、や君も湯ですか、僕は乗り後れやしないかと思つて心配して急いで来たたら、まだ三分ある。あの時計はたしかかしらんと、自分の金側きんがわを出して、二分ほどちがつてると云いながら、おれの傍そばへ腰おしを卸した。女の方はちつとも見返らないで杖つえの上に顛あごをのせて、正面ばかり眺ながめている。年寄の婦人は時々赤シャツを見るが、若い方は横を向いたままである。いよいよマドンナに違いない。

やがて、ピューと汽笛きてきが鳴つて、車がつく。待ち合せた連中はぞろぞろ吾われ勝がちに乗り込む。赤シャツはいの一号に上等へ飛び込んだ。上等へ乗つたつて威張れるどころではない、住田すみたまで上等が五銭で下等が三銭だから、わずか二銭違いで上下の区別がつく。こういうおれでさえ上等を奮発ふんぱつして白切符にぎを握つてゐるんでもわかる。もつとも田舎者はけちだから、たつた二銭の出入でもすこぶる苦になると見えて、大抵たいていは下等へ乗る。赤シャツのあとからマドンナとマドンナのお袋が上等へはいり込んだ。うらなり君は活版おで押したように下等ばかりへ乗る男だ。先生、下等の車室の入口へ立つて、何だか躊躇ちゆうちよの体ていであつたが、お

れの顔を見るや否や思いきつて、飛び込んでしまった。おれはこの時何となく気の毒でたまらなかつたから、うらなり君のあとから、すぐ同じ車室へ乗り込んだ。上等の切符で下等へ乗るに不都合はなからう。

温泉へ着いて、三階から、浴衣ゆかたのなりで湯壺ゆっぼへ下りてみたら、またうらなり君に逢つた。おれは会議や何かでいぎと極まると、咽喉のどが塞ふさがつて饒舌しゃべれない男だが、平常ふだんは随分ずいぶん弁ずる方だから、いろいろ湯壺ゆかたのなかでうらなり君に話しかけてみた。何だか憐れほくつてたまらない。こんな時に一口でも先方の心を慰なぐさめてやるのは、江戸えどつ子の義務だと思つてる。ところがあいにくうらなり君の方では、うまい具合にこつちの調子に乗つてくれない。何を云つても、えとかいえとかぎりで、しかもそのえといえが大分めんどろ面倒らしいので、しまいにはとうとう切り上げて、こつちからご免蒙めんじやうつた。

湯の中では赤シャツに逢わなかつた。もつとも風呂ふろの数はたくさんあるのだから、同じ汽車で着いても、同じ湯壺で逢うとは極ままつていない。別段不思議にも思わなかつた。風呂を出てみるといい月だ。町内の両側やみぎに柳うめが植うつて、柳の枝えだが丸まるい影を往来の中へ落おとしている。少し散歩でもしよう。北へ登つて町のはずれへ出ると、左に大きな門があつて、

門の突き当りがお寺で、左右が妓楼である。山門のなかに遊廓があるなんて、前代未聞の現象だ。ちよつとはいつてみたいが、また狸から会議の時にやられるかも知れないから、やめて素通りにした。門の並びに黒い暖簾をかけた、小さな格子窓の平屋はおれが団子を食つて、しくじつた所だ。丸提灯に汁粉、お雑煮とかいたのがぶらさがつて、提灯の火が、軒端に近い一本の柳の幹を照らしている。食いたいなと思つたが我慢して通り過ぎた。

食いたい団子の食えないのは情ない。しかし自分の許嫁が他人に心を移したのは、なお情ないだろう。うらなり君の事を思うと、団子は愚か、三日ぐらい断食しても不平はこぼせない訳だ。本当に人間ほどあてにならないものはない。あの顔を見ると、どうしたつて、そんな不人情な事をしそうには思えないんだが——うつくしい人が不人情で、冬瓜の水膨れのような古賀さんが善良な君子なのだから、油断が出来ない。淡泊だと思つた山嵐は生徒を煽動したと云うし。生徒を煽動したのかと思うと、生徒の処分を校長に逼るし。厭味で練りかためたような赤シャツが存外親切で、おれに余所ながら注意をしてくれるかと思ふと、マドンナを胡魔化したり、胡魔化したのかと思うと、古賀の方が破談にならなければ結婚は望まないんだと云うし。いか銀が難癖をつけて、おれを追い出すかと思うと、す

ぐ野だ公いが入れ替かつたり——どう考えてもあてにならない。こんな事を清にかいてやつたら定めて驚く事だろう。箱根はこねの向うだから化物ばけものが寄り合つてるんだと云うかも知れない。おれは、性来しょうらい構かわらない性分だから、どんな事でも苦にしないで今日まで凌いで来たのだ。が、ここへ来てからまだ一ヶ月立つか、立たないうちに、急に世のなかを物騒ぶつそうに思ひ出した。別段際だった大事件にも出逢わないのに、もう五つ六つ年を取ったような気がする。早く切り上げて東京へ帰るのが一番よかろう。などとそれからそれへ考えて、いつか石橋いしかわを渡わたつて野芹川のぜりがわの堤とどへ出た。川と云うとえらそうだが実は一間ぐらいな、ちよろちよろした流れで、土手に沿うて十二丁ほど下ると相生村あいおいむらへ出る。村には観音様かんのんさまがある。

温泉ゆの町を振り返ると、赤い灯が、月の光の中にかがやいている。太鼓たいこが鳴るのは遊廓うたかたに相違ちがない。川の流れは浅いけれども早いから、神経質の水のようにやたらに光る。ぶらぶら土手の上をあるきながら、約三丁も来たと思つたら、向うに人影ひとかげが見え出した。月に透すかしてみると影は二つある。温泉ゆへ来て村へ帰る若い衆しゅかも知れない。それにしては唄うたもうたわない。存外静かだ。

だんだん歩いて行くと、おれの方が早足だと見えて、二つの影法師が、次第に大きくなる。一人は女らしい。おれの足音を聞きつけて、十間ぐらいの距離に逼った時、男がたちまち振り向いた。月は後からさしている。その時おれは男の様子を見て、はてなと思つた。男と女はまた元の通りにあるき出した。おれは考えがあるから、急に全速力で追つ懸けた。先方は何の気もつかずに最初の通り、ゆるゆる歩を移している。今は話し声も手に取るように聞える。土手の幅は六尺ぐらいだから、並んで行けば三人がようやくだ。おれは苦もなく後ろから追い付いて、男の袖を擦り抜けざま、二足前へ出した踵をぐるりと返して男の顔を覗き込んだ。月は正面からおれの五分刈の頭から顚の辺りまで、会釈もなく照す。男はあつと小声に云つたが、急に横を向いて、もう帰ろうと女を促すが早いか、温泉の町の方へ引き返した。

赤シャツは凶太くて胡魔化すつもりか、気が弱くて名乗り損なつたのかしら。ところが狭くて困つてるのは、おればかりではなかつた。

赤シャツに勧められて釣つりに行つた帰りから、山嵐やまあらしを疑ぐり出した。無い事を種に下宿を出ると云われた時は、いよいよ不埒ふらちな奴やつだと思つた。ところが会議の席では案に相違そういして滔々とうとうと生徒嚴罰論げんばつろんを述べたから、おや変だたと首を振ひねつた。萩野の婆ばあさんから、山嵐が、うらなり君のために赤シャツと談判をしたと聞いた時は、それは感心だと手を拍うつた。この様子ではわる者は山嵐じゃあるまい、赤シャツの方が曲まつてるんで、好加減いかげんな邪推じゃすいを實まことしやかに、しかも遠廻とおまわしに、おれの頭の中へ浸しみ込こましたのではあるまいかと迷つてる矢先へ、野芹川のぜりがわの土手で、マドンナを連れて散歩なんかしている姿を見たから、それ以来赤シャツは曲者くせものだと極きめてしまった。曲者だか何だかよくは分わからないが、ともかくも善いい男じゃない。表と裏とは違ちがつた男だ。人間は竹のように真直まっすぐでなくつちや頼たのもしくくない。真直なものは喧嘩けんかをしても心持こころちがいい。赤シャツのようなやさしいのと、親切なのと、高尚こうしょうなのと、琥珀こはくのパイプとを自慢じまんそうに見せびらかすのは油断が出来ない、めつたに喧嘩も出来ないと思つた。喧嘩をしても、回向院えこういんの相撲すもうのような心持こころちのいい喧嘩は出来な

いと思った。そうなるで一銭五厘の出入で控所全体を驚ろかした議論の相手の山嵐の方がはるかに人間らしい。会議の時に金壺眼をぐりつかせて、おれを睨めた時は憎い奴だと思つたが、あとで考えると、それも赤シャツのねちねちした猫撫声よりはました。実はあの会議が済んだあとで、よつぽど仲直りをしようかと思つて、一こと二こと話しかけてみたが、野郎返事もしないで、まだ眼を剥つてみせたから、こつちも腹が立つてそのままにしておいた。

それ以来山嵐はおれと口を利かない。机の上へ返した一銭五厘はいまだに机の上に乗っている。ほこりだらけになつて乗っている。おれは無論手が出せない、山嵐は決して持つて帰らない。この一銭五厘が二人の間の障壁になつて、おれは話そうと思つても話せない、山嵐は頑として黙つてる。おれと山嵐には一銭五厘が祟つた。しまいには学校へ出て一銭五厘を見るのが苦になつた。

山嵐とおれが絶交の姿となつたに引き易えて、赤シャツとおれは依然として在来の関係を保つて、交際をつづけている。野芹川で逢つた翌日などは、学校へ出ると第一番におれの傍へ来て、君今度の下宿はいいですかのまたいっしょに露西亞文学を釣りに行こうじや

ないかのといろいろな事を話しかけた。おれは少々憎らしかったから、昨夜は二返逢いまたねと云つたら、ええ停車場で——君はいつでもあの時分出掛けるのですか、遅いじやないかと云う。野芹川の土手でもお目に懸りましたねと喰らわしてやつたら、いいえ僕はあつちへは行かない、湯にはいつて、すぐ帰つたと答えた。何もそんなに隠さないでもよからう、現に逢つてるんだ。よく嘘をつく男だ。これで中学の教頭が勤まるなら、おれなんか大学総長がつとまる。おれはこの時からいよいよ赤シャツを信用しなくなつた。信用しない赤シャツとは口をきいて、感心している山嵐とは話をしない。世の中は随分妙なものだ。

ある日の事赤シャツがちよつと君に話があるから、僕のうちまで来てくれと云うから、惜しいと思つたが温泉行きを欠勤して四時頃出掛けて行つた。赤シャツは一人ものだが、教頭だけに下宿はとくの昔に引き払つて立派な玄関を構えている。家賃は九円五拾錢だそうだ。田舎へ来て九円五拾錢払えばこんな家へはいれるなら、おれも一つ奮発して、東京から清を呼び寄せて喜ばしてやろうと思つたくらいな玄関だ。頼むと云つたら、赤シャツ

の弟が取次とりつぎに出て来た。この弟は学校で、おれに代数と算術を教わる至つて出来のわるい子だ。その癖渡りくせわたりものだから、生れ付いての田舎者よりも人が悪わるい。

赤シャツに逢つて用事を聞いてみると、大将例の琥珀のパイプで、きな臭くさい烟草たばこをふかしながら、こんな事を云つた。「君が来てくれてから、前任者の時代よりも成績せいせきがよくあがつて、校長も大いにいい人を得たと喜んでいるので——どうか学校でも信賴しんらいしているのだから、そのつもりで勉強していただきたい」

「へえ、そうですね、勉強つて今より勉強は出来ませんが——」

「今のくらいで充分じゅうぶんです。ただ先だつてお話しした事ですね、あれを忘れずにいて下さればいいのです」

「下宿の世話なんかするものあ剣呑けんおんだという事ですか」

「そう露骨ろこつに云うと、意味もない事になるが——まあ善いさ——精神は君にもよく通じている事と思うから。そこで君が今のように出精しゅつせいして下されば、学校の方でも、ちゃんと見ているんだから、もう少しして都合つごうさえつければ、待遇たいぐうの事も多少はどうかなるだろうと思うんですがね」

「へえ、俸給ほうきゅうですか。俸給なんかどうでもいいんですが、上がれば上がった方がいいですね」

「それで幸い今度転任者が一人出来るから——もつとも校長に相談してみないと無論受け合えない事だが——その俸給から少しは融通ゆうずうが出来るかも知れないから、それで都合をつけるように校長に話してみようと思うんですがね」

「どうも難有ありがとう。だれが転任するんですか」

「もう発表になるから話しても差し支つかえないでしょう。実は古賀君です」

「古賀さんは、だつてこの人じゃありませんか」

「この地の人じですが、少し都合があつて——半分は当人の希望です」

「どこへ行くんです」

「日向ひゅうがの延岡のべおかで——土地が土地だから一級俸上あがつて行く事になりました」

「誰だれか代りが来るんですか」

「代りも大抵たいてい極まつてるんです。その代りの具合で君の待遇上の都合もつくんです」

「はあ、結構です。しかし無理に上がらないでも構いません」

「とも角も僕は校長に話すつもりです。それで校長も同意見らしいが、追つては君にもつと働いて頂だかなくつてはならんようになるかも知れないから、どうか今からそのつもりで覚悟かくごをしてやつてもらいたいですね」

「今より時間でも増すんですか」

「いいえ、時間は今より減るかも知れませんが——」

「時間が減つて、もつと働くんですか、妙だな」

「ちよつと聞くと妙だが、——判然とは今言いにくいながら——まあつまり、君にもつと重大な責任を持つてもらうかも知れないという意味なんです」

おれには一向分らない。今より重大な責任と云えば、数学の主任だろうが、主任は山嵐だから、やつこさんなかなか辞職する氣遣きづかいはない。それに、生徒の人望があるから転任や免職めんしよくは学校の得策であるまい。赤シャツの談話はいつでも要領を得ない。要領を得なくつても用事はこれで済んだ。それから少し雑談をしているうちに、うらなり君の送別会をやる事や、ついてはおれが酒を飲むかと云う問や、うらなり先生は君子で愛すべき人だと云う事や——赤シャツはいろいろ弁じた。しまいに話をかえて君俳句をやりますかと来

たから、こいつは大変だと思つて、俳句はやりません、さようならと、そこそこに歸つて来た。発句は芭蕉か髪結床の親方のやるもんだ。数学の先生が朝顔やに釣瓶をとられてたまるものか。

歸つてうんと考え込んだ。世間には随分気の知れない男が居る。家屋敷はもちろん、勤める学校に不足のない故郷がいやになつたからと云つて、知らぬ他国へ苦勞を求めに出る。それも花の都の電車が通つてゐる所なら、まだしもだが、日向の延岡とは何の事だ。おれは船つきのいいここへ来てさえ、一ヶ月立たないうちにもう歸りたくなつた。延岡と云えば山の中も山の中も大変な山の中だ。赤シャツの云うところによると船から上がつて、一日馬車へ乗つて、宮崎へ行つて、宮崎からまた一日車へ乗らなくつては着けないさうだ。名前を聞いてさえ、開けた所とは思えない。猿と人が半々に住んでるような気がする。いかに聖人のうらなり君だつて、好んで猿の相手になりたくもないだろうに、何という物数奇だ。

ところへあいかわらず婆さんが夕食を運んで出る。今日もまた芋ですかいと聞いてみたら、いえ今日はお豆腐ぞなもと云つた。どつちにしたつて似たものだ。

「お婆さん古賀さんは日向へ行くそうですね」

「ほん当にお氣の毒じゃな、もし」

「お氣の毒だって、好んで行くんなら仕方がないですね」

「好んで行くて、誰がぞなもし」

「誰がぞなもしって、当人がさ。古賀先生が物数奇に行くんじやありませんか」

「そりやあなた、大違いの勘五郎かんごろうぞなもし」

「勘五郎かね。だって今赤シャツがそう云いましたぜ。それが勘五郎なら赤シャツは嘘つきほらえもんの法螺右衛門だだ」

「教頭さんが、そうお云いするのはもつともじゃが、古賀さんのお往いきともないのももつともぞなもし」

「そんなら両方もつともなんですね。お婆さんは公平でいい。一体どういう訳なんです」
「今朝古賀のお母さんが見えて、だんだん訳をお話したかなもし」

「どんな訳をお話したんです」

「あそこもお父さんがお亡くなりてから、あたし達が思うほど暮し向が豊かになうてお困りじゃけれ、お母さんが校長さんにお頼みて、もう四年も勤めているものじゃけれ、どうぞ毎月頂くものを、今少しふやしておくれんかてて、あなた」

「なるほど」

「校長さんが、ようまあ考えてみとこうとお云いたげな。それでお母さんも安心して、今に増給のご沙汰があるぞ、今月か来月かと首を長くして待つておいでたところへ、校長さんがちよつと来てくれと古賀さんにお云いるけれ、行つてみると、気の毒だが学校は金が足りんけれ、月給を上げる訳にゆかん。しかし延岡になら空いた口があつて、そつちなら毎月五円余分にとれるから、お望み通りでよかろうと思つて、その手続きにしたから行くがええと云われたげな。――」

「じゃ相談じゃない、命令じゃありませんか」

「さよよ。古賀さんはよそへ行つて月給が増すより、元のままでええから、ここに居りたい。屋敷もあるし、母もあるからとお頼みたけれども、もうそう極めたあとで、古賀さんの代りは出来ているけれ仕方がないと校長がお云いたげな」

「へん人を馬鹿ばかにしてら、面白おもしろくもない。じゃ古賀さんは行く気はないんですね。どうれで変だと思った。五円ぐらい上がったって、あんな山の中へ猿のお相手をしに行く唐変木とうへんぼくはまずないからね」

「唐変木で、先生なんぞなもし」

「何でもいいできあ、——全く赤シャツの作略さりやくだね。よくない仕打しうちだ。まるで欺撃だましうちですね。それでおれの月給を上げるなんて、不都合ふつじょうな事があるものか。上げてやるつたって、誰か上がってやるものか」

「先生は月給がお上りるのかなもし」

「上げてやるつて云うから、断ことわろうと思うんです」

「何で、お断ことわりるのぞなもし」

「何でもお断ことわりだ。お婆さん、あの赤シャツは馬鹿ですぜ。卑怯ひきょうでさあ」

「卑怯ひきょうでもあんだ、月給を上げておくれたら、大人おとなしく頂ういておく方が得えぞなもし。若わいちちよく腹はらの立つものじゃが、年をとつてから考えると、少しの我慢がまんじゃあつたのに惜あはしい事をした。腹はら立てたためにこないな損そんをしたと悔くやむのが当あり前まへじゃけれ、お婆おばの言う

事をきいて、赤シャツさんが月給をあげてやろとお言いたら、難有うと受けておおきなさいや」

「年寄の癖に余計な世話を焼かなくつてもいい。おれの月給は上がろうと下がろうとおれの月給だ」

婆さんはだまつて引き込んだ。爺さんは呑気な声を出して謡をうたつてる。謡というものは読んでわかる所を、やにむずかしい節をつけて、わざと分らなくする術だろう。あんな者を每晚飽きずに唸る爺さんの気が知れない。おれは謡どころの騒ぎじゃない。月給を上げてやろうと云うから、別段欲しくもなかったが、入らない金を余しておくのもつたいないと思つて、よろしいと承知したのだが、転任したくないものを無理に転任させてその男の月給の上前を跳ねるなんて不人情な事が出来るものか。当人がもとの通りでいいと云うのに延岡下りまで落ちさせるとは一体どう云う見だろう。太宰権帥でさえ博多近辺で落ちついたものだ。河合又五郎だつて相良でとまつてるじゃないか。とにかく赤シャツの所へ行つて断わつて来なくつちあ気が済まない。

小倉こくらの袴はかまをつけてまた出掛けた。大きな玄関へ突つ立つて頼むと云うと、また例の弟が取次に出て来た。おれの顔を見てまた来たかという眼付めつきをした。用があれば二度だつて三度だつて来る。よる夜なかだつて叩たたき起おこさないとは限らない。教頭の所へご機嫌きげん伺かいにくるようなおれと見損みそくつてるか。これでも月給が入らないから返しに来きたんだ。すると弟が今来客中だと云うから、玄関でいいからちよつとお目にかかりたいと云つたら奥おくへ引き込んだ。足元を見ると、畳たた付まつきの薄うすつぺらな、のめりの駒下駄こまげがある。奥でもう万歳ばんざいですよと云う声が聞きえる。お客とは野だだなと気がついた。野だでなくては、あんな黄色い声を出して、こんな芸人じみた下駄げを穿はくものはない。

しばらくすると、赤シャツがランプを持って玄関まで出て来て、まあ上がりたまえ、外の人じゃない吉川君だ、と云うから、いえここでたくさんです。ちよつと話せばいいんです、と云つて、赤シャツの顔を見ると金時のようだ。野だ公と一杯飲いっぱいんでると見える。「ぎつき僕の月給を上げてやるというお話でしたが、少し考えが変つたから断わりに来たんです」

赤シャツはランプを前へ出して、奥の方からおれの顔を眺めたが、とつきの場合返事をしかねて茫然ぼうぜんとしている。増給を断わる奴が世の中にたった一人飛び出して来たのを不審ふしんに思ったのか、断わるにしても、今帰ったばかりで、すぐ出直してこなくつてもよさそうなものだと、呆れ返ったのか、または双方合併そうほうがっぺいしたのか、妙な口をして突っ立つたままである。

「あの時承知したのは、古賀君が自分の希望で転任するという話でしたからで……」

「古賀君は全く自分の希望で半ば転任するんです」

「そうじゃないんです、ここに居たいんです。元の月給でもいいから、郷里に居たいのです」

「君は古賀君から、そう聞いたのですか」

「そりや当人から、聞いたんじゃないやありません」

「じゃ誰からお聞きです」

「僕の下宿の婆さんが、古賀さんのおつ母かさんから聞いたのを今日僕に話したのです」

「じゃ、下宿の婆さんがそう云ったのですね」

「まあそうです」

「それは失礼ながら少し違うでしょう。あなたのおつしやる通りだと、下宿屋の婆さんの云う事は信ずるが、教頭の云う事は信じないと云うように聞えるが、そういう意味に解釈して差支さしつかえないでしょうか」

おれはちよつと困った。文学士なんてものはやつぱりえらいものだ。妙な所へこだわつて、ねちねち押し寄せてくる。おれはよく親父おやじから貴様はそそつかしくて駄目だめだ駄目だと云われたが、なるほど少々そそつかしいようだ。婆さんの話を聞いてはつと思つて飛び出して来たが、実はうらなり君にもうらなりのおつ母さんにも逢つて詳しい事情くわは聞いてみなかったのだ。だからこう文学士流に斬り付けられると、ちよつと受け留めにくい。

正面からは受け留めにくいが、おれはもう赤シャツに対して不信任を心うちの中で申し渡してしまった。下宿の婆さんもけちん坊ぼうの欲張り屋に相違ないが、嘘は吐かない女だ、赤シャツのように裏表はない。おれは仕方がないから、こう答えた。

「あなたの云う事は本当かも知れませんが——とにかく増給はご免蒙めんこうむります」

「それはますます可笑おかしい。今君がわざわざお出いでになったのは増俸を受けるには忍しのびない、理由を見出したからのように聞えたが、その理由が僕の説明で取り去られたにもかかわらず増俸を否まれるのは少し解しかねるようですね」

「解しかねるかも知れませんがね。とにかく断わりますよ」

「そんなに否いやなら強いてとまでは云いませんが、そう二三時間のうちに、特別の理由もないのに豹変ひょうへんしちゃ、将来君の信用にかかわる」

「かかわっても構わないです」

「そんな事はないはずです、人間に信用ほど大切なものはありませんよ。よしんば今一步譲ゆずつて、下宿の主人が……」

「主人じゃない、婆さんです」

「どちらでもよろしい。下宿の婆さんが君に話した事を事実としたところで、君の増給は古賀君の所得を削けずつて得たものではないでしょう。古賀君は延岡へ行かれる。その代りがある。その代りが古賀君よりも多少低給で来てくれる。その剰余じょうよを君に廻まわすと云うのだから、君は誰にも気の毒がる必要はないはずです。古賀君は延岡でただ今よりも栄進され

る。新任者は最初からの約束やくそくで安くくる。それで君が上あがられれば、これほど都合つじうのいい事はないと思うですがね。いやなら否いやでもいいが、もう一返うちでよく考えてみませんか」

おれの頭はあまりえらくないのだから、いつもなら、相手がこういう巧妙しうみような弁舌べんぜつを揮ふるえば、おやそうかな、それじゃ、おれが間違おそつてたと恐れ入おそりて引きさがるのだけれども、今夜はそうは行かない。ここへ来た最初から赤シャツは何だか虫が好おかなかつた。途中とちゆうで親切な女みたような男だと思おもい返した事はあるが、それが親切でも何でもなさそうなので、反動の結果今じゃよつほど厭いやになっている。だから先がどれほどうまく論理的に弁論たぐましを逞たくまくしようとも、堂々たる教頭流におれを遣り込めようとも、そんな事は構かまわない。議論のいい人が善人とはきまらない。遣り込められる方が悪人とは限らない。表向きは赤シャツの方が重々もつともだが、表向きがいくら立派だつて、腹の中まで惚ほれさせる訳には行かない。金や威力いりよくや理屈りくつで人間の心が買える者なら、高利貸でも巡査じゆんさでも大学教授でも一番人に好かれなくてはならない。中学の教頭ぐらいな論法でおれの心がどう動くものか。人間は好き嫌いで働くものだ。論法で働くものじゃない。

石漱夏目

「あなたの云う事はもつともですが、僕は増給がいやになったんですから、まあ断わります。考えたって同じ事です。さようなら」と云いすてて門を出た。頭の上には天の川が一筋かかっている。

うらなり君の送別会のあるという日の朝、学校へ出たら、山嵐やまあらしが突然とつぜん、君先だつてはいか銀が来て、君が乱暴して困るから、どうか出るように話してくれと頼たのんだから、真面目まじめに受けて、君に出てやれと話したのだが、あとから聞いてみると、あいつは悪わるい奴やつで、よく偽筆ぎひつへ贗落款にせらつかんなどを押おして売りつけるそうだから、全く君の事も出鱈目でたらめに違ちがいない。君かげものに懸物かけものや骨董こつどうを売りつけて、商売にしようと思つてたところが、君が取り合わないで儲けもうがないものだから、あんな作りごとをこしらえて胡魔化ごまかしたのだ。僕はあの人物を知らなかつたので君に大変失敬した勘弁かんべんしたまえと長々しい謝罪をした。

おれは何とも云わずに、山嵐の机の上にあつた、一錢五厘りんをとつて、おれの蝦蟇口がまぐちのなかへ入れた。山嵐は君それを引き込めるのかと不審ふしんそうに聞くから、うんおれは君に奢おごられるのが、いやだつたから、是非返すつもりでいたが、その後だんだん考えてみると、やつぱり奢おごつてもらう方がいいようだから、引き込ますんだと説明した。山嵐は大きな声をしてアハハハと笑いながら、そんなら、なぜ早く取らなかつたのだと聞いた。実は取ろう取

ろうと思つてたが、何だか妙だからそのままにしておいた。近来は学校へ来て一錢五厘を見るのが苦になるくらいいやだったと云つたら、君はよつほど負け惜しみの強い男だと云うから、君はよつほど剛情張りだと答えてやつた。それから二人の間にこんな問答が起つた。

「君は一体どこの産だ」

「おれは江戸っ子だ」

「うん、江戸っ子か、道理で負け惜しみが強いと思つた」

「きみはどこだ」

「僕は会津だ」

「会津つぽか、強情な訳だ。今日の送別会へ行くのかい」

「行くとも、君は？」

「おれは無論行くんだ。古賀さんが立つ時は、浜まで見送りに行こうと思つてるくらいだ」

「送別会は面白いぜ、出て見たまえ。今日は大いに飲むつもりだ」

「勝手に飲むがいい。おれは肴を食つたら、すぐ帰る。酒なんか飲む奴は馬鹿だ」

「君はすぐ喧嘩を吹き懸ける男だ。なるほど江戸っ子の軽跳な風を、よく、あらわしてる」
「何でもいい、送別会へ行く前にちよつとおれのうちへお寄り、話しがあるから」

山嵐は約束通りおれの下宿へ寄つた。おれはこの間から、うらなり君の顔を見る度に気の毒でたまらなかつたが、いよいよ送別の今日となつたら、何だか憐れつぽくつて、出来る事なら、おれが代りに行つてやりたい様な気がしだした。それで送別会の席上で、大いに演説でもしてその行を盛にしてやりたいと思ふのだが、おれのべらんめえ調子じゃ、到底物にならないから、大きな声を出す山嵐を雇つて、一番赤シャツの荒肝を挫いでやろうと考へ付いたから、わざわざ山嵐を呼んだのである。

おれはまず冒頭としてマドンナ事件から説き出したが、山嵐は無論マドンナ事件はおれより詳しく知つてゐる。おれが野芹川の土手の話をして、あれは馬鹿野郎だと云つたら、山嵐は君はだれを捕まえても馬鹿呼わりをする。今日学校で自分の事を馬鹿と云つたじゃないか。自分が馬鹿なら、赤シャツは馬鹿じゃない。自分は赤シャツの同類じゃないと主張した。それじゃ赤シャツは臍抜けの呆助だと云つたら、そうかもしれないと山嵐は大い

に賛成した。山嵐は強い事は強いが、こんな言葉になると、おれより遙かに字を知っていない。会津つぽなんてものはみんな、こんな、ものなんだろう。

それから増給事件と将来重く登用すると赤シャツが云つた話をしたら山嵐はふふんと鼻から声を出して、それじゃ僕を免職する考えだなと云つた。免職するつもりだつて、君は免職になる気かと聞いたら、誰がなるものか、自分が免職になるなら、赤シャツもいつしよに免職させてやると大いに威張つた。どうしていつしよに免職させる気かと押し返して尋ねたら、そこはまだ考えていないと答えた。山嵐は強そうだが、智慧はあまりなさそうだ。おれが増給を断わつたと話したら、大将大きに喜んでさすが江戸っ子だ、えらいと賞めてくれた。

うらなりが、そんなに厭がつていゝなら、なぜ留任の運動をしてやらなかつたと聞いてみたら、うらなりから話を聞いた時は、既にきまつてしまつて、校長へ二度、赤シャツへ一度行つて談判してみたが、どうする事も出来なかつたと話した。それについても古賀があまり好人物過ぎるから困る。赤シャツから話があつた時、断然断わるか、一応考えてみま

すと逃げればいいのに、あの弁舌に胡魔化されて、即席に許諾したものだから、あとからお母さんが泣きついて、自分が談判に行つても役に立たなかつたと非常に残念がつた。今度の事件は全く赤シャツが、うらなりを遠ざけて、マドンナを手に入れる策略なんだろうとおれが云つたら、無論そうに違いない。あいつは大人しい顔をして、悪事を働いて、人が何か云うと、ちゃんと逃道を拵えて待つてゐるんだから、よつぽど奸物だ。あんな奴にかかつては鉄拳制裁でなくつちや利かないと、瘤だらけの腕をまくつてみせた。おれはついでだから、君の腕は強そうだな柔術でもやるかと聞いてみた。すると大将二の腕へ力瘤を入れて、ちよつと攫んでみると云うから、指の先で揉んでみたら、何の事はない湯屋にある軽石の様なものだ。

おれはあまり感心したから、君そのくらの腕なら、赤シャツの五人や六人は一度に張り飛ばされるだろうと聞いたら、無論さと云いながら、曲げた腕を伸ばしたり、縮ましたりすると、力瘤がぐるりぐるりと皮のなかで廻転する。すこぶる愉快だ。山嵐の証明する所によると、かんじん縷りを二本より合せて、この力瘤の出る所へ巻きつけて、うんと腕を曲げると、ぷつりと切れるそうだ。かんじんよりなら、おれにも出来そうだと云つたら、

出来るものか、出来るならやつてみると来た。切れないと外聞がわるいから、おれは見合せた。

君どうだ、今夜の送別会に大いに飲んだあと、赤シャツと野だを撲つてやらないかと面白半分なまぐに勧めてみたら、山嵐はそうだなと考えていたが、今夜はまあよそうと云つた。なぜと聞くと、今夜は古賀に気の毒だから——それにどうせ撲るくらいなら、あいつらの悪い所を見届けて現場で撲らなくっちゃ、こつちの落度おちどになるからと、分別ぶんべつのありそうな事を附加つけたした。山嵐でもおれよりは考えがあると見える。

じゃ演説をして古賀君を大いにほめてやれ、おれがすると江戸つ子のぺらぺらになつて重みがなくていけない。そうして、きまつた所へ出ると、急に溜飲りゅういんが起つて咽喉のどの所へ、大きな丸たまが上がつて来て言葉が出ないから、君に譲ゆずるからと云つたら、妙な病氣びやうきだな、じゃ君は人中じゃ口は利けないんだね、困るだろう、と聞くから、何そんなに困りやしないと答えておいた。

そうこうするうち時間が来たから、山嵐と一所に会場へ行く。会場は花晨亭かしんていといつて、当地ここので第一等の料理屋だそうだが、おれは一度も足を入れた事がない。もとの家老とかの

屋敷やしきを買い入れて、そのまま開業したという話だが、なるほど見懸みかけからして厳めしい構えだ。家老の屋敷が料理屋になるのは、陣羽織じんばおりを縫ぬい直して、胴着どうぎにする様なものだ。

二人が着いた頃ころには、人数にんずももう大概揃そろつて、五十畳じゅうの広間に二つ三つ人間の塊かたまりが出来ている。五十畳だけに床とこは素敵すてきに大きい。おれが山城屋せんりやうで占領した十五畳敷の床とは比較にならない。尺を取つてみたら二間あつた。右の方に、赤い模様のある瀬戸物の瓶かめを据すえて、その中に松まつの大きな枝えだが挿さしてある。松の枝を挿して何にする気か知らないが、何ヶ月立つても散る気遣いがないから、銭が懸からなくつて、よかろう。あの瀬戸物はどこで出来るんだと博物の教師に聞いたら、あれは瀬戸物じゃありません、伊万里いまりですと云つた。伊万里だつて瀬戸物じゃないかと、云つたら、博物はえへへへと笑つていた。あとで聞いてみたら、瀬戸で出来る焼物だから、瀬戸と云うのだそうだ。おれは江戸っ子だから、陶器とうきの事を瀬戸物というのかと思つていた。床の真中に大きな懸物があつて、おれの顔くらしいな大きな字が二十八字かいてある。どうも下手へたなものだ。あんまり不味まずいから、漢学の先生に、なぜあんなまずいものを麗々れいれいと懸けておくんですと尋ねたところ、先生はあ

れは海屋かいおくといつて有名な書家のかいた者だと教えてくれた。海屋だか何だか、おれは今だに下手だと思つてゐる。

やがて書記の川村がどうかお着席をと云うから、柱があつて寄りかかるのに都合のいい所へ坐すわつた。海屋の懸物の前に狸たぬきが羽織はおり、袴はかまで着席すると、左に赤シャツが同じく羽織袴で陣取じんどつた。右の方は主人公だというのでうらなり先生、これも日本服で控ひかえている。おれは洋服だから、かしくまるのが窮屈きゆうくつだったから、すぐ胡坐あぐらをかいた。隣となりの体操教師は黒くろずぼんで、ちゃんとかしくまつている。体操の教師だけにいやに修行が積たんでいる。やがてお膳ぜんが出る。徳利とくりが並ならぶ。幹事かんじが立つて、一言開会いちごんかいの辞を述べる。それから狸が立つ。赤シャツが起たつ。ことごとく送別の辞を述べたが、三人共申し合せたようにうらなり君の、良教師で好人物な事を吹聴ふいちようして、今回去られるのはまことに残念である、学校としてのみならず、個人として大いに惜しむところであるが、ご一身上のご都合で、切に転任をご希望きぼうになつたのだから致いたし方がないという意味を述べた。こんな嘘うそをついて送別会を開いて、それでちつとも恥はづかしいとも思つていない。ことに赤シャツに至つて三人のうちで一番うらなり君をほめた。この良友を失うのは実に自分にとつて大なる不幸であるとまで云つた。

しかもそのいい方がいかにも、もつともらしくつて、例のやさしい声を一層やさしくして、述べ立てるのだから、始めて聞いたものは、誰でもきつとだまされるに極つてる。マドンナも大方この手で引掛けたんだらう。赤シャツが送別の辞を述べ立てている最中、向側に坐っていた山嵐がおれの顔を見てちよつと稲光をさした。おれは返電として、人指し指でべっかんこうをして見せた。

赤シャツが座に復するのを待ちかねて、山嵐がぬつと立ち上がったから、おれは嬉しかったので、思わず手をぱちぱちと拍つた。すると狸を始め一同がごとくおれの方を見たには少々困つた。山嵐は何を云うかと思うとただ今校長始めことに教頭は古賀君の転任を非常に残念がられたが、私は少々反対で古賀君が一日も早く当地を去られるのを希望しております。延岡は僻遠の地で、当地に比べたら物質上の不便はあるだらう。が、聞くところによれば風俗のすこぶる淳朴な所で、職員生徒ことごとく上代樸直の気風を帯びているそうである。心にもないお世辞を振り蒔いたり、美しい顔をして君子を陥れたりするハイカラ野郎は一人もないと信ずるからして、君のごとき温良篤厚の士は必ずその地方一般の歓迎を受けられるに相違ない。吾輩は大いに古賀君のためにこの転任を祝するのであ

る。終りに臨んで君が延岡に赴任ふじんされたら、その地の淑女しゆくじよにして、君子の好述しこうじゆつとなるべき資格あるものを扱えらんで一日も早く円満なる家庭をかたち作つて、かの不貞無節なるお転婆てんぱを事実の上において慚死ざんしせしめん事を希望します。えへんえへんと二つばかり大きな咳払せきばらいをして席に着いた。おれは今度も手を叩たたこうと思つたが、またみんながおれの面を見るといやだから、やめにしておいた。山嵐が坐ると今度はうらなり先生が起つた。先生はご鄭寧ていねいに、自席から、座敷の端はしの末座まで行つて、慇懃いんぎんに一同に挨拶あいさつをした上、今般は一身上の都合で九州へ参る事になりましたについて、諸先生方が小生のためにこの盛大せいだいなる送別会をお開き下さつたのは、まことに感銘かんめいの至りに堪たえぬ次第で——ことにただ今は校長、教頭その他諸君の送別の辞を頂戴ちやうだいして、大いに難有ありがたく服膺ふくようする訳であります。私はこれから遠方へ参りますが、なにとぞ従前の通りお見捨てなくご愛顧あいこのほどを願います。とへえつく張つて席もどに戻つた。うらなり君はどこまで人が好いんだか、ほとんど底が知れない。自分がこんなに馬鹿にされている校長や、教頭きやうとうに恭しくお礼を云つてゐる。それも義理一遍いっぺんの挨拶あいさつならだが、あの様子や、あの言葉つきや、あの顔つきから云うと、心しんから感謝し

ているらしい。こんな聖人に真面目にお礼を云われたら、気の毒になつて、赤面しそんなものだが狸も赤シャツも真面目に謹聴きんちやうしているばかりだ。

挨拶が済んだら、あちらでもチュー、こちらでもチュー、という音がする。おれも真似をして汁しるを飲んでみたがまずいもんだ。口取くちとりに蒲鉾かまぼこはついてるが、どす黒くて竹輪の出来損できそこないである。刺身さしみも並んでるが、厚くつて鮪まぐろの切り身を生で食うと同じ事だ。それでも隣となり近所の連中はむしゃむしゃ旨うまそうに食っている。大方江戸前の料理を食った事がないんだろう。

そのうち爛徳利かんどくりが頻繁ひんぱんに往来し始めたら、四方が急に賑にぎやかになつた。野だ公は恭しく校長の前へ出て盃さかずきを頂いただきいてる。いやな奴だ。うらなり君は順々に献酬けんしゅうをして、一巡周いちじゆんめくるつもりとみえる。はなはだご苦労である。うらなり君がおれの前へ来て、一つ頂戴致いただきしましょうと袴はきのひだを正して申し込まれたから、おれも窮屈きゆうくつにズボンのままかしまつて、一盃はい差し上げた。せつかく参つて、すぐお別れになるのは残念ですね。ご出立しゅつたつはいつです、是非浜までお見送りをしましょうと云つたら、うらなり君はいえご用多おほのところ決してそ

れには及びおよびませんと答えた。うらなり君が何と云ったつて、おれは学校を休んで送る氣でいる。

それから一時間ほどするうちに席上は大分乱れて来る。まあ一杯ぱい、おや僕が飲めと云うのに……などと呂律ろれつの巡まわりかねるのも一人二人出来て来た。少々退屈たいくつしたから便所へ行つて、昔風な庭を星明りにすかして眺ながめていると山嵐が来た。どうださっきの演説はうまかつたろう。と大分得意である。大賛成だが一ヶ所氣に入らないと抗議こうぎを申し込んだら、どこが不賛成だと聞いた。

「美しい顔をして人を陥れるようなハイカラ野郎は延岡おに居らないから……と君は云つたろつ」

「うん」

「ハイカラ野郎だけでは不足だよ」

「じゃ何と云うんだ」

「ハイカラ野郎の、ペテン師の、イカサマ師の、猫被りの、香具師の、モモンガーの、岡っ引きの、わんわん鳴けば犬も同然な奴とでも云うがいい」

「おれには、そう舌は廻らない。君は能弁だ。第一単語を大変たくさん知ってる。それで演舌が出来ないのは不思議だ」

「なにこれは喧嘩のときに使おうと思って、用心のために取っておく言葉さ。演舌となっちゃ、こうは出ない」

「そうかな、しかしぺらぺら出るぜ。もう一遍やつて見たまえ」

「何遍でもやるさいいか。——ハイカラ野郎のペテン師の、イカサマ師の……」と云いかけてみると、椽側をどたばた云わして、二人ばかり、よろよろしながら馳け出して来た。

「両君そりゃひどい、——逃げるなんて、——僕が居るうちは決して逃さない、さあのみたまえ。——いかさま師？——面白い、いかさま面白い。——さあ飲みたまえ」

とおれと山嵐をぐいぐい引つ張って行く。実はこの兩人共便所に来たのだが、酔ってるもんだから、便所へはいるのを忘れて、おれ等を引つ張るのだろう。酔っ払いは目の中へ用事を拵えて、前の事はすぐ忘れてしまおうだろう。

「さあ、諸君、いかさま師を引つ張つて来た。さあ飲ましてくれたまえ。いかさま師をうんと云うほど、酔わしてくれたまえ。君逃げちやいかん」と逃げもせぬ、おれを壁際へ押し付けた。諸方を見廻してみると、膳の上に満足な肴の乗っているのは一つもない。自分の分を奇麗に食い尽して、五六間先へ遠征に出た奴もいる。校長はいつ帰ったか姿が見えない。

ところへお座敷はこちら？ と芸者が三四人はいつて来た。おれも少し驚ろいたが、壁際へ押し付けられているんだから、じつとしてただ見ていた。すると今まで床柱へもたれて例の琥珀のパイプを自慢そうに啣えていた、赤シャツが急に起つて、座敷を出にかかった。向うからはいつて来た芸者の一人が、行き違いながら、笑つて挨拶をした。その一人は一番若くて一番奇麗な奴だ。遠くで聞えなかつたが、おや今晚はぐらい云つたらしい。赤シャツは知らん顔をして出て行つたぎり、顔を出さなかつた。大方校長のあとを追懸けて帰つたんだろう。

芸者が来たら座敷中急に陽気になつて、一同が鬨の声を揚げて歓迎したのかと思うくらい、騒々しい。そうしてある奴はなんこを攫む。その声の大きな事、まるで居合抜の稽古

のようだ。こつちでは拳けんを打つてる。よつ、はつ、と夢中むちゆうで両手を振るところは、ダーク一座あやつりにんぎょうの操人形よりよつほど上手だ。向うの隅すみではおいお酌しやくだ、と徳利を振ってみて、酒だ酒だと言い直ちしている。どうもやかましくして騒々しくつてたまらない。そのうちで手持無沙汰てもちぶさたに下を向いて考え込んでるのはうらなり君ばかりである。自分のために送別会を開いてくれたのは、自分の転任おしを惜んでくれるんじゃない。みんなが酒を呑んで遊ぶためだ。自分独りが手持無沙汰で苦しむためだ。こんな送別会なら、開いてもらわない方がよつほどまだ。

しばらくしたら、めいめい胸間どうまじえ声を出して何か唄うたい始めた。おれの前へ来た一人の芸者が、あんた、なんぞ、唄いなはれ、と三味線かかを抱えたから、おれは唄わない、貴様唄ってみろと云つたら、金かねや太鼓たいこでねえ、迷子の迷子の三太郎と、どんどこ、どんのちゃんちぎりん叩たたいて廻まわつて逢あわれるものならば、わたしなんぞも、金や太鼓でどんどこ、どんのちゃんちぎりんと叩たたいて廻まわつて逢あいたい人がある、と二た息にうたつて、おおしんどと云つた。おおしんどなら、もつと楽なものをやればいいのに。

すると、いつの間にか傍へ来て坐つた、野だが、鈴ちゃん逢いたい人に逢つたと思つたら、すぐお帰りで、お気の毒さまみたようでげすと相変らず嘸し家みたような言葉使いをする。知りまへんと芸者はつんと済ました。野だは頓着なく、たまたま逢いは逢いながら……と、いやな声を出して義太夫の真似をやる。おきなはれやと芸者は平手で野だの膝を叩いたら野だは恐悦して笑つてる。この芸者は赤シャツに挨拶をした奴だ。芸者に叩かれて笑うなんて、野だもおめでたい者だ。鈴ちゃん僕が紀伊の国を踴るから、一つ弾いて頂戴と云い出した。野だはこの上まだ踴る氣でいる。

向うの方で漢学のお爺さんが齒のない口を歪めて、そりや聞えません伝兵衛さん、お前とわたしのその中は……とまでは無事に済したが、それから？ と芸者に聞いている。爺さんなんて物覚えのわるいものだ。一人が博物を捕まえて近頃こないなのが、でけましたぜ、弾いてみまほうか。よう聞いて、いなはれや——花月巻、白いリボンのハイカラ頭、乗るは自転車、弾くはヴァイオリン、半可の英語でへらへらと、I am glad to see you と唄うと、博物はなるほど面白い、英語入りだねと感心している。

山嵐は馬鹿に大きな声を出して、芸者、芸者と呼んで、おれが剣舞けんぶをやるから、三味線を弾けと号令を下した。芸者はあまり乱暴な声なので、あつけに取られて返事もしない。山嵐は委細構わず、ステッキを持って来て、踏破ふみやぶるせんざんぼんがくのけむり千山万岳烟と真中まんなかへ出て独りで隠かくし芸を演じている。ところへ野だかすでに紀伊きいの国を済まして、かつぼれを済まして、棚たなの達磨だるまさんを済まるして丸裸まるはだかの越中えつちゆうふんせし禪一つになつて、棕櫚しゆろぼうき箒を小脇こわきに抱かい込んで、日清談判破裂はれつして……と座敷中練りあるき出した。まるで気違きちがいだ。

おれはさつきから苦しそうに袴はかまも脱ぬがず控ひかえているうらなり君が気の毒にくでたまらなかつたが、なんぼ自分の送別会そうべつかいだつて、越中禪えつちゆうふんせしの裸躑はだかおどりまで羽織袴はねおりはかまで我慢がまんしてみている必要はあ
るまいと思つたから、そばへ行つて、古賀さんもう帰りましょうと退去たいそを勧めてみた。す
るとうらなり君は今日は私の送別会そうべつかいだから、私が先へ帰つては失礼しつれいです、どうぞご遠慮えんりよな
くと動く景色けしきもない。なに構かまうもんですか、送別会そうべつかいなら、送別会そうべつかいらしくするがいいです、
あの様さまをご覧ごらんなさい。気狂きちがい会かいです。さあ行きましよう、進すすまないのを無理むりに勧め、座
敷ざしきを出だかかるところへ、野だか箒はきを振り振り進行しんこうして来て、やご主人しゅじんが先へ帰るとはひど
い。日清談判にっしやうだんぱんだ。帰かへせないと箒はきを横よこにして行く手を塞ふさいだ。おれはさつきから肝癢かんしゃくが起おつ

ているところだから、日清談判なら貴様はちゃんちゃんだろうと、いきなり拳骨げんこつで、野だの頭をぽかりと喰くわしてやった。野だは二三秒の間毒気を抜かれた体ていで、ぼんやりしていたが、おやこれはひどい。お撲ぶちになつたのは情ない。この吉川をちようちやくご打擲うちやくとは恐れ入つた。いよいよもつて日清談判だ。とわからぬ事をならべているところへ、うしろから山嵐が何か騒動そうどうが始まつたと見てとつて、劍舞をやめて、飛んできたが、このていたらくを見て、いきなり頸筋くびすじをうんと攪つかんで引き戻もどした。日清………いたい。いたい。どうもこれは乱暴だと振りもがくところを横ねじに振ねじつたら、すたと倒たおれた。あとはどうなつたか知らない。途中とちゆうでうらなり君に別れて、うちへ帰つたら十一時過ぎだった。

十

祝勝会で学校はお休みだ。練兵場れんべいばで式があるというので、狸たぬきは生徒を引率して参列しな
くてはならない。おれも職員ひとりの一人としていつしよにくつついて行くんだ。町へ出ると日
の丸だらけで、まぼしいくらいである。学校の生徒は八百人もあるのだから、体操の教師
が隊伍たいごを整えて、一組一組の間を少しづつ明けて、それへ職員が一人か二人ふたりずつ監督かんとくとし
て割り込む仕掛けしかけである。仕掛しかけだけはすこぶる巧妙こうまうなものだが、実際はすこぶる不手際で
ある。生徒は小供こどもの上に、生意気で、規律を破らなくつては生徒の体面にかかわると思つ
てる奴等やつらだから、職員が幾人いくたりついて行つたつて何の役に立つもんか。命令も下さないのに
勝手な軍歌をうたつたり、軍歌をやめるとワーと訳もないのに鬨とぎの声を揚げたり、まるで
浪人ろうにんが町内をねりあるいてるようなものだ。軍歌も鬨とぎの声も揚げない時はがやがや何か
喋舌しゃべつてる。喋舌しゃべらないでも歩けそうなもんだが、日本人はみな口から先へ生れるのだから、
いくら小言こごを云いつたつて聞きつこない。喋舌しゃべるのもただ喋舌しゃべるのではない、教師のわ
る口を喋舌しゃべるんだから、下等だ。おれは宿直事件で生徒を謝罪せざいさして、まあこれならよか

ろうと思つていた。ところが実際は大違いである。下宿の婆さんの言葉を借りて云えば、正に大違いの勘五郎である。生徒があやまったのは心から後悔してあやまったのではない。ただ校長から、命令されて、形式的に頭を下げたのである。商人が頭ばかり下げて、狡い事をやめないのと一般で生徒も謝罪だけはするが、いたずらは決してやめるものでない。よく考えてみると世の中はみんなこの生徒のようなものから成立しているかも知れない。人があやまつたり詫びたりするのを、真面目に受けて勘弁するのは正直過ぎる馬鹿と云うんだらう。あやまるのも仮りにあやまるので、勘弁するのも仮りに勘弁するのだと思つてれば差し支えない。もし本当にあやまらせる気なら、本当に後悔するまで叩きつけなくてはいけない。

おれが組と組の間にはいつて行くと、天麩羅だの、団子だの、と云う声が絶えずする。しかも大勢だから、誰が云うのだから分らない。よし分つてもおれの事を天麩羅と云つたんじゃないやありません、団子と申したのじゃありません、それは先生が神経衰弱だから、ひがんで、そう聞くんだぐらい云うに極まつてる。こんな卑劣な根性は封建時代から、養成したこの土地の習慣なんだから、いくら云つて聞かしたつて、教えてやつたつて、到底直りつ

こない。こんな土地に一年も居ると、潔白なおれも、この真似まねをしなければならなく、なるかも知れない。向うむこでうまく言い抜ぬけられるような手段で、おれの顔を汚よじすのを抛ほうつておく、樗蒲ちよばい一いちはない。向こうが人ならおれも人だ。生徒だつて、子供だつて、ずう体はおれより大きいや。だから刑罰けいばつとして何か返報をしてやらなくつては義理ぎりがわるい。ところがこつちから返報をする時分に尋常じんじょうの手段で行くと、向うから逆振さかねを食くわして来る。貴様きさまがわるいからだと言いうと、初手はつてから逃げ路みちが作あつてある事だから滔々とうとうと弁べんじ立てる。弁べんじ立てておいて、自分の方を表向きだけ立派にしてそれからこつちの非ひを攻撃こうげきする。もともと返報にした事だから、こちらの弁護べんごは向うの非ひが拳こぶしがらない上は弁護べんごにならない。つまりは向うから手を出しておいて、世間体はこつちが仕掛けた喧嘩けんかのように、見倣みなされてしままう。大変な不利益だ。それなら向うのやるなり、愚迂ぐう多良童子たらどうじを極め込んでいれば、向うはますます増長するばかり、大きく云えば世の中のためにならない。そこで仕方がないから、こつちも向うの筆法を用いて捕つかまえられないで、手の付けようのない返報をしなくてはならなくなる。そうなつては江戸えどつ子も駄目だめだ。駄目だめだが一年もこうやられる以上は、おれも人間だから駄目だめでも何でもそうならなくつちや始末しまつがつかない。どうしても早く東

京へ帰つて清きよといつしよになるに限る。こんな田舎いなかに居るのは墮落だらくしに来ているようなものだ。新聞配達をしたつて、ここまで墮落するよりはました。

こう考えて、いやいや、附ついてくると、何だか先鋒せんぽうが急にがやがや騒さわぎ出した。同時に列はびたりと留まる。変だから、列を右へはずして、向うを見ると、大手町おおてまちを突つき当つて薬師町やくしまちへ曲がる角の所で、行き詰づまつたぎり、押し返したり、押し返されたりして揉もみ合っている。前方から静かに静かにと声を洩からして来た体操教師に何ですと聞くと、曲り角で中学校と師範しはん学校が衝突しょうとつしたんだと云う。

中学と師範とはどこの県下でも犬と猿さるのように仲がわるいそうだ。なぜだかわからないが、まるで気風が合わない。何かあると喧嘩をする。大方狭せまい田舎で退屈たいくつだから、暇潰ひまつぶしにやる仕事なんだろう。おれは喧嘩は好きな方だから、衝突と聞いて、面白半分に馳かけ出して行つた。すると前の方にいる連中は、しきりに何だ地方税の癖くせに、引き込めと、怒鳴どなつてる。後ろからは押せ押せと大きな声を出す。おれは邪魔じゃまになる生徒の間をくぐり抜けて、曲がり角へもう少しで出ようとした時に、前へ！ と云う高く鋭すどどい号令が聞きえたと思つたら師範学校の方は肅肅しゆくしゆくとして行進を始めた。先を争つた衝突は、折合がついたに

は相違そういないが、つまり中学校が一步を譲ゆずつたのである。資格から云うと師範学校の方が上だそうだ。

祝勝の式はすこぶる簡単なものであつた。旅団長が祝詞を読む、知事が祝詞を読む、参列者が万歳ばんざいを唱える。それでおしまいだ。余興は午後にあると云う話だから、ひとまず下宿へ帰つて、こないだじゅうから、気に掛かつていた、清への返事をかきかけた。今度はもつと詳くわしく書いてくれとの注文だから、なるべく念入ねんいりに認めしめたなくつちやならない。しかしいぎとなつて、半切はんぎれを取り上げると、書く事はたくさんあるが、何から書き出していいか、わからない。あれにしようか、あれは面倒臭めんどうくさい。これにしようか、これはつまらない。何か、すらすらと出て、骨が折れなくつて、そうして清が面白がるようなものはないかしらん、と考えてみると、そんな注文通りの事件は一つもなさそうだ。おれは墨すみを磨すつて、筆をしめして、巻紙まきしを睨にらめて、——巻紙を睨にらめて、筆をしめして、墨を磨すつて——同じ所作を同じように何返も繰くり返したあと、おれには、とても手紙は書けるものではないと、諦あきらめて硯すずりの蓋ふたをしてしまった。手紙なんぞをかくのは面倒臭い。やつぱり東京まで出掛けて

行つて、逢つて話をするのが簡便だ。清の心配は察しないでもないが、清の注文通りの手紙を書くのは三七日の断食よりも苦しい。

おれは筆と巻紙を抛り出して、ごろりと転がつて肱枕をして庭の方を眺めてみたが、やつぱり清の事が気にかかる。その時おれはこう思った。こうして遠くへ来てまで、清の身の上を案じていてやりさえすれば、おれの真心は清に通じるに違いない。通じさえすれば手紙なんぞやる必要はない。やらなければ無事で暮してると思つてゐるだろう。たよりは死んだ時か病氣の時か、何か事の起つた時にやりさえすればいい訳だ。

庭は十坪ほどの平庭で、これという植木もない。ただ一本の蜜柑があつて、塀のそとから、目標になるほど高い。おれはうちへ帰ると、いつでもこの蜜柑を眺める。東京を出た事のないものには蜜柑の生つてゐるところはすこぶる珍しいものだ。あの青い実がだんだん熟してきて、黄色になるんだろうが、定めて奇麗だろう。今でももう半分色の変つたのがある。婆さんに聞いてみると、すこぶる水気の多い、旨い蜜柑だそうだ。今に熟たら、たと召し上がれと云つたから、毎日少しづつ食つてやろう。もう三週間もしたら、充分食えるだろう。まさか三週間以内にここを去る事もなからう。

おれが蜜柑の事を考えているところへ、偶然山嵐が話しにやつて来た。今日は祝勝会だから、君といっしょにご馳走を食おうと思つて牛肉を買つて来た、竹の皮の包を袂から引きずり出して、座敷の真中へ抛り出した。おれは下宿で芋責豆腐責になつてる上、蕎麦屋行き、団子屋行きを禁じられてる際だから、そいつは結構だと、すぐ婆さんから鍋と砂糖をかり込んで、煮方に取りかかった。

山嵐は無暗に牛肉を頬張りながら、君あの赤シャツが芸者に馴染のある事を知つてると聞くから、知つてるとも、この間うらなりの送別会の時に来た一人がそうだろうと云つたら、そうだ僕はこの頃ようやく勘づいたのに、君はなかなか敏捷だと大いにほめた。

「あいつは、ふた言目には品性だの、精神的娯楽だのと云う癖に、裏へ廻つて、芸者と関係なんかつけどる、怪しからん奴だ。それもほかの人が遊ぶのを寛容するならいいが、君が蕎麦屋へ行つたり、団子屋へはいるのさえ取締上害になると云つて、校長の口を通して注意を加えたじゃないか」

「うん、あの野郎の考えじゃ芸者買は精神的娯楽で、天麩羅や、団子は物理的娯楽なんだろう。精神的娯楽なら、もっと大べらにやるがいい。何だあの様は。馴染の芸者がはいつて

くると、入れ代りに席をはずして、逃げるなんて、どこまでも人を胡魔化す気だから気に食わない。そうして人が攻撃すると、僕は知らないとか、露西亞文学だとか、俳句が新体詩の兄弟分だとか云つて、人を烟に捲くつもりなんだ。あんな弱虫は男じゃないよ。全く御殿女中の生れ変りか何かだぜ。ことによると、あいつのおやじは湯島のかげまかもしれない」

「湯島のかげま、また何だ」

「何でも男らしくないもんだらう。——君そのところはまだ煮えていないぜ。そんなのを食うと條虫が湧くぜ」

「そうか、大抵大丈夫だろう。それで赤シャツは人に隠れて、温泉の町の角屋へ行つて、芸者と会見するそうだ」

「角屋つて、あの宿屋か」

「宿屋兼料理屋さ。だからあいつを一番へこますためには、あいつが芸者をつれて、あそこへはいり込むところを見届けておいて面詰するんだね」

「見届けるつて、夜番でもするのかい」

「うん、角屋の前に枡屋ますやという宿屋があるだろう。あの表二階をかりて、障子しょうじへ穴をあけて、見ているのさ」

「見ているときに来るかい」

「来るだろう。どうせひと晩じゃいけない。二週間ばかりやるつもりでなくっちゃ」

「随分ずいぶん疲れるぜ。僕あ、おやじの死ぬとき一週間ばかり徹夜てつやして看病した事があるが、あとでぼんやりして、大いに弱った事がある」

「少しぐらい身体が疲れたって構わんさ。あんな奸物かんぶつをあのままにしておく、日本のためにならないから、僕が天に代ちかって誅戮ちゆうりくを加えるんだ」

「愉快ゆかいだ。そう事が極まれば、おれも加勢してやる。それで今夜から夜番をやるのかい」

「まだ枡屋ますやに懸合かけあってないから、今夜は駄目だ」

「それじゃ、いつから始めるつもりだい」

「近々のうちやるさ。いずれ君に報知ほうちをするから、そうしたら、加勢してくれたまえ」

「よろしい、いつでも加勢する。僕は計略けいりやくは下手へただが、喧嘩けんかとくるとこれでなかなかすばしいぜ」

おれと山嵐がしきりに赤シャツ退治の計略を相談していると、宿の婆さんが出て来て、学校の生徒さんが一人、堀田先生にお目にかかりたいてお出でたぞなもし。今お宅へ参じたのじゃが、お留守じゃけれ、大方ここじやろうて捜し当ててお出でたのじゃがなもしと、鬨の所へ膝を突いて山嵐の返事を待つてる。山嵐はそうですかと玄関まで出て行つたが、やがて帰つて来て、君、生徒が祝勝会の余興を見に行かないかつて誘いに来たんだ。今日は高知から、何とか踊りをしに、わざわざここまで多人数乗り込んで来ているのだから、是非見物しろ、めつたに見られない踊だというんだ、君もいつしよに行つてみたまえと山嵐は大いに乗り気で、おれに同行を勧める。おれは踊なら東京でたくさん見ている。毎年八幡様のお祭りには屋台が町内へ廻つてくるんだから汐酌みでも何でもちやんと心得ている。土佐つぼの馬鹿踊なんか、見たくもないと思つたけれども、せつかく山嵐が勧めるもんだから、つい行く気になつて門へ出た。山嵐を誘いに来たものは誰かと思つたら赤シャツの弟だ。妙な奴が来たもんだ。

会場へはいると、回向院の相撲か本門寺の御会式のように幾筋となく長い旗を所々に植え付けた上に、世界万国の国旗をことごとく借りて来たくらい、縄から縄、綱から綱へ渡

しかけて、大きな空が、いつになく賑やかに見える。東の隅に一夜作りの舞台を設けて、ここでいわゆる高知の何とか踊りをやるんだそうだ。舞台を右へ半町ばかりくると葭簀の囲いをして、活花が陳列してある。みんなが感心して眺めているが、一向くだらないものだ。あんなに草や竹を曲げて嬉しがるなら、背虫の色男や、跛の亭主を持つて自慢するがよからう。

舞台とは反対の方面で、しきりに花火を揚げる。花火の中から風船が出た。帝国万歳と書いてある。天主の松の上をふわふわ飛んで営所のなかへ落ちた。次はぽんと音がして、黒い団子が、しよつと秋の空を射抜くように揚がると、それがおれの頭の上で、ぽかりと割れて、青い煙が傘の骨のように開いて、だらだらと空中に流れ込んだ。風船がまた上がった。今度は陸海軍万歳と赤地に白く染め抜いた奴が風に揺られて、温泉の町から、相生村の方へ飛んでいった。大方観音様の境内へでも落ちたろう。

式の時はずいほどでもなかったが、今度は大変な人出だ。田舎にもこんなに人間が住んでるかと思ろいたぐらいうじやうじやしている。利口な顔はあまり見当たらないが、数から云

うとたしかに馬鹿に出来ない。そのうち評判の高知の何とか踊が始まった。踊というから藤間か何ぞのやる踊りかと早合点していたが、これは大間違いであった。

いかめしい後鉢巻うしろはちまきをして、立つ付け袴つつけばかまを穿いた男が十人ばかりずつ、舞台の上に三列に並んで、その三十人がことごとく抜き身を携さげているには魂消たまげた。前列と後列の間はわずか一尺五寸ぐらいだろう、左右の間隔かんかくはそれより短いとも長くはない。たつた一人列を離はなれて舞台の端はしに立つてるのがあるばかりだ。この仲間外はずれの男は袴だけはつけているが、後鉢巻は儉約して、抜身の代りに、胸へ太鼓たいこを懸かけている。太鼓は太神楽たいかぐらの太鼓と同じ物だ。この男がやがて、いやあ、はああと呑気のんきな声を出して、妙な謡うたをうたいながら、太鼓をばこぼん、ばこぼんと叩たたく。歌の調子は前代未聞の不思議なものだ。三河万歳みかわまんざいと普陀洛ふだらくやの合併がっぺいしたものと思えば大した間違まちがいにはならない。

歌はすこぶる悠長ゆうちやうなもので、夏分の水飴みずあめのように、だらしないが、句切りをとるためにばこぼんを入れるから、のべつのも拍子ひょうしは取れる。この拍子に応じて三十人の抜き身がぴかぴかと光るのだが、これはまたすこぶる迅速じんそくなお手際で、拝見ひやひやしても冷々ひやひやする。隣となりも後ろも一尺五寸以内に生きた人間が居て、その人間がまた切れる抜き身を自

分と同じように振り舞わすのだから、よほど調子が揃わなければ、同志撃を始めて怪我をする事になる。それも動かないで刀だけ前後とか上下とかに振るのなら、まだ危険もないが、三十人が一度に足踏みをして横を向く時がある。ぐるりと廻る事がある。膝を曲げる事がある。隣りのものが一秒でも早過ぎるか、遅過ぎれば、自分の鼻は落ちるかも知れない。隣りの頭はそがれるかも知れない。抜き身の動くのは自由自在だが、その動く範囲は一尺五寸角の柱のうちにかぎられた上に、前後左右のものと同方向に同速度にひらめかなければならない。こいつは驚いた、なかなかもつて汐酌や関の戸の及ぶところでない。聞いてみると、これははなはだ熟練の入るもので容易な事では、こういう風に調子が合わないというのだ。ことにむずかしいのは、かの万歳節のぼこぼん先生だそうだ。三十人の足の運びも、手の働きも、腰の曲げ方も、ことごとくこのぼこぼん君の拍子一つで極まるのだというのだ。傍で見て見ると、この大将が一番呑気そうに、いやあ、はああと気楽にうたつてるが、その実ははなはだ責任が重くつて非常に骨が折れるとは不思議なものだ。

おれと山嵐が感心のあまりこの躡を余念なく見物していると、半町ばかり、向うの方で急にわつと云う鬨の声がして、今まで穏やかに諸所を縦覧していた連中が、にわかには波を

打って、右左りに揺き始める。喧嘩だ喧嘩だと云う声があると、人の袖を潜り抜けて来た赤シャツの弟が、先生また喧嘩です、中学の方で、今朝の意趣返しをするんで、また師範の奴と決戦を始めたところです、早く来て下さいと云いながらまた人の波のなかへ潜り込んでどつかへ行ってしまった。

山嵐は世話の焼ける小僧だまた始めたのか、いい加減にすればいいのにと逃げる人を避けながら一散に馳け出した。見ている訳にも行かないから取り鎮めるつもりだろう。おれは無論の事逃げる気はない。山嵐の踵を踏んであとからすぐ現場へ馳けつけた。喧嘩は今が真最中である。師範の方は五六十人もあろうか、中学はたしかに三割方多い。師範は制服をつけているが、中学は式後大抵は日本服に着換えているから、敵味方はすぐわかる。しかし入り乱れて組んづ、解れつ戦つてるから、どこから、どう手を付けて引き分けていか分らない。山嵐は困つたなと云う風で、しばらくこの乱雑な有様を眺めていたが、こくなつちや仕方がない。巡查がくると面倒だ。飛び込んで分けようと、おれの方を見て云うから、おれは返事もしないで、いきなり、一番喧嘩の烈しそうな所へ躍り込んだ。止せ止せ。そんな乱暴をすると学校の体面に関わる。よさないかと、出るだけの声を出して敵

と味方の分界線らしい所を突き貫けようとしたが、なかなかそう旨くは行かない。一二間はいったら、出る事も引く事も出来なくなつた。目の前に比較的大きな師範生が、十五六の中学生と組み合っている。止せと云つたら、止さないかと師範生の肩を持つて、無理に引き分けようとする途端にだれか知らないが、下からおれの足をすくつた。おれは不意を打たれて握つた、肩を放して、横に倒れた。堅い靴でおれの背中の上へ乗つた奴がある。両手と膝を突いて下から、跳ね起きたら、乗つた奴は右の方へころがり落ちた。起き上がつて見ると、三間ばかり向うに山嵐の大きな身体が生徒の間に挟まりながら、止せ止せ、喧嘩は止せ止せと揉み返されてるのが見えた。おい到底駄目だと云つてみたが聞えないのか返事もしない。

ひゆうと風を切つて飛んで来た石が、いきなりおれの頬骨へ中つたなと思つたら、後ろからも、背中を棒でどやした奴がある。教師の癖に出ている、打て打てと云う声がある。教師は二人だ。大きい奴と、小さい奴だ。石を抛げろ。と云う声もある。おれは、なに生意気な事をぬかすな、田舎者の癖にと、いきなり、傍に居た師範生の頭を張りつけてやつた。石がまたひゆうと来る。今度はおれの五分刈の頭を掠めて後ろの方へ飛んで行つた。

山嵐はどうなったか見えない。こうなつちや仕方がない。始めは喧嘩をとめにはいつたんだが、どやされたり、石をなげられたりして、恐れ入って引き下がるうんでれがあるものか。おれを誰だと思うんだ。身長は小さくつても喧嘩の本場で修行を積んだ兄さんだと無茶苦茶に張り飛ばしたり、張り飛ばされたりしていると、やがて巡査だ巡査だ逃げろ逃げろと云う声があった。今まで葛練りの中で泳いでるように身動きも出来なかつたのが、急に楽になつたと思つたら、敵も味方も一度に引上げてしまった。田舎者でも退却は巧妙だ。クロパトキンより旨いくらいである。

山嵐はどうしたかを見ると、紋付の一重羽織をずたずたにして、向うの方で鼻を拭いている。鼻柱をなぐられて大分出血したんだそうだ。鼻がふくれ上がって真赤になつてすこぶる見苦しい。おれは飛白の袷を着ていたから泥だらけになつたけれども、山嵐の羽織ほどな損害はない。しかし頬ぺたがぴりぴりしてたまらない。山嵐は大分血が出ているぜと教えてくれた。

夏目漱石

巡査は十五六名来たのだが、生徒は反対の方面から退却したので、捕ま^{つら}ったのは、おれと山嵐だけである。おれらは姓名^{せいめい}を告げて、一部始終を話したら、ともかくも警察まで来いと云うから、警察へ行つて、署長の前で事の顛末^{てんまつ}を述べて下宿へ帰った。

あくる日眼が覚めてみると、身体中痛くてたまらない。久しく喧嘩をしつげなかつたから、こんな回答るんだらう。これじゃあんまり自慢もできないと床の中で考えていると、婆さんが四国新聞を持ってきて枕元へ置いてくれた。実は新聞を見るのも退儀なんだが、男がこれしきの事に閉口たれて仕様があるものかと無理に腹這いになつて、寝ながら、二頁を開けてみると驚ろいた。昨日の喧嘩がちゃんと出ている。喧嘩の出ているのは驚ろかないのだが、中学の教師堀田某と、近頃東京から赴任した生意気なる某とが、順良なる生徒を使喚してこの騒動を喚起せるのみならず、両人は現場にあつて生徒を指揮したる上、みだりに師範生に向つて暴行をほしいままにしたりと書いて、次にこんな意見が附記してある。本県の中学は昔時より善良温順の気風をもつて全国の羨望するところなりしが、軽薄なる二豎子のために吾校の特権を毀損せられて、この不面目を全市に受けたる以上は、吾人は奮然として起つてその責任を問わざるを得ず。吾人は信ず、吾人が手を下す前に、当局者は相当の処分をこの無頼漢の上に加えて、彼等をして再び教育界に足を入るる余地

なからしむる事を。そうして一字ごとにみんな黒点を加えて、お灸を据えたつもりでいる。おれは床の中で、糞でも喰らえと云いながら、むっくり飛び起きた。不思議な事に今まで身体の関節が非常に痛かったのが、飛び起きると同時に忘れたように軽くなった。

おれは新聞を丸めて庭へ抛げつけたが、それでもまだ気に入らなかつたから、わざわざ後架へ持つて行って棄てて来た。新聞なんて無暗な嘘を吐くもんだ。世の中に何が一番法螺を吹くと云つて、新聞ほどの法螺吹きはあるまい。おれの云つてしかるべき事をみんな向うで並べていやがる。それに近頃東京から赴任した生意気な某とは何だ。天下に某と云う名前の人があるか。考えてみる。これでもれっきとした姓もあり名もあるんだ。系図が見たけりや、多田満仲以来の先祖を一人残らず拝ましてやらあ。――顔を洗つたら、頬べたが急に痛くなつた。婆さんに鏡をかせと云つたら、けさの新聞をお見たかなもしと聞く。読んで後架へ棄てて来た。欲しけりや拾つて来いと云つたら、驚いて引き下がった。鏡で顔を見ると昨日と同じように傷がついている。これでも大事な顔だ、顔へ傷まで付けられた上へ生意気なる某などと、某呼ばわりをされればたくさんだ。

今日の新聞に辟易へきえきして学校を休んだなどと云われちや一生の名折れだから、飯を食つていの一号に出頭した。出てくる奴やつも、出てくる奴もおれの顔を見て笑っている。何かおかしいんだ。貴様達にこしらえてもらった顔じゃあるまいし。そのうち、野だが出て来て、いや昨日はお手柄てがらで、——名譽めいよのご負傷でげすか、と送別会の時に撲なぐつた返報と心得たのか、いやに冷かしたから、余計な事を言わずに絵筆でも舐なめていろと云つてやった。するところや恐入おそれいりやした。しかしさぞお痛い事でげしようと言うから、痛かろうが、痛くなくかろうがおれの面だ。貴様の世話になるもんかと怒鳴どなりつけてやったら、向う側むきの自席うみへ着いて、やつぱりおれの顔を見て、隣となりの歴史の教師と何か内所話をして笑っている。それから山嵐が出頭した。山嵐の鼻に至つては、紫色むらさきいろに膨張ぼうちようして、掘ほつたら中から膿うみが出そうに見える。自惚うぬぼれのせいか、おれの顔よりよつぽど手ひどく遣やられてゐる。おれと山嵐は机を並べて、隣り同志の近い仲で、お負けにその机が部屋の戸口から真正面にあるんだから運がわるい。妙な顔が二つ塊かたまっている。ほかの奴は退屈たいくつにさえなるときつとこつちばかり見る。飛んだ事だと口で云うが、心のうちではこの馬鹿ばかがと思つてるに相違そういない。それでなければああいう風に私語さしご合あつてはくすくす笑う訳がない。教場へ出ると生

徒は拍手をもつて迎むかえた。先生万歳ばんざいと云うものが二三人あつた。景気がいいんだか、馬鹿にされてるんだか分わからない。おれと山嵐やまあらしがこんなに注意しやうてんの焼点しょうてんとなつてるなかに、赤シャツばかりは平常の通り傍そばへ来て、どうも飛んだ災難さいなんでした。僕は君等きみらに對してお気の毒あつちやうでなりません。新聞の記事は校長とも相談さうだんして、正誤を申し込こむ手続きていじきにしておいたから、心配しんぱいしなくてもいい。僕の弟が堀田君ほりたを誘さそうに行つたから、こんな事が起おこつたので、僕は実に申し訳わけがない。それでこの件けんについてはあくまで尽力じんりきよくするつもりだから、どうかあしからず、などと半分謝罪せんざい的な言葉を並べている。校長は三時間目に校長室から出てきて、困こつた事を新聞がかき出だしましたね。むずかしくならなければいいがと多少心配しんぱいそうに見えた。おれには心配しんぱいなんかなく、先で免職めんしやくをするなら、免職めんしやくされる前に辞表じひょうを出してしまふだけだ。しかし自分がわるくないののこつちから身を引くのは法螺吹ほらふきの新聞屋しんぶんやをますます増長ぞうちやうさせる訳わけだから、新聞屋を正誤せいごさせて、おれが意地いぢにも務めるのが順当じゆんたうだと考かんえた。帰りがけに新聞屋に談判だんぱんに行こうと思つたが、学校がくから取消とりけしの手続きていじきはしたと云うから、やめた。

おれと山嵐は校長と教頭に時間の合間を見計つて、嘘のないところを一応説明した。校長と教頭はそうだろう、新聞屋が学校に恨みを抱いて、あんな記事のことさらに掲げたんだらうと論断した。赤シャツはおれ等の行為を弁解しながら控所を一人ごとに廻つてあるいていた。ことに自分の弟が山嵐を誘い出したのを自分の過失であるかのごとく吹聴していた。みんなは全く新聞屋がわるい、怪しからん、両君は実に災難だと云つた。

帰りがけに山嵐は、君赤シャツは臭いぜ、用心しないとやられるぜと注意した。どうせ臭いんだ、今日から臭くなつたんじゃないやなかうと云うと、君まだ気が付かないか、きのうわざわざ、僕等を誘い出して喧嘩のなかへ、捲き込んだのは策だぜと教えてくれた。なるほどそこまでは気がつかなかった。山嵐は粗暴なようだが、おれより智慧のある男だと感心した。

「ああやつて喧嘩をさせておいて、すぐあとから新聞屋へ手を廻してあんな記事をかかせたんだ。実に奸物だ」

「新聞までも赤シャツか。そいつは驚いた。しかし新聞が赤シャツの云う事をそう容易く聴くかね」

「聴かなくつて。新聞屋に友達が居りや訳はないさ」

「友達が居るのかい」

「居なくても訳ないさ。嘘をついて、事実これこれだと話しや、すぐ書くさ」

「ひどいもんだな。本当に赤シャツの策なら、僕等はこの事件で免職になるかも知れない
ね」

「わるくすると、遣られるかも知れない」

「そんなら、おれは明日辞表を出してすぐ東京へ帰つちまわあ。こんな下等な所に頼ん
だつて居るのはいやだ」

「君が辞表を出したつて、赤シャツは困らない」

「それもそうだな。どうしたら困るだろう」

「あんな奸物の遣る事は、何でも証拠の拳がらないように、拳がらないようにと工夫するん
だから、反駁するのはむずかしいね」

「厄介だな。それじゃ濡衣を着るんだね。面白くもない。天道是耶非かだ」

「まあ、もう二三日様子を見ようじゃないか。それでいよいよよとなったら、温泉ゆの町で取って抑おさえるより仕方がないだろう」

「喧嘩事件は、喧嘩事件としてか」

「そうさ。こつちはこつちで向うの急所を抑えるのさ」

「それもよからう。おれは策略は下手へたなんだから、万事よろしく頼む。いざとなれば何でもする」

俺と山嵐はこれで分わかれた。赤シャツが果はたたして山嵐の推察通りをやったのなら、実にひどい奴だ。到底智慧比しやうていべで勝てる奴ではない。どうしても腕力わんりよくでなくつちや駄目だめだ。なるほど世界に戦争は絶えない訳だ。個人でも、とどの詰つまりは腕力だ。

あくる日、新聞のくるのを待ちかねて、披ひらいてみると、正誤どころか取り消しも見えな
い。学校へ行って狸たぬきに催促さいそくすると、あしたぐらい出すでしょうと云う。明日になつて六号
活字で小さく取消が出た。しかし新聞屋の方で正誤は無論しておらない。また校長に談判
すると、あれより手続きのしようはないのだと云う答だ。校長なんて狸たぬきのような顔をして、
いやにフロック張はっているが存外無勢力なものだ。虚偽きよぎの記事を掲げた田舎新聞一つ詫あやま

らせる事が出来ない。あんまり腹が立ったから、それじゃ私が一人で行って主筆に談判すると云ったら、それはいかん、君が談判すればまた悪口を書かれるばかりだ。つまり新聞屋にかかれた事は、うそれにせよ、本当にせよ、つまりどうする事も出来ないものだ。あきらめるより外に仕方がないと、坊主の説教じみた説諭せつゆを加えた。新聞がそんな者なら、一日も早く打ぶつ潰つぶしてしまつた方が、われわれの利益だろう。新聞にかかれるのと、泥鼈すつぽんに食くいつかれるとが似たり寄つたりだとは今日こんにちただ今狸の説明によつて始めて承知つかまつ仕まつつた。

それから三日ばかりして、ある日の午後、山嵐ふんぜんが憤然とやつて来て、いよいよ時機が来た、おれは例の計画を断行するつもりだと云うから、そうかそれじゃおれもやろうと、即座そくざに一味徒党に加盟した。ところが山嵐が、君はよす方がよからうと首を傾かたむけた。なぜと聞くと君は校長に呼ばれて辞表を出せと云われたかと尋ねるから、いや云われない。君は？ と聴き返すと、今日校長室で、まことに気の毒だけれども、事情やむをえんから処決しよけつしてくれと云われたとの事だ。

「そんな裁判はないぜ。狸は大方腹鼓はらつづみを叩たたき過ぎて、胃の位置が顛倒てんどうしたんだ。君とおれは、いっしょに、祝勝会へ出てき、いっしょに高知のびかびか躡おとりを見てき、いっしょに喧

嘩をとめにはいったんじゃないか。辞表を出せというなら公平に両方へ出せと云うがいい。なんで田舎いなかの学校はそう理窟りくつが分らないんだろう。焦慮じれつたいな」

「それが赤シャツの指金さしがねだよ。おれと赤シャツとは今までの行懸り上到底とうてい両立しない人間だが、君の方は今の通り置いても害にならないと思ってるんだ」

「おれだって赤シャツと両立するものか。害にならないと思うなんて生意気だ」

「君はあまり単純過ぎるから、置いたって、どうでも胡魔化ごまかされると考えてるのさ」

「なお悪いや。誰だれが両立してやるものか」

「それに先だって古賀が去ってから、まだ後任こうじんが事故のために到着とうちやくしないだろう。その上に君と僕を同時に追い出しちゃ、生徒の時間に明きが出来て、授業にさし支つかえるからな」

「それじゃおれを間あいのくさびに一席うかが伺かわせる気なんだな。こん畜生ちくしよう、だれがその手に乗るものか」

翌日あくるひおれは学校へ出て校長室へ入って談判を始めた。

「何で私に辞表を出せと云わないんですか」

「へえ？」と狸はあつげに取られている。

「堀田には出せ、私には出さないで好いと云う法がありますか」

「それは学校の方の都合で……」

「その都合が間違つてまさあ。私が出さなくつて済むなら堀田だつて、出す必要はないでしょう」

「その辺は説明が出来かねますが——堀田君は去られてもやむをえんのですが、あなたは辞表をお出しになる必要を認めませんから」

なるほど狸だ、要領を得ない事ばかり並べて、しかも落ち付きはら払つてる。おれは仕様が
ないから

「それじゃ私も辞表を出しましょう。堀田君一人辞職させて、私が安閑あんかんとして、留まつていられると思つていらつしやるかも知れないが、私にはそんな不人情な事は出来ません」

「それは困る。堀田も去りあなたも去つたら、学校の数学の授業がまるで出来なくなつてしまふから……」

「出来なくなつても私の知つた事じゃありません」

「君そう我儘わがままを云うものじゃない、少しは学校の事情も察してくれなくつちや困る。それに、来てから一月立つか立たないのに辞職したと云うと、君の将来の履歴りれきに關係するから、その辺も少しは考えたらいいでしよう」

「履歴なんか構うもんですか、履歴より義理が大切です」

「そりゃごもつとも——君の云うところは一々ごもつともだが、わたしの云う方も少しは察して下さい。君が是非辞職すると云うなら辞職されてもいいから、代りのあるまでどうかやってみてほしい。とにかく、うちでもう一返考え直してみして下さい」

考え直すつて、直しようのない明々白白たる理由だが、狸ねこが蒼あおくなつたり、赤くなつたりして、可愛想かわいそうになつたからひとまず考え直す事として引き下がった。赤シャツには口もきかなかつた。どうせ遣つつけるなら塊かためて、うんと遣つつける方がいい。

山嵐に狸と談判した模様を話したら、大方そんな事だろうと思つた。辞表の事はいざとなるまでそのままにしておいても差支さしつかえあるまいとの話だつたから、山嵐の云う通りにした。どうも山嵐の方がおれよりも利巧りこうらしいから万事山嵐の忠告に従う事にした。

山嵐はいよいよ辞表を出して、職員一同に告別の挨拶をして浜の港屋まで下ったが、人に知れないように引き返して、温泉の町の枳屋の表二階へ潜んで、障子へ穴をあけて覗き出した。これを知ってるものはおればかりだろう。赤シャツが忍んで来ればどうせ夜だ。しかも宵の口は生徒やその他の目があるから、少なくとも九時過ぎに極つてる。最初の二晩はおれも十一時頃まで張番をしたが、赤シャツの影も見えない。三日目には九時から十時半まで覗いたがやはり駄目だ。駄目を踏んで夜なかに下宿へ帰るほど馬鹿気た事はない。四五日すると、うちの婆さんが少々心配を始めて、奥さんのおありるのに、夜遊びはおやめたがええぞなもと忠告した。そんな夜遊びとは夜遊びが違う。こつちのは天に代つて誅戮を加える夜遊びだ。とはいうものの一週間も通つて、少しも験が見えないと、いやになるもんだ。おれは性急な性分だから、熱心になると徹夜でもして仕事をするが、その代り何によらず長持ちのした試しがない。いかに天誅党でも飽きる事に変わりはない。六日目には少々いやになつて、七日目にはもう休もうかと思つた。そこへ行くと山嵐は頑固なものだ。宵から十二時過までは眼を障子へつけて、角屋の丸ぼやの瓦斯燈の下を睨めつきりである。おれが行くと今日は何人客があつて、泊りが何人、女が何人といろいろな統計を

示すのには驚ろいた。どうも来ないようじやないかと云うと、うん、たしかに来るはずだがと時々腕組うでぐみをして溜息ためいきをつく。可愛想に、もし赤シャツがここへ一度来てくれなければ、山嵐やまがらしは、生涯しょうがい天誅てんしゅうを加える事は出来ないのである。

八日目には七時頃から下宿を出て、まずゆるりと湯に入つて、それから町で鶏卵けいらんを八つ買った。これは下宿の婆さんの芋責いもぢめに応ずる策である。その玉子を四つずつ左右の袂たもとへ入れて、例の赤手拭あかてぬぐいを肩かたへ乗せて、懐手ふしろうでをしながら、柎屋ますやの楷子段はしごだんを登つて山嵐の座敷ざしきの障子ふしをあけると、おい有望有望と韋駄天いだてんのような顔は急に活気を呈ていした。昨夜ゆうべまでは少し塞ふさぎの気味で、はたで見ているおれさえ、陰気臭いんきくさいと思つたくらいだが、この顔色を見たら、おれも急にうれしくなつて、何も聞かない先から、愉快愉快と云つた。

「今夜七時半頃あの小鈴こすずと云う芸者が角屋へはいつた」

「赤シャツといつしよか」

「いや」

「それじゃ駄目だ」

「芸者は二人づれだが、——どうも有望らしい」

「どうして」

「どうしてって、ああ云う狡ずるい奴だから、芸者を先へよこして、後から忍んでくるかも知れない」

「そうかも知れない。もう九時だろう」

「今九時十二分ばかりだ」と帯の間からニッケル製の時計を出して見ながら云ったが「おい洋燈らんぶを消せ、障子へ二つ坊主頭が写つてはおかしい。狐きつねはすぐ疑うたがぐるから」

おれは一貫張いっかんばりの机の上にあつた置き洋燈らんぶをふつと吹きつけた。星明りで障子だけは少々あかるい。月はまだ出ていない。おれと山嵐いっしょうけんめいは一生懸命に障子へ面かおをつけて、息を凝こらしている。チーンと九時半の柱時計が鳴った。

「おい来るだろうかな。今夜来なければ僕はもう厭いやだぜ」

「おれは銭のつづく限りやるんだ」

「銭っていくらあるんだい」

「今日までで八日分五円六十銭払った。いつ飛び出しても都合つじうのいいように毎晩かんじよう勘定するんだ」

「それは手廻しがいい。宿屋で驚いてるだろう」

「宿屋はいいが、気が放せないから困る」

「その代り昼寝ひるねをするだろう」

「昼寝はするが、外出が出来ないんで窮屈きゆうくつでたまらない」

「天誅も骨が折れるな。これで天網恢々疎てんもうかいかいそにして洩もらしちまつたり、何かしちや、つまらないぜ」

「なに今夜はきつとくるよ。——おい見ろ見ろ」と小声になつたから、おれは思わずどきりとした。黒い帽子ぼうしを戴いたた男が、角屋の瓦斯燈を下から見上げたまま暗い方へ通り過ぎた。違つてゐる。おやおやと思つた。そのうち帳場の時計が遠慮えんりよなく十時を打つた。今夜もとうとう駄目らしい。

世間は半分静かになつた。遊廓ゆうかくで鳴らす太鼓たいこが手に取るように聞きえる。月が温泉ゆの山の後うしろからのつと顔を出した。往来はあかるい。すると、下しもの方から人声しんせいが聞えた。窓から首を出す訳には行かないから、姿を突き留める事は出来ないが、だんだん近づいて来る

模様だ。からんからんと駒下駄こまげたを引き擦する音がする。眼を斜ななめにするをやつと二人の影法師かげぼうしが見えるくらいに近づいた。

「もう大丈夫だいじょうぶですね。邪魔じやまものは追つ払ったから」正まきしく野だの声である。「強がるばかりで策がないから、仕様がな」これは赤シャツだ。「あの男もべらんめえに似ていますね。あのべらんめえと来たら、勇み肌はだの坊っちゃんだから愛嬌あいぎょうがありますよ」「増給ぞくぎんがいやだの辞表を出したいのつて、ありやどうしても神経に異状があるに相違ちがない」おれは窓をあけて、二階から飛び下りて、思う様打ちおぼのめしてやろうと思つたが、やつとの事で辛防しんぼうした。二人はハハハハと笑いながら、瓦斯燈わすくわの下を潜くぐつて、角屋の中へはいつた。

「おい」

「おい」

「来たぜ」

「とうとう来た」

「これでようやく安心した」

「野だの畜生、おれの事を勇み肌の坊っちゃんだと抜ぬかしやがった」

「邪魔物と云うのは、おれの事だぜ。失敬千万な」

おれと山嵐は二人の帰路を要撃しなければならぬ。しかし二人はいつ出てくるか見当がつかない。山嵐は下へ行つて今夜ことによると夜中に用事があつて出るかも知れないから、出られるようにしておいてくれと頼んで来た。今思うと、よく宿のものが承知したものだ。大抵なら泥棒と間違えられるところだ。

赤シャツの来るのを待ち受けたのはつらかつたが、出て来るのをじつとして待つてゐるのはなおつらい。寝る訳には行かないし、始終障子の隙から睨めてゐるのもつらいし、どうも、こうも心が落ちつかなくつて、これほど難儀な思いをした事はいまだにない。いつその事角屋へ踏み込んで現場を取つて抑えようと発議したが、山嵐は一言にして、おれの申し出を斥けた。自分共が今時分飛び込んだつて、乱暴者だと云つて途中で遮られる。訳を話して面会を求めれば居ないと逃げるか別室へ案内をする。不用意のところへ踏み込めると仮定したところで何十とある座敷のどこに居るか分るものではない、退屈でも出るのを待つより外に策はないと云うから、ようやくの事でとうとう朝の五時まで我慢した。

角屋から出る二人の影を見るや否や、おれと山嵐はすぐあとを尾けた。一番汽車はまだないから、二人とも城下まであるかなければならない。温泉の町をはずれると一丁ばかりの杉並木があつて左右は田圃になる。それを通りこすところかここに藁葺があつて、畠の中を一筋に城下まで通る土手へ出る。町さえはずれば、どこで追いついても構わないが、なるべくなら、人家のない、杉並木で捕まえてやろうと、見えがくれについて来た。町を外れると急に馳け足の姿勢で、はやてのように後ろから、追いついた。何が来たかと驚ろいて振り向く奴を待てと云つて肩に手をかけた。野だは狼狽の気味で逃げ出そうという景色だったから、おれが前へ廻つて行手を塞いでしまった。

「教頭の職を持つてるものが何で角屋へ行つて泊つた」と山嵐はすぐ詰りかけた。

「教頭は角屋へ泊つて悪むという規則がありますか」と赤シャツは依然として鄭重な言葉を使つてる。顔の色は少々蒼い。

「取締上不都合だから、蕎麦屋や団子屋へさえはいつてはいかんと、云うくらい謹直な人が、なぜ芸者といつしよに宿屋へとまり込んだ」野だは隙を見ては逃げ出そうとするからおれはすぐ前に立ち塞がつて「べらんめえの坊っちゃんは何だ」と怒鳴り付いたら、「いえ

君の事を云つたんじゃないんです、全くないんです」と鉄面皮に言訳がましい事をぬかした。おれはこの時気がついてみたら、両手で自分の袂を握にぎつてる。追つかける時に袂の中の卵がぶらぶらして困るから、両手で握りながら来たのである。おれはいきなり袂へ手を入れて、玉子を二つ取り出して、やっと云いながら、野だの面へ擲なぎつけた。玉子がぐちやりと割れて鼻の先から黄味がだらだら流れだした。野だはよつほど仰天ぎやうてんした者と見えて、わつと言いながら、尻持しりもちについて、助けてくれと云つた。おれは食うために玉子は買ったが、打ぶつけるために袂へ入れてる訳ではない。ただ肝癩かんしやくのあまりに、ついぶつけるともなしに打つけてしまったのだ。しかし野だが尻持を突いたところを見て始めて、おれの成功した事に気がついたから、こん畜生ちくじやう、こん畜生と云いながら残る六つを無茶苦茶に擲なぎつけたら、野だは顔中黄色になった。

おれが玉子をたたきつけているうち、山嵐と赤シャツはまだ談判最中である。

「芸者をつれて僕が宿屋へ泊つたと云う証拠しやうこがありますか」

「宵に貴様のなじみの芸者が角屋へはいつたのを見て云う事だ。胡魔化せるものか」

「胡魔化する必要はない。僕は吉川君と二人で泊ったのである。芸者が宵にはいろいろが、はいるまいが、僕の知った事ではない」

「だまれ」と山嵐は拳骨げんこつを食わした。赤シャツはよろよろしたが「これは乱暴だ、狼藉ろうぜきである。理非を弁じないで腕力に訴えるのは無法だ」

「無法でたくさんだ」とまたほかりと撲なぐぐる。「貴様のような奸物はなぐらなくつちや、答えないんだ」とほかほかなぐる。おれも同時に野だを散々に擲なぎ据えた。しまいには二人とも杉の根方にうづくまつて動けないのか、眼がちらちらするのか逃げようもしない。

「もうたくさんか、たくさんでなけりや、まだ撲なぐつてやる」とほかんほかんと兩人ふたりでなぐつたら「もうたくさんだ」と云つた。野だに「貴様もたくさんか」と聞いたら「無論たくさんだ」と答えた。

「貴様等は奸物だから、こうやって天誅を加えるんだ。これに懲こりて以来つつしむがいい。いくら言葉巧たくみに弁解が立つても正義は許さんぞ」と山嵐が云つたら兩人ふたり共だまっていた。ことによると口をきくのが退儀たいぎなのかも知れない。

「おれは逃げも隠れかくもせん。今夜五時までは浜の港屋かたに居る。用があるなら巡查じゆんさなりなり、よこせ」と山嵐やまあらしが云うから、おれも「おれも逃げも隠れもしないぞ。堀田と同じ所に待まちつてるから警察けいさつへ訴うったえたければ、勝手に訴えろ」と云つて、二人してすたすたあるき出した。

おれが下宿へ帰つたのは七時少し前である。部屋へはいるとすぐ荷作りを始めたら、婆さんが驚いて、どうおしるのぞなもしと聞いた。お婆さん、東京へ行つて奥さんを連れてくるんだと答えて勘定を済まして、すぐ汽車へ乗つて浜へ来て港屋へ着くと、山嵐は二階で寝ていた。おれは早速辞表を書こうと思つたが、何と書いていいか分らないから、私儀わたくしぎ都合有これあり之辞職の上東京へ帰り申候もうしそらにつき左様御承知被下度候さようごしやうちくだされたくせら以上とかいて校長宛あてにして郵便ゆうびんで出した。

汽船は夜六時の出帆しゅつぱんである。山嵐もおれも疲れて、ぐうぐう寝込んで眼が覚めたら、午後二時であつた。下女に巡查は来ないかと聞いたら参りませんと答えた。「赤シャツも野だも訴えなかつたなあ」と二人は大きに笑つた。

その夜おれと山嵐はこの不浄な地を離れた。船が岸を去れば去るほどいい心持ちがした。神戸から東京までは直行で新橋へ着いた時は、ようやく娑婆へ出たような気がした。山嵐とはすぐ分れたぎり今日まで逢う機会がない。

清の事を話すのを忘れていた。——おれが東京へ着いて下宿へも行かず、革鞆を提げたまま、清や帰ったよと飛び込んだら、あら坊っちゃん、よくまあ、早く帰って来て下さったと涙をぼたぼたと落した。おれもあまり嬉しかったから、もう田舎へは行かない、東京で清とうちを持つんだと云った。

その後ある人の周旋で街鉄の技手になった。月給は二十五円で、家賃は六円だ。清は玄関付きの家でなくつても至極満足の様子であったが気の毒な事に今年の二月肺炎に罹つて死んでしまった。死ぬ前日おれを呼んで坊っちゃん後生だから清が死んだら、坊っちゃんのお寺へ埋めて下さい。お墓のなかで坊っちゃんの来るのを楽しみに待つておりますと云った。だから清の墓は小日向の養源寺にある。

(明治三十九年四月)



坊っちゃん
夏目漱石 著

[[青空文庫図書カード](#)]

底本：「ちくま日本文学全集 夏目漱石」筑摩書房

1992（平成4）年1月20日第1刷発行

底本の親本：「夏目漱石全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年10月27日第1刷発行

※ 底本の注にれば、本作品の原稿には、「そのうち学校もいやになった。」の後に、漱石自身による2字あけの指定があるという。このファイルでは、その情報にもとづいて、当該の箇所を2字あけとした。

※ 底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：真先芳秋

校正：柳沢成雄

1999年9月13日公開

2004年2月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

PDF 変換

Editor : Tomoyuki Kawano

Tools : MacOS X 10.6.2(合成) + egword universal 2.0.2(本文、奥付)

+ Omni Graffiti Professional 5.2.1(表紙)

Fonts : Web-O-Mints + DT Flowers + ヒラギノ明朝 Pro W3